

KH249-H347



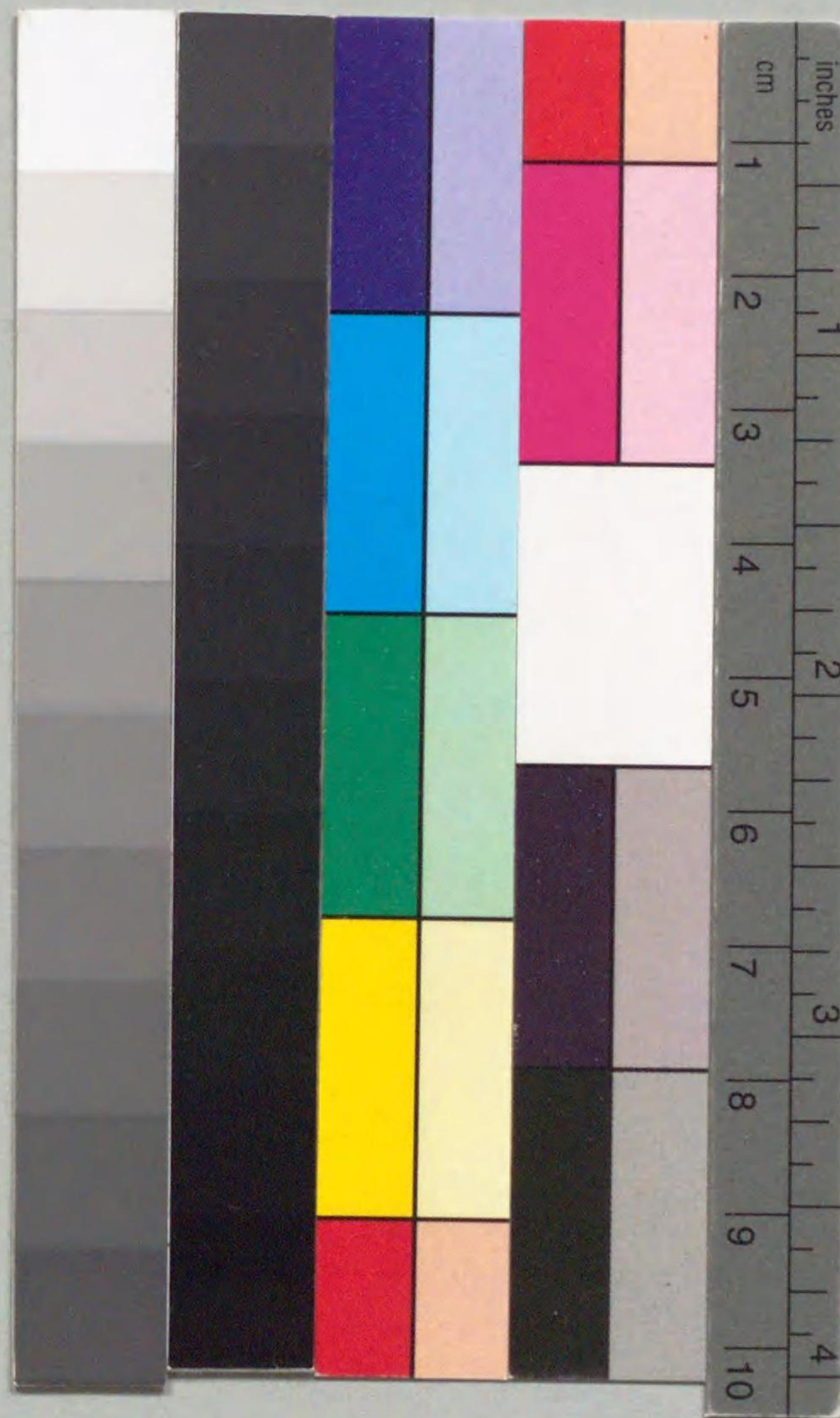
\*1200500712755\*

Ⅷ 書叢品小恋風

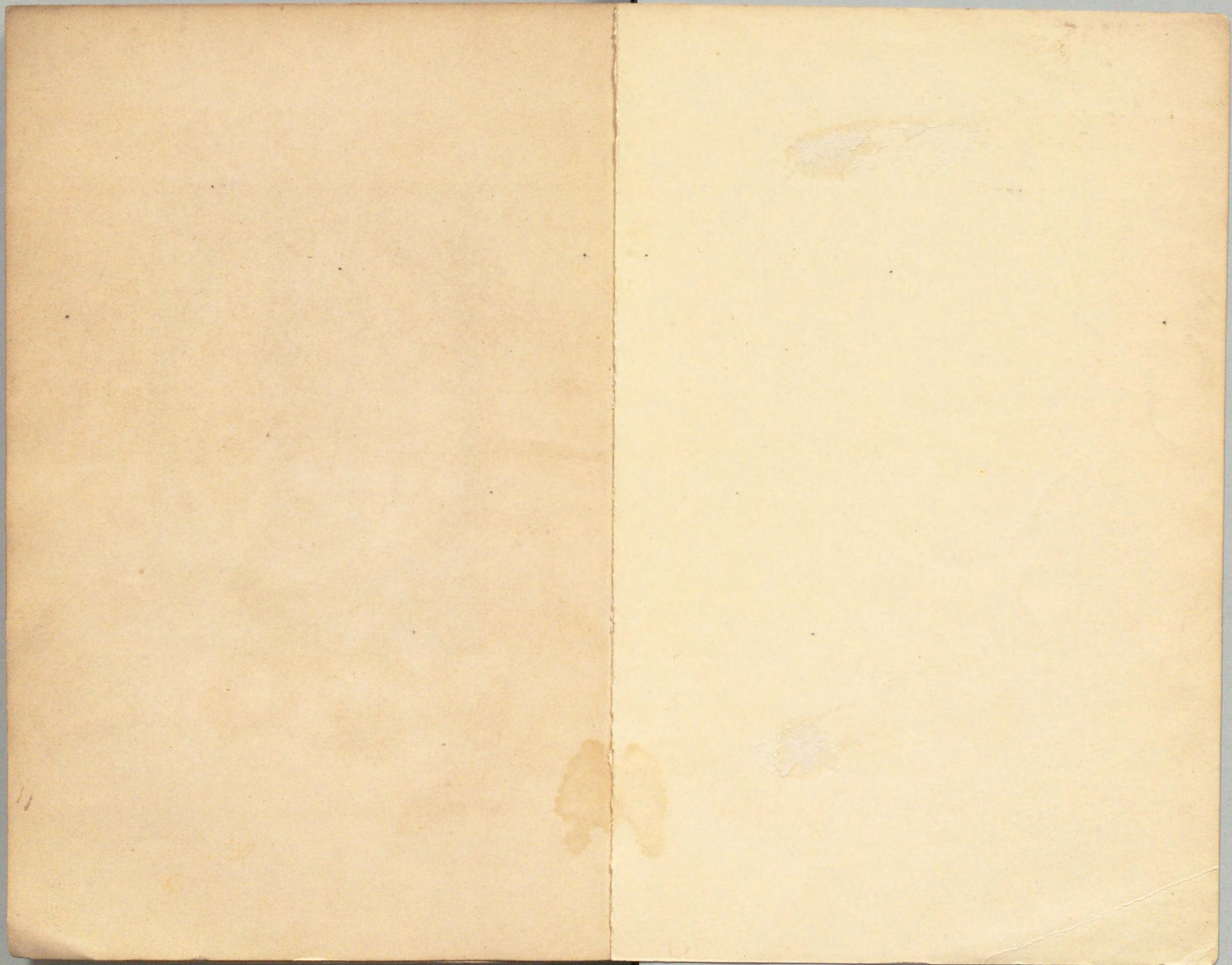
# 板畫小がわ

著 雄 武 藤 加

〇 複写









· Ⅷ · 書叢品川想感 ·

わが小畫板

加藤武雄著

· 社 潮 新 ·

謹呈  
 先生  
 加藤武雄  
 謹啓



KH249-H347

我が小畫板

目次

馬車の上	わかかれ	波川夫人	上草履	村芝居	手紙	夢	ヒロイズム	小品八つ
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
三	七	三	八	五	三	九	五	五



I 種  
W



\*1200500712755\*



娘	.....	三六
寶石の夢	.....	三五
諸ぬす人	.....	三三
無花果	.....	三〇
卓上	.....	二五
或日の客	.....	七一

烟霞抄

男鹿半島	.....	八五
會津小記	.....	九六
旅のノオトから	.....	一〇八
みさごの夢	.....	一〇八
鳴子温泉	.....	一一〇

清澄山	.....	一一三
-----	-------	-----

文壇の一隅にて

地方文學と都會文學	.....	一二九
隨筆と小説	.....	一三四
文藝の社會的浸潤	.....	一三二
階級藝術について	.....	一四一
斷片語	.....	一四六
才	.....	一四六
農民	.....	一四九
作家の意識	.....	一五二
イバネスとホオエル	.....	一五三
チエホフ	.....	一五五



夢	一五九
偏倚性の尊重	一六一
小説家的幻想	一六四
藝術と普遍性その他	一六六
藝術と實行	一七三
彼等は笑ふ	一八〇

卓上小閑

卓上小閑	一九二
私のお伽噺	一九九
「方丈記」その他	二〇一
お七	二〇五
口笛	二〇九

かけす	二二二
不幸	二二三
靴墨の匂ひ	二二四
鋤禾日當午	二二六
夢の話	二二九
悪夢	二三三
偶然の死	二三三
春	二三六
私の好きな作家	二四〇
祭りの頃	二四八
彼岸過ぎ	二五八

恩地 孝装 畫



我が小畫板

加藤武雄著



我が小畫板

我が小畫板

明治九年



小品 八つ

ヒロイズム

尋常二年の時だつた。同じ級に川向ひの隣村から通つて来る六ちゃんといふのが居た。私達の部落に六ちゃんの伯母さんの家があつた。六ちゃんは、家の使ひを云ひつかつて、学校の歸りに、私達と一緒にその伯母さんの家に来る事があつた。六ちゃんは面白い子だつた。すこし鉢の開いた頭をふり立て乍ら、川向ひではやる妙な流行唄はやうたなどを歌つて聞かせた。よそから来たお客様といふ感じもあつて、私達はさういふ時みんな六ちゃんを大事にした。

その日は、六ちゃんと、私と、儀一といふ子と三人だつた。六ちゃんは伯母さんの家へ届けるのだといつて、何が入つてゐるか知らないが、かなり大きな風呂敷包を一つもつてゐた。私



と儀一とは、交る／＼それを持つてやつた。町を出外れて畑の中の縣道に出た時、私達の前を一臺の馬力車が行つた。六ちやんは名うての腕白者だ。その馬力車の尻に飛びついて兩足を地に引摺つて埃をあげ乍ら、

「ほうらあ！ 自動車！ 自動車！」と喚いた。

「よせ！」馬力曳の男は、振返つてどなりつけた。六ちやんは止めた。が、すこしすると又始めた。それが二三度繰返されるうちに、馬力曳の男はすっかり腹を立てた。

「この糞餓鬼！ こつちへ來う！」さう叫びながら六ちやんの處へ飛んで來て、逃げようとする襟首をむんづと掴んだ。而して、片手に六ちやんの襟首を、片手に手綱を握つたまゝ、物も云はずに歩き出した。私達は、はら／＼しながら、そのあとについて歩いた。やがて、道が二つに岐れるところへ來た。私達の部落へは右へ行かねばならない。ところが、馬力曳は、六ちやんの襟首を掴んだまゝ、ずん／＼左の方へ行つて了ふのだ。

私達は、道の岐れ目の、石地藏の前に立ちとまつて、暫くぼんやりと、引き摺られゆく六ちやんの後影を見送つてゐた。轍の音が、ごろ／＼と遠くなつて、その馬力車が道の曲り角に隠

れて了はうとする時、

「六ちやんが、伴れて行かれる！」と、儀一が泣聲で叫んだ。而して、「わあ！」と泣きながらその馬力車の方へ走り出した。私も儀一の泣聲に誘はれて、「わあ！」と泣き出した。泣きながらも、斯うして居られぬといふ氣になつて、私も儀一に續いて走り出した。二人は馬力車に追ひついた。而して、

「をぢさん、かんにんして呉れ！」と交る／＼頼んだ。が、その馬力曳のをぢさんは、餘程蟲の居所でも悪かつたと見えて、なか／＼かんにんして呉れなかつた。六ちやんは、しく／＼泣いてゐた。私と儀一とは、泣いたり、喚いたりしながら、馬力車のあとについて駆けた。

さうして隣村の村境の長い吊橋の橋際まで來た。そこで、運よく私達は、部落の人に逢つた。而して、泣き乍らその人に訴へた。その人は、馬力曳の「馬鹿な真似」に對して、さん／＼けんつくを喰はせて、六ちやんを取り戻して呉れた。私達は無事で私達の手に歸つた六ちやんを左右から圍んで、或る感激の爲めに再び涙含んだ。六ちやんが、案外平氣な顔をしてゐるのがひどく物足り無い氣がした。



私達の行爲は、賞讃され、感謝された。六ちゃんの家のお母さんは、小さな菓子折などをもつてわざわざ私達の家にお禮に來た。私達は嬉しかつた。あの五六町の街道を泣き喚き乍ら、馬力車の後を追ひかけたといふだけの事も、六ちゃんの危難を救ひ得たといふ點で、正しく私達の英雄的行爲でなければならなかつた。私達は、お伽噺で知つてゐる、王子の危難を救つた勇少年の話に、自分を擬へて見ずにはゐられなかつた。而して、私達がその危難を救つたといふ事實が、一種の偶像的な氣分を、私たちの六ちゃんに添はしめた。實際、私達は、それからといふもの、一層六ちゃんを大事にした。六ちゃんが外の何人のもでもなく、唯私と儀一と二人だけのものだといふ氣がした。

だが、私達の偶像は、何といふ不出來な偶像だつたらう？ 六ちゃんが、些とも學課が出来ないで、いつも先生に叱られたり、時によると、教場の隅にひつぱり出されて立たせられたりするのを見ると、私達は云ふに云はれない情無い氣がした。

が、未だその位ならよかつた。尋常三年に進級しそこなつた六ちゃんは、家の方の都合もあ

つたのだらう、それきり學校をやめて、私達の近所の、その伯母さんの家に奉公に來る事になつた。六ちゃんの伯母さんはなか／＼やかましやだつた。六ちゃんは、外の奉公人同様に、物置の隅に臥起させられて、「六公！ 六公！」と呼ばれて朝から晩までこきつかはれてゐた。どうかすると、作代の男にした／＼か横面を殴りつけられて、涙と涙とを一緒くたに顔になすりつけてめそ／＼泣いてゐる事があつた。

私達は——少なくとも私は、それを見るとすつかりまゐつた。私達の——私のヒロイズムも、それでもうめちやめちやだつた！

## 夢

私は毎日、或る雑誌社の編輯室に出かけて行く。而して窓際の卓子に倚つて、こつ／＼と仕事をする。同じやうな事が毎月々々繰返される、單調な、怠屈な仕事だ。時々、ペンを投げ出して、



「あゝ——」と大きなあくびをする。あくびと一緒に出了た涙で曇らされた眼をあげて、壁を見廻し、天井を見あげる。壁はぎつしりと本のつまつた本箱で蔽はれてゐる。私は立上つて、その本箱から一冊を抜き出して来て、ばらばらと頁を繰つて見る事がある。が、矢張讀まうとする興味は起らない。——それに今は忙しい。

さう氣がついて、またペンを取上げるが、すこしするとまた飽きる。で、また、ペンを投げ出して、今度は身體を捻ぢ向けて、右側の窓から、窓越に外を見る。

路地一つ隔て、そこに二三軒の家が見える。一番手前の家は勤め人の住居らしく、夏だからいつも明け放してゐるので、夫の留守の茶の間に裁縫をしてゐるおかみさんの姿などがよく見える。お上さんが眼をあげる。此方の眼とぶつかる。私は、大へん悪いことをしたやうな氣がして、慌て、眼を反らす。而して今度は、その家の黒塀の内側の、檜葉の樹の梢から、するすると蔓を延ばして、地上から斜めに電柱の頂上まで張られた一筋の電線にからみついてゐる朝顔の花に眼をとめる。瓦屋根を背景に、輪の小さい花が三つばかり、可憐な紅くれたかの色をふらふらと微風に揺つてゐる。

じつと、その花を見てゐると、見てゐる間にその蔓がする／＼と電線に傳はつて、大空高く伸びて行きさうに思はれる。

これは面白い——と私は思った。

それから、毎日、その朝顔に氣をつけてゐる。少しづつ伸びて行く。花も毎日一つか二つづつ數を増してゆく。一番上の方は、空の緑を背景として、一層鮮かな紅を、朝の微風に翻してゐる。そこだけ見ると、ふと大空に浮んだ幻の花模様——と云つたかたちである。

その前の晩、私は夢を見た。

あの朝顔が、電線傳ひに、電柱の頂點まで届いた、と見る／＼、電線傳ひに何處までも何處までもする／＼と伸びて、東京中の空に伸びひろがつたところを——。而して、する／＼と伸びるそばから、一つ、二つ、五つ、七つ、十、百、千、萬と花を咲かして、幾百萬とも數知れないあの小さな紅あかい花が、此の大きな都會の空一めん、眼さめるばかり美しい花の覆ひをして、了つたところを——。



が、その日來て見ると、どうしたのか、朝顔はすっかり撈りとられて、影もなくなつてゐた。私の生活は、相變らず單調だ。怠屈だ。而して憂鬱だ——。

## 手紙

ピン公、本名は貞吉である。今年九つ、生れは越中の魚津である。魚津といへば、五六年前大風のやうに日本國中を吹きまくつたあの米騒動の本もとだ。あの米騒動は、魚津町の女房達の一揆から初まつたといふ事だが、ピン公のおふくろも、その女房一揆の中の一人だつたかも——いや、ことによると大將株だつたかも知れない。一揆の大將をおふくろにもつた丈けあつてピン公は頗る精悍だ。

ピン公の小さな身體の中は、バネ仕掛になつてゐるのかも知れない。ピン公は實によく跳ねる。ピン公の役目は、物を運んだり、取次いだり、一寸した使ひ歩きをしたりするのが主だが、「ピン公！ 荷繩を持つといで！」番頭さん達がこんな風に云ひつけると、ピン公は、

「はい！」と言下に答へる。而して、

「ほらしよ！」と掛聲をしながら、威勢よく駆け出す。駆け出すといふよりも跳ね出すのだ。ピン公は跳ね出す時、屹度「ほらしよ！」と云ふ。「ほらしよ！」がピン公のモットオだ。

小僧はみんな七人もゐるが、ピン公が一番年下だ。小僧の世界は腕力はれ権力だ。ピン公がいくら勝氣でも、身體も小さいし、力も弱いし、とても彼等にはかなはない。かなはないが、負けてはゐない。殴られれば噛みつく、投げられればむしゃぶりつく。おかげで、ピン公のたまには瘤の絶えた事はないが、いくらひどい目にあつてもピン公は決して泣かぬ。全くピン公は精悍だ。

二月に一度位は、ピン公の家から手紙が来る。ピン公の親父が書きさうもないうまい字だ。多分代筆だらう。字はうまい代りに文句は簡單で、「謹啓陳者——」といふ調子の、通り一遍の時候の挨拶、それに、御主人様によろしくと書き添へてあるのが關の山だ。ピン公は、それを番頭さんのところへもつて行つて讀んで貰ふ。

「うむ。書いてあるぞ、書いてあるぞ。(貞吉も精出して働いて——) ええと、(精出して働い



て、あまり喧嘩をしてはいけない。」と、(番頭さんのいふ事はよくきき。)「いゝか、(番頭さんのいふ事はよくきき、お使ひに出た時、決して道草を喰つてはならぬ。)と。いゝか、まだあるぞ、(近頃でも矢張寢小便をしてゐますか、寢小便が止まらないやうだつたら番頭さんにお灸を——)よくきけよ、(お灸を据ゑてもらふがよろし——。)と。」

ピン公は首をすくめて、きまり悪さうに笑ひながら聞いてゐる。

ピン公は、読んで貰つたあとの手紙を叮嚀に封に戻して、しつかり懐中<sup>ふとろ</sup>にしまひ込む。寝る時にも、手紙を抱いたまま寝る。郷國<sup>くわに</sup>から手紙が来た五六日の間は、ピン公はいつも程元氣がない。どうかすると、そこらに姿の见えない事がある。探して見ると便所の中に居る。便所の壁に面をあてゝ、しくしくと泣いてゐる。ピン公の手の中には、その手紙が握られてゐる。

「ピン公が、またはじめたぞ。」と番頭さん達は笑ふ。一番年とつた大番頭さんは、一寸しめつほい眼付をする。

「ピン公！ 郵便を出して来い、大急ぎだぞ！」

「ピン公！ あの自轉車を此方へ入れとけ！」

「ピン公！ 早くそれを包んで了ひな、何を愚圖々々してる！」

さういふ時には、こんな工合にあとからあとから用を云ひつけるに限るのだ。すると、ピン公は、はしやぎ出す。「ほらしよ！」「ほらしよ！」「ほらしよ！」と、ピン公はバネ仕掛のやうに跳ね出す。

ピン公は、さうして、ホームシックからすくはれる。

## 村 芝 居

市川紅若といふ役者は、あまりいゝ役者では無いのだらう。役もよく無かつた。

が、この役者には、私には一つの思ひ出がある。私は紅若の舞臺を見乍ら、いつの間にか、十幾年か前の、幼い昔の思ひ出に浸つてゐる自分に氣がついた。——それは、私が八つか九つの時である。私の村に東京役者の一行がやつて来て、五六日打つた事があつた。邊鄙な村の事で、そんな事は十年に一度もあるかないかだから、霜枯の桑畑の間を、旗を立て太鼓を鳴らし



ながら、人力車が二三臺威勢よく觸れて廻ると、村中が物に憑かれたやうに騒ぎ立つた。村の中央の、K——といふ廢驛の端れの、没落した家の邸あとに、丸太組の舞臺がしつらへられた。初日から満員の上景氣で、殊に、座頭ましらの市川紅若が、藝もうまい上に、水の垂れるやうな美男だといふので、村の女達は皆夢中になつた。其時分、私の家には七八人の機織女が居たが、毎晩二三人づゝ代るゝ見に行つて、而して、すつかり紅若に魅せられて了つた。織子達の中で一番美しく、一番おとなしく、而して私の子供心にも一番好きだつたおせんといふのが、とりわけ、ひどく紅若にのぼせて了つて、それから一週間ばかりぼんやりとして仕事を手につかぬといふ風だつた。——私は眼の前に動いてゐる老優紅若の姿を空虚な眼に映しながら、仲間にかかはれて眞赤になつて納屋の中に逃げ込んだおせんを、納屋の隅の藁束の中に身體を埋めるやうにして前掛の紐を結んだり解いたりしながらじつと何か考へ込んでゐたおせんを、祖母に呼びつけられてひどく叱られて涙含んでゐたおせんを、あり／＼と思ひ浮べてゐたのであつた。

東京役者は滅多に來なかつたが、近い村に仕事の片手間にする芝居師があつた。一年に一度位は、その一座が買はれて來た。太十、玉三、千本櫻、手習鑑——出しものは大抵そんなところだつた。馬力曳の十さんといふのが座頭格で、久吉ひさよしや松王をよくやつた。重次郎は足袋屋の長さんといふ跛足の人だつたが、あの手負の出は地で行つて眞に迫つてゐた。お里をやつた榮さんといふ男は、眼鼻立はよかつたが、髯が濃いので、口ばたがどす黒いのが玉に疵だと惜まれてゐた。提灯屋の彦さんといふのは、藝も落ちたが、ひどく記憶が悪くて、梶原をやつても絶句ばかりして、いがみの權太に一句々々教はりながら危ツかしくせりふを運んでゐた。——だが、どんな名優の舞臺でも、この粗末な素人芝居ほど熱心に觀られたものがあるだらうか？村の人達——殊に若い娘達などはそのカンテラの灯のほの暗く揺れる舞臺の上に心のすべてを吸ひよせられ乍ら、霜の凍る寒空の下に夜更まで立ちつくして、最後の一幕まで見落さずに歸るのである。

「宜かつたねえ。」

「面白かつたなあ。」



溜息をつくやうに、さう繰返してまだ眼前にちらつく舞臺の幻影を恍惚とした眼で逐ひながら、——可憐な粗樸なロマンチスト達よ！ 彼女等は、舞臺の上の人物に自分をひきうつして考へるのである。たとへば、隣村の素封家の次男息子に思はれてゐるお千代が、ほんとお里のやうだと自分を嘆けば、此の春から親の家を逃げ出して、好きな男と間借の世帯をもつたおていは、自分を袖萩よそに擬へて一寸涙含む。情人を隊にやつてゐるお玉は、初花姫のかなしみを描き、つい近頃縁家から出戻つてゐるお菊は、時姫の運命をしみじみと身に沁みて考へる、といふ風に——。

## 上 草 履

私が十七の時だつた。

私はその時分、自分の生れた家から、二里程の道程を毎日往復して、或る村の小學校の代用教員に出てゐた。

その時分の私は、一個の嫌人主義者ミサンズロピストだつた。生來偏屈な、内氣な私は、不仕合せな境遇の爲め、いろ／＼の壓迫でいやといふほどいぢめつけられて、すつかり心持がいぢけてゐた。やうやく世間に出はじめた頃から、早くも白眼はくがんに世を視る事を教へられた私は、たとへば途で知る人にあつても頭を反けて通り、或は、人に逢ふ事がいやさに、わざと何人も通らない小徑を選んで行くといふ風だつた。私は、日の光を憚るもぐらもちのやうに人を怖れた。怖れから、人を憎んだ。おどおどとふるふる私の眼の隅に、いかにはげしい反抗と呪咀との思ひが燃えてゐた事であらう。

どこへ行つてもさうだつたが、私は、その小學校でも、變物扱ひにされて、何人からも好意を有たれなかつた。いや、たとへ先方がいくらかの好意を寄せてくれたとしても、私のかたくなな心は、素直にそれをうけ入れようとはしなかつた。私はその多くの同僚達とも、必要以上の口を利いた事が無かつた。私は路傍の石ころのやうに淋しく冷かに而して孤獨だつた。

二里の路は辛かつた。石の高い凸凹路でこぼこみちで、雨が降ると、文字通りに泥濘が脛を没した。私は雀の餌ほどのさゝやかな月給——それが、私の家の月々の生活には缺く事の出来ないものだつ



た——の爲めに、二年餘もその路を往復しなければならなかつた。

「大へんだなあ、先生。」

小使の婆さんは、私を見るとかう云つた。もう六十過ぎて、ろく／＼足腰も立たぬからだ身體を、鞭うたれるやうに追ひつかはれてゐる婆さんだけが、かう云つて私をねぎらつて呉れたのであつた。私は、却つてそれが不愉快だつた。世の中にこんな婆さんだけが自分の同情者だと思ふと何となく腹立たしかつたのだつた。

二年ばかりして私はその學校から、他の學校に轉じる事になつた。勿論、何人も私を惜んで呉れる者などは無く、私も、そこに惜む可き何の名残もなかつた。私は唯、教室の窓から毎日見馴れた一本の梧桐あせりの樹だけに、心からの左様ならを告げて、十一月末の曇つた日の夕方近くその學校の門を出た。

學校の門を出て、淋しく冬枯れた野道を二三町來た時だつた。

「先生。」と呼ぶ聲がするので、ふりかへつて見ると、あの小使の婆さんが、ちよこ／＼と小走りに走つて來るのだつた。

「先生。」と、息をきらしながら漸く走りついた婆さんは、手にもつた古い上草履を私の前にさし出して、

「これを、お忘れなかつたから持つて來ただあよ。」と言つた。

「ありがたう！」と云つたが、私はそれを受取らうとはしなかつた。そんな古草履は、どうでもいゝのだつた。私は、素氣ない調子で言つた。

「いゝんだよ。そんなもの！」

「さうかえ。」と婆さんは不本意さうに云つたが、婆さんのじつと私を見た眼には、涙が一ぱいにたまつてゐた。

「先生、長え事、馴染だつたが、愈々これでお別れかえ！ 私あもう年寄だで、二度とお目にかゝれるかどうかから無い。」婆さんはさう云ひながら、上草履をもつた手の甲で顔を掩ふやうにした。而して、涙聲で云ひつゞけた。「先生も御苦勞なすつたが、御苦勞甲斐は屹度ありますよ。先生は辛抱人だから、今に屹度出世なさる——。」

だが、何といふ不靈な私の心だつたらう？ 私は、別れを惜んで泣く婆さんを眼の前に見なが



ら、唯、めんだう臭い気がした丈けだつた。私は、尙ほ何か云はうとする婆さんを、その野の道の雀色の黄昏と、冷たい夕風との裡に残して、逃げるやうに歸りの途を急いだのであつた――。

それから二十年、私もいつか世に老いた。

私はあの時あの婆さんの私に寄せてくれた好意と愛情とを正當に受取る事が出来なかつた。が、それから後、いかに屢々、あの婆さんの事を思ひ出した事か？ あの黄昏の野の路で、私の爲めに別れを惜しんで泣いて呉れた婆さんの姿――それは、いつまでもく、いや、時が経てば経つほど、益々深まつて来る感動を以て、私の眼に、心に浮んで来るのである。

## 波川夫人

私は、何心なく「婦人畫報」の口繪のペエジを繰つてゐた。淑女達、令嬢達の、とりぐに美しい繪姿の上に、軽く視線をすべらしながら――。

私の目が、「N銀行Y市支店長波川氏の家庭」と題されたペエジに落ちた時、私の心をちらと掠めた何かがあつた。それが何であるかを慥かめる爲めに、私は、次のペエジを繰らうとする指先をとめて、もう一度、その波川氏の家庭の一家團欒の寫眞を見直した。

嚴めしい口髭を生やした洋裝の青年紳士波川氏が、三つばかりの男の兒を抱いて椅子に掛けてゐる。その背後に、波川氏の夫人――髪を七三に分けた美しい若い婦人が、微笑を含んで立つてゐる。その若い夫人の顔と、波川といふ姓とが私の頭の中で結びついた時、私の心に再び何ものかが閃いた。私は寫眞の下部に記された細かな文字を読んだ。夫人すゞ子の君――とある。

すゞ子、波川すゞ子。――二三度其の名を繰返してゐる中に、私の眼の前には、一つの幻影の畫面が浮び上つて來た。仄かに、やがて鮮かに――私はいつの間にか、十七八年の前、私が十五六の頃の、或るシインの中に私自身を見出してゐた。

Y市のT町。そこは市中での高臺であつた。私は夕方になると、家の前の小路を斜めに、坂の上の、とある空地に出て、ぼんやりとそこに立つてゐた。そこからは、街々の藁の彼方に、



Y港の港灣の一部が見晴らされた。幾本もマストを立てた大きな商船が、二艘や三艘は、きつとそこに碇泊してゐた。

後頭部で兩方の掌を組み合せ、低く口笛を吹き鳴らし乍ら、私は、港の方を眺めた。私は三四箇月ばかり前、あの山の中の小さい村の父母の家を出て來たので、海や汽船が珍らしく思はれたのである。——だが、さうして、ひとりで立つてゐる中に、私は、淋しい悲しいたより無い氣がして來た。志を立て、故郷を出た私は、その時分或る家に寄食してゐた。半ば書生のやうな事をしてゐたのだが、初めて觸れた世間といふもの、他人といふものの味が、私の幼い心には堪へ難いまでに冷く苦く滲みてゐた。

どうかすると、私は、その荒涼とした風景——さうだ、そこから見るすべてのものが、荒涼とした感じを私に與へた——に對して、我知らず涙含む事さへあつた。

「書生さん、何してるの?」

その時、馴々しい調子で、斯う私に話しかけたのは、十ばかりの、可愛らしい少女だつた。色白の細面で、額が少し廣過ぎると思はれる外に、そのまゝ人形にしたいやうなきれいな子だ

つた。まつ毛の長い圓らな眼、小さい赤い唇、異人の子のやうなブロンドの髪を、房々と背にさげて、幅廣のリボンをつけてゐた。一體にきやしやな身體つきで、長い袂を蝶のやうに、ひらくと走り寄つて來るのであつた。

「お嬢さんのおうち、何處?」

「あそこ、そら、あの——。」と云つて、小女は空地の向うの、門構への家を指して見せた。その軒燈に、「波川」と記されてあるのを見て、

「波川さんと云んですね。お名前は?」

「すゞ子つて云ふのよ。」

そんな風にして波川すゞ子といふその少女の姓名を知つたのは、その少女と口を利き合ふやうになつてから、三回目か四回目の事だつた。私は、R——といふ自分の姓を教へた。で、少女は、「書生さん」といふ代りに、「Rさん!」と呼ぶやうになつた。私は、毎日、夕飯を濟してから三十分ばかりの散歩時間を待兼ねるやうにして、その空地の方へ出て行つた。而して、すゞ子の出て來るのを、待遠しく待つたのであつた。そつとその軒先に行つて見る事もあつた。覺



束ないしらべの琴の音が、門の内から漏れてきこえた。その琴の音が止むと、やがて、ぼたぼたと小さい足音がして、すゞ子が、長い袂を振りく門から走り出て来る——。而して、

「Kさん、待つてた？」と云ひながら、無邪氣に私の袖につかまるのであつた。

「琴のお稽古？」

「ええ。六つかしくていやなんだけど。」と、すゞ子は娘のやうなはにかみを見せて、一寸しなをした。

私は、何を此の少女と話したらう。何も彼も皆忘れて了つた。が、毎日、雨が降らない限りは、すくなくとも十分位づゝは、その空地の枯芝の上で、すゞ子と二人の時を過した。其時分の私にとつて、それは何といふ楽しい、甘い時間だつたらう。

私は、すゞ子の話をきゝながら、すゞ子のおさげの端を指で絡んでちよいくと引張つた。

「あら、いやよ、Kさんは——。」と、すゞ子は一寸眉を擧めて、たしなめるやうに私を見る。

而して、「髪がこはれてしまふぢやないの？」と、肩をゆすりながら甘えるやうな調子で云ふ

——その幼なびた嬌態が、私にはうれしかつた。無口な、ぶこつな田舎の少年である私には、

さうして、彼女のおさげの端を引張る事の他に、彼女に對する愛情を表現する方法を知らなかつたのであつた。

——今、寫眞で見る波川夫人？ その房々とした髪に、私は眼を止めずに見られなかつた。

私の頬には、微笑が上つて來た。

美しい波川夫人よ——。私は、その寫眞に向つてかう語りかけ度い氣がした。が、しかし、

波川夫人は、もうすべてを忘れて了つてゐるに違ひ無い——。

## わかれ

去年の九月、東北の方へ十日ばかりの旅行を試みた。その時の事であつた。

男鹿半島の島めぐりをして、船川といふ港町に寂しい一夜を明かした私は、青森の方へ廻る豫定を變へ、秋田にひきかへして、仙臺に出る事にした。陸奥の夏は闊けて、汗と埃とによこ



れた私の浴衣の袖を、どうかすると、冷々とした風が吹き翻した。私は、汽車の窓から、そのあたりの自然や風物を、物めづらしく眺めつゞけた。而して、路傍の草交りに咲いた草の花のほのかな色に、ほのかな旅の愁を寄せたりした。

秋田の停車場で、私達の室に、一人の女學生が、大型のスケートを赤帽に擔はせて入つて来た。十八か九位の、色の白い、眉の濃い、眼の美しい人だつた。秋田の女は美しいと聞いてゐた私は、實際に来て見て、その噂の嘘で無い事を知り、その秋田の女の美しさに、一つのタ イプのある事を知つたが、この女學生も、生粹の秋田型と見られる美貌の持主だつた。此の町の人で、東京の學校に入つてゐるのが、暑中休暇を了へて今歸る處なのだらうと私は思つた。その女學生は、私と斜め向うの處に席をとると、一わたりそつと車中を見廻すやうにして、しばらく落着かぬ風にしてゐたが、やがて、バスケットから小さな本を出して讀み初めた。緋の色の表紙をした、きれいな本であつた。多分詩集か何かであらう。秋田から五つ目か六つ目の横手といふ停車場に汽車が止まると、その女學生は窓の外へのり出すやうにして、連りにプラットホームの方を眺め廻した。

「ここよ、ここよ。」と、彼女が聲を擧げた。見ると、乗り降りの人々の間を縫ふやうにして、此方に走つてくる、日本髪の娘があつた。

「まあ、私、すゐぶん探したのよ。すつと端から見て來たのよ。」と、窓を下から見上げるやうにしながら、その娘は息忙しくかう云つたが、やがて入口の方から室の中にはひつて來た。その娘も、矢張美しかつた。淋しい、清らかな感じのする美しさであつた。

「まあ、よかつた。私、たうとう逢へないのぢや無いかと思つた。」と、日本髪の娘は、入つて來るなり、相手の両手を自分の両手でしかと握りしめながら斯う云つた。

「本當によかつたわ！」と、女學生の方も感激した調子で云つたが、相手の髪に眼をやりながら、「日本髪に結つてらしつたんでせう。だから、すつかり見そこなつて了つたのよ。」

「へんでせう。私、いやなだけで。」

「いゝわ。よく似合ふわ！」

二人は、びつたりと身を寄せて頬と頬とが擦れ合ふばかりにして、懐かしさに躍り立つといふやうな調子で、二言三言何か語り合つたが、日本髪の娘はやがて、傍に置いた小さな風呂敷包



みをとりにあげて、中から三四冊の本を出した。そして、

「これをHさんへこれをMさんへ、それからこれを貴女へ——。」と微笑して云ふのであつた。  
「下さるの？」

「えい。お邪魔でせうけど。」と、日本髪の娘は風呂敷を膝の上でおし揉みながら、

「形見なのよ。」と、小さい聲で云つた。

「お形見？」

「えい、私もうこれきりお目にかゝれないかも知れないわ。あなたにも、皆さんにも。——こんな御本も、もう読む事はないわ。これ、昨日東京から届いたばかりなのよ。」と、日本髪の娘は、相手の膝にのせた一冊に一寸指を觸れて、

「でも、私、もう讀んだつて仕方がないわ、あなた、私に代つて讀んで頂戴！」と言つた。それは外國の小説の翻譯らしかつた。女學生の方はそれをとりあげながら、

「でも——。」と、何か云ひかけたが、その時、五分間の停車時間のきれた事を知らせる爲めに、汽笛が鳴つた。日本髪の娘は、もう立ちあがつてゐた。

## 馬車の上

府中から國分寺へ行くガタ馬車は、立場を後に走り出した。

十月の末の或る日だつた。午後二時の日は灰色の雲の底から淡い寒い光を投げ、武藏野特有の空ツ風は、梢を鳴らし、落葉を轉がし、轍のあとの埃を吹き上げた。その埃が一かたまりになつて斜めに道を横切つたと思ふと、その中から生れでもしたやうに、一人の男の此方に駈けて來る姿が見えた。



「おうい、おうい。」

その男は、息切れのする聲で斯う呼んだ。

「おうい！」と答へて、馭者は馬車を停めた。男はいきせき切つて走りついて、そゝくさと馬車に飛び乗つた。馬車はすぐに動き出した。男はよろめきながら私の前に腰をおろすと、きよときよと車内を見廻した。私と、近在の百姓らしい老人と、酌婦體の若い女と、それから收税吏といつた格好の背廣服の男と、それが乗客のすべてだつた。男は、その一人々々を順々に見廻したが、やがて、

「あゝ！」と溜息とも呻き聲ともつかぬ聲をあげながら、額際に浮いた汗をつるりと平手でこすつた。年は四十位だらうか、思ひ切つて小さな男で、古びた外套を着、小さな風呂敷と、毛繻子の洋傘とを膝にのせてゐた。身體相應に小さい顔は、一つの握り拳のやうに瘤立つて、濃い眉に迫つた圓い眼が落着きなく輝いてゐた。微酔を帯びて赤黒く染められた顔には、ひどく昂奮した表情があつた。

「あゝ！」とその男はもう一度、その溜息とも呻き聲ともつかない聲をあげた。車内の者の注

意を自分の方にひきよせようとするやうに。――

が、何人もその男に特別の注意を向けようとする者は無かつた。その男は手持無沙汰らしく押黙つて、又しばらく、その物に驚いたやうな眼をきよときよと動かしてゐたが、やがて、外套の衣囊からウイスキーの小瓶を出して喇叭呑みに一口飲むと、

「どうだね？」と云ひながら、その瓶を私の前に突出して、「一口やら無えかね？ 良い酒だ！」

私は一寸面喰はされ乍ら、

「やあ！」と云つた。而して要らないといふ意味を示す爲めに手を振つて見せたが、

「盛んですな。」とお愛想を云つて微笑した。

「小林の坊ちゃんに貰つたんだ。滅法うめえ酒だ！」さう云ひながら、その男はもう一口呑んで、そのきら／＼と光る眼で私の顔を見たが、

「え、素晴らしいちや無えか、お前さん！ 昨夜は吉原だ！ え！ 吉原で花魁買をやつて一晩に五十兩だ！」と、大きな聲で怒鳴り出した。

だしぬけにそんな事を云ひ出したので、車中の人は皆吃驚した。そして、妙な微笑を浮べな



がら、その男を見た。望み通り車中の注意を一身に集め得たその男は、愈々昂奮した様子で、人々の顔を順々にその圓い眼に掬ひ上げながら、

「一晩に五十兩、二人で五十兩だ。え？ 素晴らしいぢや無えか？」と、もう一度怒鳴つた。

酌婦體の若い女はぶツと吹き出した。收税吏らしいのも聲をあげて笑つた。が、その男は益々眞剣に昂奮した調子で、

「小林の坊ちやんは、俺が大の氣に入りなんだ。大旦那も俺は信用してゐられるんでね。」と、私に向つて話しかけた。「だもんだで、俺となら何處へだつて、お構ひなしに出してやるんだ。今度なんざお前さん、一寸小遣ひにつて持出した金がざつと二百兩だ！ 日光へ行つて、大洗へ行つて、それから東京だ！ 汽車は二等でお大名のやうだつた！ 宿屋だつて飛切上等で一寸抛り出す茶代だつて五兩を缺かした事あ無えんだからね、だからたまらねえや。六日半日で二百兩すつかりはたいちやつたんだ。え？ 豪儀なもんぢや無えか、たつた七日で二百兩！ え？ 七日で二百兩！」轍の音を壓する大聲で、その男は夢中になつてそんな風に喚き續けるのだつた。——その男の云ふ事はよく判らなかつたが、大體まあ次のやうな事らしかつた。その

男は埼玉あたりの小作百姓で、小林の坊ちやんといふ地主の息子のお供をして、その息子が、横濱の親戚へゆくまでの道中を、彼方此方と一緒にあそび廻つて、今朝、その息子と別れて、自分だけこれから家に歸るところなのだ——。

「え？ 一週間に二百兩だ！ 二百兩つたらおれ達のざつと一年分だ！ それをお前さん、一週間の小遣ひだ。たつた十九になつたばかりの子供がよ。いくら金があるからつて、へ、馬鹿馬鹿しい！」その男は嘲るやうに斯う云つた。が、それは嘲つてゐるのでは無かつた。一週間に二百兩の大金を使ひ果したといふ、その小林の坊ちやんなるものゝ素晴らしい豪儀な振舞を、満腔の熱情を以て讚美してゐるのだつた。而して、自分もまたそれに參加し得たところのその驚く可き英雄的行爲にすつかり酔つてゐるのだつた。

「え？ 二百兩だよ。お前さん！ 一週間に二百兩だよ！」

その男が、ウイスキーの瓶を片手に振舞はしながら物凄く緊張した表情で、夢中になつて喚き立てゝゐるうちに、がた馬車は、濛々と烟をあげながら、狂氣のやうに、荒寥たる田舎道を走りつゞけた——。



## 娘

三六

『寶石の夢』と『蕪めす人』この二部相俟つて全き一篇を成す——作者。

## 寶石の夢

Y伯爵とその令嬢のT子とは、東京行の急行列車の一等室に乗つてゐた。瀟洒とした背廣姿の老伯爵は、今まで一心に読んで居た新聞を傍に押しやると、鼻の上にすり落ちた金縁眼鏡を指先でちよいと押上げて、その眼尻に皺の寄る切長の眼を優しく微笑まし乍ら、向う側の座褥クッションにすわつてゐるT子の方を見た。T子はバスケットの上に両手を重ね、その上に頬をのせて、うとくと眠つてゐる。錦紗縮緬の袷羽織の片袖が、華美な模様を波打たせて、その端が座褥の縁をかくしてゐる。蔓つたなから出た白い花びらのやうに、すんなりとした頸筋が、きちんと合は

せられた襟を抜けて、ふさ／＼とした髪の中に潜り入つてゐる。髪は七三に分けてゐる。斜めに此方に向けられた顔は、柔かに新月を描いた眉と、長い睫毛を刷いた脛と、格好のいゝ鼻と赤い小さい唇と、而して揉上のあたりからすんなりとのびた匂やかな頬とを見せてゐる。窓の外には、眼まぐるしく移りゆく野山を一抹に掠めて、春の雨が降つてゐる。春雨の窓を背景としたT子の姿は一枚の美人畫のやうに見えた。

満ち足つた心持で、じつとその娘の姿を見てゐた老伯爵は、「美しいな。」と心の中で云つたが、すぐ、それを「可愛らしいな。」と云ひ直した。

T子は、老伯爵の一ばん末の、而して一ばん氣に入りの娘であつた。半年ほど京都の姉のところへ遊びにやつて置いたのを、伯爵は九州の方の旅からの歸りに、停車場で一緒になつて、今、東京へ伴れ戻るところである。

半年ほど見ないうちに、大そう美しうなつたわい、と伯爵は、娘の顔を見ながら考へる。自分の娘を美しいと考へる事は、彼にとつて慥かに一つの悦びである。が、その「美しい」と云ふ考の中には、何かしら、父としての感情とそぐはないものがあるやうな氣がする。で、伯爵



は、美しいと考へる代りに可愛いと考へたのである。いや相變らず可愛い奴ぢや——さう思ひ乍ら、伯爵は、その可愛い娘の可愛いしぐさを思ひ浮べたのである。

「お父さま。私、お願ひでございますのよ。」汽車が京都を出ると、T子は久振の父に甘えかゝるやうにして云つた。「お父さま、聽いて下さつて？」

「うむ。何だ。又、何かねだりごとかな。」

「え、でも、お父さま聽いて下さるか知ら？」

「さあ、何の事か聽いて見なければ判らないがね。」と、伯爵は、優しく笑ひ乍ら云つた。横着者奴！ また、指輪何か買つて呉れだらう！ 云ひ漉つて、ほつと赤くした娘の頬を軽く叩いてやり度いやうな愛の衝動を感じながら、伯爵はさう思つた。

「あのお姉さまのところだね——。」

「ふむ、お姉さまがどうしたな？」ははあ、A子にたきつけられたのだなと伯爵は心の中であらうなづいた。姉のA子は、京都の公卿華族にとついでゐるのだが、T子以上の美<sup>おめかしや</sup>飾家で、伯爵は時々いろ／＼のものを買はせられる。最近にもT子には内緒で、ダイヤの飾ピンを買つてやつ

たのだが、T子はそれを見せびらかされて、私にも——と云ふのだらう？

「でも、お父さま、本當に聽いて下さるか知ら？」

「まあ、云つてごらん。」

「でも。」と、T子は口籠つて、「今は云へないわ。——東京へつくまでには申し上げますわ。」

「ははあ、なか／＼遠大な計畫だね。」と伯爵は笑つたのである。

可愛い奴だな！ といつの間にかさうして他愛なく眠り入つてゐるT子を見ながら、伯爵は再び優しく微笑する。優しく微笑しながら、その小さな胸に秘められた娘の願ひを想像する。可愛いおねだり！ だが、此頃は少し遠慮する氣が出たものと見える。——伯爵は更に微笑を續け乍ら、その娘の夢を想像する。その夢は、彼女の欲しがる寶石の光でびか／＼とちりばめられてゐる事であらう！

汽車はいつの間にか箱根を越えてしまつた。國府津に近づいた時、T子はふと眼を覺ました。

「あら、もうこんなに來て了つて。」







諸ぬす人

四二

畑の畔に、横六尺、縦三尺、深さ一丈位の穴を造つて、その底に藁を敷く。そして、土の中から掘り出した甘藷を再びその人工の穴の中に入れて圍ふのである。お百姓さん達の爲には、甘藷は米や麥についでの大切な食糧である。その大切な食糧を冬の寒さから護る可く、到る處に斯うした貯藏庫が造られる。甘藷を出して了つたあとの空穴に山から出て來た猪が落ちる事もある。村の娘を目あてに町の方から夜遊びに來た若者が、見ん事、眞逆様におツこちる事も稀れでは無い。

稀にはまた、餓ゑた乞食などが、そつとその穴を掘り返して、少しばかり盗んで行く事もあ

る。「やあ、また俺の甘藷穴いもあなにかゝりやあがつた！」と、それを見つけた所有主は小牛のやうに呻く。「どうしてくれべえ。どちくしやう！」が、乞食の仕業ならたいした事は無い。彼等は極め

て寡慾である。せいゝ盗んでも一搦かげか二搦かげである。ところが、金十の甘藷穴の荒らされ方はそんなもんぢや無い。何しろ一穴、全部もつて行かれたのだから酷い。

つい此間、町の鍛冶屋の娘を嫁に貰つた金十は、その可愛らしいとひと他も云ひ自分も思つてゐる自慢の花嫁と二人で野車を曳いて、ある霜の白い朝、甘藷出しに行つたのである。ところが甘藷穴へ行つて見ると驚いた。四つ並んでゐる一番端の一つは、底の敷藁が見える位に掘りかへされて、車一臺もあらうかと思はれる一穴の甘藷がそつくり抜きとられてゐるのである。

「や、や！」と、金十は呆氣にとられて眼を睜つたまゝ、しばらくは言葉も出なかつたのである。

こんな大袈裟な甘藷盗人は村でも曾て無い事だ。だから、すぐ大評判になつた。僅か二十戸ばかりしかない此の山峽の小さい村は、何處へ行つても甘藷盗人の噂でもちきつたのである。

齒齧みをして口惜しがつた金十は、おのれ屹度ひつ捕まへて見せる！と力自慢の腕ツ節をさすつた。「金十の奴が甘藷を抜かれたと云ふぞ。」と云ふ噂は、同時に金十の間抜けを嘲る聲である。そのまゝにして置いては、金十の男にかゝる。第一、新しい細君の前にも面目ないと云



ふものだ――。

金十が血眼になつて泥棒の詮議をしてゐるうち、どうした事だ？ もう一つの穴が、いつの間にか、また全部抜きとられてゐる。評判は更に高くなる。金十の奴、愈々間拔けだと云ふ事になる。

金十は業を煮やした。而して、毎晩、その甘諸穴の傍へ行つて、夜明け近くまで張番をした。身を切るやうな風が、がら／＼と桑の乾反葉ひそりばを鳴らす眞暗闇の中にうづくまつて、水漬を吸りながら鼻のやうに眼を光らしてゐる金十が、その闇の中にかすかに此方に動いて来る人の氣配を感じたのは、さうした張番の三晩目の、もう夜半を過ぎた頃である。おのれ！ と手ぐすねをひいた金十は、愈々それが盗人に違ひないとたしかめると、だしぬけに飛びかゝつた。

「あ！」と云ふ叫び聲がその盗人の口から漏れた。女の聲である。あまりの意外に驚いて金十が手をゆるめた隙を素早く摺りぬけた泥棒は、闇を煽つてひらりと身をかはずや、脱兎の如く逃げ出した。金十はものゝ二十間も追ひかけたが、ふとある考へが金十の足を留めた。金十は甘諸穴の傍にひきかへして、燐寸をすつた。盗人が投げ出して行つた鉄と、背負ひ子とが其處

にあつた。きらりと光る鉄の刃先の傍に紅塗の櫛が一つ落ちてゐた。金十はその櫛をとりあげた。

その櫛をとりあげた時、金十がどんな顔付をしたかは、燐寸の火が消えて了つたので判らな

5。その晩から金十は、張番をする事を止めて了つた。而して金十は、もう甘諸盗人の事などは忘れて了つたやうな顔をしてゐた。金十は忘れて了つたが、村の評判は鎮まらない。いろ／＼の評判のうちに、あの甘諸盗人は藪上のお榮だと云ふ者がある。藪上のお榮はおとなしい正直な娘である。眼の見えない一人の老父を抱へて、まだ十八の女の細腕でその日を過して行く、村でも賞め者の働き者の孝行娘である。そのお榮が盗みをする――そんな馬鹿な事は無いと打消す人が多い。が、噂する者にも相當の理由がある。お榮の背負ひ子が金十の甘諸穴の傍に落ちてゐたのを俺は確かに見届けたと一人は云ひ、お榮の許との納屋には、甘諸が一山積んである、うそだと思ふなら行つて見ろ！ と一人は云ふのである。

あまりその噂が高いので、村の世話役の與助が、ある日お榮の家に出かけて行つた。



「お榮よ。へんな噂があるが、俺はまさかそんな事は——と思ふが。」と、與助は遠廻しに云つた。怒つて、泣いて、その飛んでもない噂を打消すであらうお榮を期待しながら——。

ところがお榮は打消さうとはしない。

「ぢや、世間の評判通り、本當にお前がそんな事をしたのかえ？」と、與助は呆れ乍ら云つた。色は淺黒いけれど、眼鼻立のはつきりしたお榮は、その唇を反抗的な表情でひきしめて、剛情に押黙つて、太い指で前垂の端を弄んでゐたが、突然、わつとそこへ泣き伏して了つた。

「だつて、だつて、あんまり口惜しいから！」とお榮は泣きじやくり乍ら早口で云ふ。「金十さんはひどい人だ。うらを欺して、一緒になるなんて、一緒になつてお父つあんの面倒見てやるなんて、——而してさんざうらをおもちやにして。」と、背筋を押しもみながらお榮は云ひ續ける。「ひどい、ひどい、あんまりひどい。うら口惜しいから、口惜しいから、あんまり口惜しいから……。」

(十一年六月)

## 無花果

どんよりと曇つた、寒い風の吹く日であつた。私は、上野公園の近くの友人を訪ねたが、生憎不在だつたので、池の端をぶら／＼と歩いて、廣小路の方へ出た。私は、時々殆ど週期的に、私にやつて來るところの、あの妙に重苦しい憂鬱な氣分に捕へられてゐた。かういふ氣分が何處から來るか？ それは私自身にも判らなかつた、判らない丈けに始末が悪かつた。かういふ時には、見るもの聴くものが一切皆惱ましくいとはしく、此の世の中のすべてが一様に絶望的な灰色に塗りつぶされて見えるのであつた。

私が若し酒でも呑めるならば、早速そこいらの酒場に飛び込むだらうが、生憎私には酒が飲めなかつた。淺草へでも行つて、面白い活動寫真でも見たら、少しはこの心持が紛らされるか



も知れないと思ひながら、私は、その停留所で、電車を待つたが、来る電車も来る電車も皆満員で、入口の柱にまで鈴生りにぶらさがつてゐた。而して、停留所に溜まつてゐる人達は、尙ほその上に押し乗らうとしてゐた。その我れ勝ちにと犇めいてゐる様を見るとまたへんに心持がむしやくしやして來た。もう少し先の停留場へ行つたら、空いた電車があるかも知れない、さう思つて、私はまた、ほつくと歩き出した。風が吹く度に、さつとあがる埃が用捨なく眼口を襲つて、時々、身を側めて、軒先に立停まらなければならなかつた。賑かに行き交ふ人も車も、それから街そのものも、すべてがその埃り風に包まれて、妙にこみごみとした感じに見えた。處々で、きらりと夕日を反射させた線路の上を、まじぐらに走つて來る一臺の電車を見やりながら、私が、急ぎ足で此方側から向う側へ横切つた時であつた。

「Kさん！」

さう呼ぶ聲に驚いて見ると、私の眼の前に鶴さんが立つてゐた。

「やあ！」と、私も思はず聲を擧げた。

「どちらへお出かけです？ 久振りでしたのう！」と、鶴さんは、そのまん圓い赭ら顔の、人懐

つこい小さい眼で笑ひかけた。鶴さんは、詰襟の小倉服を着て、駒下駄を穿いて、手には何かの包みを提げてゐた。

「ほんとうに久振りでしたねえ。あんたは、此の邊においでなんですか？」と、私は、鶴さんの變つた姿を見ながら斯う聞いた。

「わしはのう、あそこの——。」と、鶴さんは、振返つて、後の方を指して、「あの曲り角のところの鐵物の商會に出てゐるで。」

「さうですか？ 兎に角いゝ處で逢ひましたねえ。どうです、その邊の何處かへ寄つて、少しお話しようぢやありませんか？」

私がさう云ふと、鶴さんはすぐに同意した。而して、ぢや一寸その郵便局まで行つて來るから待つてゐて呉れ、と云つて、線路を横切つて駆け出して行つた。鶴さんは、背丈が低いので、その小倉服を着て小走りに走つて行く様子は、駈けツこをしてゐる中學生のやうに見えた。だが、その頭がびか／＼と夕日に光るのを見ると、逢はずにゐた一年ばかりの間に、鶴さんも可成り老い込んだな、と思はれた。線路を横切つて向側へ出た時、自轉車に摺れ合つたかどう



かして、鶴さんは、提げた包みを地に落した。而して、慌てゝそれを拾ひながら、私の方を見て一寸笑つた。而して、また小走りに、走つて行つた。

鶴さんは、七八年前に、私が東京へ出て来た時分からの馴染であつた。彼は、私よりも先に、今私の出てる或る出版社に出てゐた。而して、主に雑誌や書籍の發送をしてゐた。帯封の宛名を書いたり、書籍を小包みにしたり、手まめに働きながら、時々輕口を云つて小僧達を笑はせる處を見ると、いかにも呑氣さうだつたが、鶴さんはなか／＼苦勞人だつた。何でも師範學校の出身で、郷里の方で長く學校の先生をしてゐたのだが、中年になつてから東京へ出て来て、何かで一旗擧げようといろ／＼の事へ手を出して見たのだが、皆失敗に了り、郷里の方から持つて来た資本もすつかりなくしてしまつて、仕方無しに、そんな處に身を落着けてゐるといふ事であつた。師範學校を卒業して、立派な免許狀があるんだから、小學校へ出た方がいゝだらうといふと、鶴さんは妙な表情をして、

「わしはのう。こんなに背丈が低いし、顔がへんだといふのでのう。學校へ出た事もあるので、東京の子供は、どうも馬鹿にして云ふ事をきかないのでのう！」と溜息を吐いてゐた。出

版屋の事務員などは、どうせ薄給なものだから、幸ひ子供は一人きり、親子三人の小暮らしでも、かなり骨が折れるらしかつた。けれども、主人は、「もう少しどうかしてやり度いが、何しろ無能で。」と云つてゐた。實際、鶴さんがあまり有能でない事は、私などにも判つてゐた。で、社の方では、さして必要な人とされてはゐなかつたので、鶴さんは、何時までも月給の上がない不平を云ふどころか、いつ罷よされるか判らない不安に脅かされ續けてゐなければならなかつた。だが鶴さんはなか／＼野心家で、常に種々の計畫を立てゝゐた。株などといふ事にも興味を有つて、「Kさん！ すこし明いた金がありませんか、今買へば屹度儲かるで。」などと眞顔ですゝめる事もあつた。社を止める少し前には、原稿紙を拵へて、社から出る雑誌の投書家などに賣るのを内職にしてゐたが、鶴さんの試みたいろ／＼の事業の中では、これが先づ一番成功したものであつたらう。鶴さんが、自分の綽名をその儘とつてつけた達磨堂の原稿紙は、かなり賣りひろめられたが、子供の病氣で資本金を食ひ込んでしまつたとかで、惜しい處で止めて了つた。鶴さんが突然社をやめたのは、二年程前だつた。何でも、舊友の一人が取締役になつてゐる新設の或る會社の書記になるとか云ふ事であつた。「その男は子供の時分からの友達だ



でう。悪くはしまいと思ふで。」と云つて、新しく開かれた運命の前に心を躍らすやうにして、その方へ行つた鶴さんは、その當座、柳原物らしい背廣などを着て、時々、私の家を尋ねて來たが、何だか餘り元氣が無かつた。その勤め先への都合で、K區の方へ移轉してからは、全然、その消息を絶つてゐたのだが、今、斯うした處で、こんな事をしでかすとは、私は思ひ掛けなかつた。

鶴さんは、單に、同じ社に出てゐる仲間といふ以上、私の爲めには、親切な家友ハウスフレンドだつた。私が、新しく家を持つた時、何彼と後見うしろみして呉れたのは鶴さんだつた。初めての兒が生れた時、襁褓さそがけを乾す竿架さそがけを作つて呉れたり、廉い炭屋を周旋して呉れたり、いろ／＼の植木類などを何處からか探して來て、私の庭に植ゑつけて呉れたり——一體に世話好きの鶴さんは、いろ／＼と面倒を見て呉れたものだつた。本當に鶴さんは好い人のだが、あの好い人には未だ好い運が向つて來ないらしい、などと考へ乍ら十分間ほど私はそこに待つてゐた。やがて、鶴さんはこ／＼と笑ひながら、ごみ／＼とした人通りを縫つて小走りに走つて來た。

「どうもお待たせしました。落したもんで、箱が毀れたでう。」と、せい／＼と息をつきなが

ら鶴さんは云つた。

「何ですか？ あれは？」

「鐵物かねものだでう。あれ、あしこの。」と、鶴さんは、もう一度、先刻のところを指して、「あしこの××商會といふ鐵物の會社に出てゐるので。」と云つた。

二人は連れ立つて、裏通りの方へ這入つた。而して、偶然眼についた汚ない蕎麥屋の二階へ上つた。鶴さんは少しはいける口なので、一本つけさせて、ちびり／＼と盃を嘗めながらいろいろとその後の話をした。鶴さんは、その友人の會社の方も面白くないので、つい三月ばかり前に止めて、その鐵物會社に出てゐるのださうだが、今の境遇は前に私の方の社に居た時よりも、更にみじめなものらしかつた。

「私もどうかしてもう一と旗擧げ度いと思ふが、どうも、もういけんでう。何處へ行つても、私などは時勢後れだでう。」と、鶴さんは淋しさうに笑つて、

「あんななどはいゝのう。何しろ若いんだからう。——坊ちゃんも大きくなつただらうのう。」

「えゝ、腕白になりましたよ。あなたとこの健ちゃんも大きくなつたでせうねえ。」



「あれはむく／＼と大きくなつてのう。背丈などはわしより高くなつてのう。近頃ぢや角力をとつても本當に此方が負けるで。」と鶴さんはこ／＼とした。鶴さんが小男なのに、どうしたのか、鶴さんの一人息子の健ちゃんは、圖抜けて大柄な子だつた。その大きい子を、小さいお父さんは、眼の中へでもこすり込みたいといふ風にかあいがつてゐた。

「それに、彼奴は私と違つて、頭腦おたまも悪くないやうだで、彼奴丈けはいゝ學校へ上げ度いと思つてゐるんだがのう。何しろ周圍がよくないもので、悪い事ばかり覺えて困り切るでのう。」

「矢張、前のところですか？」

「同じ區内だが、今はL町の方にゐるで。L町の五百七十六番地。汚ないところだで、來て貰ふわけにも行かないが——しかし、今度は庭が廣いのでのう。近頃、宅の奴の内職に養鶏を初めたが、思ひの外うまく行きさうでのう。」

「そりやいゝですね。」と、私は鶴さんの杯に酒をついだ。一本の酒ですつかり赤くなつた鶴さんは、機嫌のよい顔付をして、

「それに、道樂で文鳥を二三羽飼つてゐるが、あれもなか／＼いゝ金になりさうだでのう。」と、

得意さうに、そんな話をはじめた。而して、

「あなたの家は庭が廣いから、二三羽、鶏を飼つて見ちやどうかね。」などとすゝめるのであつた。

「さあ、飼つて見ませうかね。」と、私は云つたが、ふと思ひ出して、

「あなたに貰つたあの無花果が近頃は大きくなりましたよ。」と云ふと、

「さうかな。よくついたかな。あれはすぐ大きくなるものでのう。今年は實が出来るかも知れないのう。」

「去年も實がつきましたよ。子供が喜んで食べましたよ。」

「さうかのう、もう實がついたかのう。あれは性質たちのいゝ無花果だで。すこし肥料をやるとすつと實の付き方が違ふで。」と、鶴さんは粉糠を何合に、ほしかを何合、それを交ぜ合せてどうとかすればいゝ——といふやうな事を教へて呉れたが、私自身がそんな面倒な事をしさうもないと思つたかして、「そのうち私が拵へて届けてあげようかの。」と云ひ添へた。

そんなとりとめもない話を小一時間もして、私達は、その汚ない蕎麥屋を出た。而して、電



車通りの角で別れた。別れる時、私は、ふと眼についた本屋へ寄つて、鶴さんの一人息子の爲めに、二三冊の少年雑誌を買つた。鶴さんは、却つて此方が痛み入る位に丁寧な禮を繰返した。

もう日も暮れかけて、物悲しい夕の燥音が、ちら／＼と黄色い灯のともりそめた街を流れてゐた。私は、淺草行を思ひ止まつて歸りの電車に乗つた。私の重い心持は、依然として胸を壓してゐたが、あの鶴さんの悲しげな微笑を含んだ、人の好い顔の印象が、或るくつろぎを私の心に與へて呉れた。私は今日、思ひがけなくも鶴さんに逢つた事について、かすかな喜びを感じながら、家に歸つたのであつた。

それから十日ばかり経つた或る日曜日の朝であつた。鶴さんから、一葉のハガキと一個の小包みが届いた。ハガキには、此の間はいろ／＼御馳走になつた上、子供に土産まで頂いて有りがたかつたといふ事、子供が大よろこびで居る事、それから、其時話した無花果の肥料を拵へたからお送りする。實は明日の日曜に持つて上らうと思つたが、用事が出来て行けないから——といふ意味の事が書かれてゐた。

私は、早速、その小包を明けた。而して、小さな箆にその肥料を入れて庭に出た。

鶴さんが社を止めて、S區の方へ移轉して行く時に、私の庭に遺して行つて呉れた無花果は、丁度、塀の高さまで延びてゐた。私は六つになる男の兒と共に、その根元を掘り起して、肥料を埋めた。

「ね、かうしておく、今にうまい實になるぞ。」

朝食前の軽い労働は、いつになく、私の氣分をす／＼して呉れた。私は縁側に腰かけて、煙草をふかしながら、その煙の上つて行く末に、早くもほんのりとかすみ初めた早春の空を眺めた。それから淡緑の小さい芽をその枯枝の先にめぐませてゐる無花果の樹に眼を移した。五年の後、十年の後、その無花果の樹が亭々とした大樹と生ひ立つた姿を幻に浮べながら——。而して、市井の塵に埋もれてゆく一人の忠實な善良な老人鶴さんの、人の好い笑顔をその樹の蔭に描き浮べながら——。

(十年三月)



卓  
上

YとSとMと、三人は久振りで、晚餐を共にした。三人とも、もう三十の峠を越えて、いづれも一角の紳士だつた。Yは、二三流どころの文學者で、Sは或る銀行の幹部、Mはある専門學校の教師といふ風に、それ／＼社會の違つた方面で働いてゐるので、中學時代にはあれほど親しかつた三人も、今夜のやうに一緒に落合つたのは數年振りのことであつた。

が、一三本の麥酒が齎らした快い酔は、三人の心を、すぐに、十年前に伴れて行つた。三人の間には、隔てのない打解けた話がそれからそれへと續いたが、何人が切出したともなく、話は若い日の戀物語に落ちて行つた。三人とも、それぞれ、遂げずに終つたところの、それ故にいづれでも美しく心に残つてゐるところの戀の記憶をもつてゐた。

「ところでね。」と、銀行員のSが、はずんだ調子で云つた。「あの、L子について、面白い後日譚があるんだよ。」

L子といふのは、Sの昔の戀人だつた。Sが中學時代に下宿してゐた家の娘で、豊艶な感じのする、魅力的な眼をもつた少女だつた。Sは熱烈にその娘を求めて、キスのもう一つ手前までこぎつけたのだが、横合から飛び出した有力な求婚者の爲めに、だしぬけに浚つて行かれて了つた。何にしる、此方が未だ中學生ではどうにもしやうが無かつた。

「どんな話？」

よく當時の事情を知つてゐる小説家のYが促すやうに訊いた。

「去年の暮の事さ。だしぬけにL子から手紙が來たんだ——しかも、長い手紙がね。」Sは眼尻を鍵形かぎがたにして、小さく笑つた。

「手紙が？」

「さうさ。L子から手紙が來たんだ。——その手紙に據ると、L子は最初の夫とは三四年で離婚して、今或る軍人の細君になつて東京に來てゐるといふんだ。そら、近頃婦人雑誌の投書な



んかに、よく種々の身の上話などが出てゐるだらう。まあ、あんな調子で細々と一別以來の様子を書いてゐるんだね。最初の結婚に失敗して、二度目の、つまり現在の結婚生活も、どうも面白くないらしいんだ。子供も無い上に夫といふのが何しろ嚴格一點張りの軍人なので、夫婦の愛もなければ家庭の情味も無い。思ひ切つて離縁をとつて了はうか？　とも考へてゐる、などと書いてあるんだね。こんな事を申上げて失禮だとは思ひながら、斯うして書いてゐるうちに、あんなにまで、親切にして頂いたあなたのお顔があの時分の儘で浮んで来る。で、昔のL子になつたつもりで、昔のSのお兄様に訴へるつもりで、つい筆をすべらして了つた。どうぞはしたない女と笑はないで下さい。而してお願ひですから、一度お遊びにいらして下さい。夫は、此の月末までは、機動演習で九州の方へ出かけて、家には女中と私とたつた二人だけなのですから——まあ、こんな風に書いてあるんだ。」

「ぢや、まあ、呼び出し状なんだね。」と、Yが云つた。

「まあ、さういふ事になるかな。何しろ十年振で突然に受取つた手紙にしちや、一寸へんなんだ。——が、元來、あの人にはさういふ無造作な、悪く云へば輕卒だが、よく云へば無邪氣な

ところがあつたからな。僕も、その手紙を読んでゐるうちに、昔のL子がまざまざと眼の前に浮んで来て、何だか非常に懐かしくなつたんだ。手紙の文字など見ても、昔のあの女學生時代そのまゝなんだ。いろ／＼の苦勞はしても、あの人的心持は此の文字と同じく矢張昔のまゝなんだ——その手紙を見てゐるうちに、さういふ氣がして來たんだ。」

「で、君は會ひに行つたのかい？」

「出掛ける事は出掛けた。西大久保の×××番地。家はすぐに見つかつた。が、僕は玄關先から引返して來て了つた。」

「どうして？」と、今までじつと黙つてきいてた教師のMが熱心な調子できいた。

「どうして？つて。その氣持は一寸説明しにくいがね。僕はまづ門の柱にうちつけられた『關寓』といふ木札を見た。そのいかにも軍人々々した、四角張つた文字を見ると妙にそぐはない氣持になつて了つた。それでもとにかく中へはひつて玄關先に立つて御免なさいと聲を掛けて見た。が、返事が無いんだ。一度聲を掛けると、もう二度呼んで見る勇氣が無くなつちやつたんだ。而して、しばらくぼんやりと立つてゐると、ふと、玄關の土間に不行儀に脱ぎ捨てられ



である女下駄に眼がついたんだ。その女下駄——もう中古の、紫が、つた鼻緒の色も褪めて、疊も擦りきれておまけに爪先のあたりに泥のこびりついてゐるお粗末な女下駄を見ると、妙にわびしい幻滅的な氣持になつて了つたんだ、そこへもつて来てお勝手の方で下女か何か小言をいふ聲がしたんだ。甲高な早口な——たしかにL子の聲に違ひないんだが、その聲をきくと、僕はもうすつかり勇氣がなくなつて了つたんだ。氣おくれがしたんぢやない、妙に斯う張合のぬけた、謂はゞまあ灰を嘗めさせられたやうな氣持——そんな氣持がしたんだ。で、僕は逃げるやうにそこを出て、そのまま歸つて了つたんだがね——。Sは、その時の自分の氣持をもう一度自分の心の中で味ひ返して見るものゝやうに、じつと卓の上に眼を据ゑて了つた。

「うん。」と、Yは、Sと一緒に考へ込むやうな眼付をして、「そりやあ、矢張會はずに歸つた方が宜かつたね。」

「うん、僕もその方が宜かつたと思つてゐる。——先方でも思ひ返したんだらう、いや、手紙を書いたのからしてほんの一時の氣紛れだつたと見えて、それつきり何も云つて來ないんだ。」

「慥かマルセル・プレブオにそんな風な作があつたよ。佛蘭西の作家だがね。——會つて見給

へ。折角の美しい思ひ出がそれこそだいなしになつて了ふよ。」

「いや、會はなくても、いゝ加減幻滅を感じちやつたね。實際、下駄一足にそれほど恐ろしい力があらうとは思はなかつたよ。要するに僕等の夢は、一足の下駄にしか値し無いといふ事になるんだね。」と、Sは聲をあげて笑つた。YもMも聲を合せて笑つた。中年の境にはひつた人でなければ決して笑はないあの妙に力無い空虚な笑ひを以て。

「僕の夢は、しかし決して壊される事はない。」と、ウイスキーの杯を一度に乾した教師のMは、三人の中で一番赤くなつた顔を卓の上につき出すやうにして云つた。「僕の戀人は、死んでゐる。死によつて永遠のものとなつてゐる！」

「それは何人の事だい。」と、Sは一寸ひやかすやうに云つた。「君には五人も六人もあつたぢやあ無いか？」

Mは三人の中では一番惚れッほく、そのくせ、一番臆病だつた。「あゝ、僕はもう胸が破れさうだ！」とでも云ふやうな顔をして、運動場續きの芝生の上に横になつて、涙ぐみながらじつと考へ込んでゐるMの姿を、SもYも今はつきりと思ひ浮べる事が出來た。町の文房具屋の娘、



國漢の先生の姪、Kといふ友人の妹。——一寸目につく程の女は、殆ど凡てMの戀の對象だと云つてよかつた。そんなにも澤山の女を戀し乍ら大抵皆片戀だつた。Mは、その片戀を、盛に下手な新體詩に作つてゐた。

「何人だい、そりやあ？」と、Yも、Sと同じやうな微笑を唇邊に浮べ乍ら、斯うきいた。

「さうだね。あの自分僕は出鱈目に戀をしたね。本當に五人も六人も——。而して殆ど凡てが片戀だつたのは、君達もよく知つてゐる通りだが、中に一人、本當に戀しあつた、相愛の仲になつた女があつたんだよ。そりやあ君達は知らない女なんだ。僕は、あの町の中學を出て高等師範に入るまで二年の間、僕の村の隣の町で小學教師をしてゐたんだがね。その町の牧師の娘さんで、T子といふのがゐたんだ。僕はそのT子に戀したんだ。ところがT子も大へん僕に好意を見せて呉れるといふわけで、はじめて逢つてから三月か四月の間に、二人はすっかり戀仲になつて了つたんだよ。ブルウネット型の、眼のぱちりとした、しかし、何處となく斯う、基督教的憂愁とでもいふのか、憂鬱な、冴えない表情をした娘だつたが、一面非常にパッシェネエトな處があつてね、僕が夢中になつた程には、彼女の方でも夢中になつて呉れたんだよ。」M

はうつとりと夢見るやうな眼の中に當時の激しい情熱を呼び戻しながら熱心な調子で語りつづけた。「ところがね、その娘は、牧師さんの一人娘で、その上、許嫁の青年さへあるんだ。その青年は僕も面識があつたが、當時東京の神學校で勉強してゐた。その青年が卒業してかへれば、その娘の婿になつて、義父の事業を受け継ぐ事になつてゐて、しかもその卒業期ももう間近に迫つてゐるんだから、どうしたつて終りの全うされる戀ぢや無いんだ。勿論、僕に萬事を抛つ覺悟があればどうにかなつたに違ひ無いが、僕だつて、あの山の中で一生を朽ちさせる氣はないさ。その青年が東京から歸つて來る、僕は東京へ出てゆくといふ事になつて、とう／＼T子とは悲しい別れをしなければならなくなつたんだ。ところでね、愈々明日は別れといふ前日、二人は夕方から夜更まで教會の片隅で心ゆくばかり語り合つたんだ。無論、兩方とも眼が眞赤になつて了ふまで泣いたんだ。最初の、而して最後のキス——僕は今でもあの事を考へると、あの女が可愛くてたまらなくなる。T子は、もし僕が求めさへしたら、あの時、キス以上のものをさへ拒まうとはしなかつたに違ひ無い！ 明日は別れようとする男に向つて、永久に離れて行かうとする男に向つて、すべてを與へて悔いようとしなかつた。否、後の悔をもおそれずに



敢てすべてを抛たうとした彼女の情熱と眞實と！ 僕はあれを考へると、今でも身體がふるへて来る。何故、つまらない野心などきれいさつぱりと捨て、あの儘あすこに止まつてゐなかつたらうと、あとになつて僕はつくづく後悔したよ。その時だ。たとへ何人の妻にならうとも、私の心は、永久にあなたのものだといふ意味の事を繰返して誓つた後で、彼女は、その頬をぼつと染めながら云ふんだ。もし、私に子供が生れたら——男の子なら『眞太郎』といふ名をつける、而して女の子だつたら『みつ子』といふ名を。それが、彼女が永久に僕を忘れない證據だ、と云ふんだ。僕等はその時分、徳田蘆村の『思ひ出』ね、あの小説を二人して夢中になつて讀んでゐたんだ。眞太郎もみつ子もその小説の中の名なんだ——」。

「なるほど。」と、Yは覺えず微笑しながら云つた。

「ところでね、その娘は豫定通り、その許嫁の青年と結婚したんだが、結婚して三年目に、つまり今から五六年前に死んで了つたんだ。」と云つて、Mは一寸言葉を切つて卓の上をみつめたが、空になつた盃を口の傍にもつて行つてその空なのにも氣がつかず、ぐつと呷るやうにして、さてそれから淋しく笑つた眼で、交る／＼YとSとを見た。而して語り續けた。

「それで、一昨々年の事だ。僕久振りで歸省した序に、その村に行つて見たんだ。無論T子の家を訪ねる爲めにさ。T子の夫なる人にあつて、くやみの一言も述べるといふ事にかこつけて、實は、Y子の面影を偲んで——」。

「さうして大に感慨に耽り度いといふ寸法だつたんだね。」と、Yが言葉を投げ入れた。

「うん、まあさうなんだ。前に云つた通りTの夫とは一寸面識もあるし——。まあ、そんなわけを訪ねて見ると、すべてが皆十年昔と些とも變らないんだ。村端れの丘の上に、杉林を背景にして建つた小さな教會、その教會の裏が牧師館になつてゐるんだがね、古びた水色の扉、黄色いカーテンを引いた窓、窓の下に咲き亂れた紫陽花——丁度その時は夏の最中だつたんだがね——それ等のものが皆普通りなのさ、唯違つてゐるのは人間だ。T子の父親ももうなくなり、T子の夫もいつの間にか妙にぢぢむさくなつて、いかにも篤實な牧師さんといふ様子だつた。僕が來意を告げると非常に欣んで呉れてね、眼に一ぱい涙を溜めて、しきりにT子の思ひ出を語り出したんだ。T子がどんなに貞潔な優雅な女であつたか、どんなに申分のない立派な妻であつたか？ 牧師さんは、心の底からT子に對する愛と感謝とを表白したよ。それを聞いてゐ



ると、僕は正直の話、その善良そのものゝやうな牧師さんに對し、死んだT子に就いての嫉妬さへ感じずにはゐられなかつたほどだ。が、一方には、また、そのT子が自分と一度はすべてを許した——許し合つた仲だつたといふ事を、今、牧師さんに話してやつたら、牧師さんほどんな顔をするだらう？ などと、一寸悪魔的な興味が動いたのも事實だがね。そんな風にして、二人で話し込んでゐると、

『お父うさん！』と云ひながら、可愛い女の兒が扉をあけてはいつて來たんだ。一見してT子の子供だといふ事が判つた。七つ位だつたらうか、そのばつちりとした眼付と云ひ、子供乍らどこか憂鬱な顔つきと云ひ、T子にそっくりなんだ。僕が、

『あゝ、可愛いお嬢さん！ お子さんですか？』と云ふと、牧師さんは、悲しい眼色に敬虔な表情を添へて、

『在様です。T子の私にのこしてくれた形見です！』と云ふんだ。その時、ふと、僕は、別れる時にT子が僕にした約束を思ひ出したんだ。

『何といふお名前なんですか？』女の兒に向つてさうきいて見た時、僕の聲は思はずふるへた

よ。すると、その女の兒は、

『みいちゃん！』と云ふんだ。

『みいちゃん？』さう聞きかへすと、牧師さんは、

『光子と云ひます。』と、はつきりと云つたんだ。

『うむ。』と、銀行員のSは大きくうなづくやうに云つた。

『うむ。そりやあ、美しい物語だと云つていゝね。勿論、すこしくセンチメンタルに過ぎはするが。』と小説家のYは微笑を含んで云つた。

語り終つて、給仕のもつて來た、ウイスキーを、一度に乾して了つたMは、又、何か考へ込むやうにじつと卓の上に眼を落してゐたが、ふと顔をふりあげると、その顔には子供のやうなはにかみ笑ひが浮んでゐた。而して、兩手をもぞくと膝の上で摺り合せてゐたが、思ひ切つたやうに云つた。

「ところでね、それは嘘なんだ。それは僕の夢なんだ。T子と戀した事も、T子が約束した事も、T子が女の兒を遺して死んだ事も、それは皆本當なんだがね、その牧師さんを訪ねて行つ



た事、而してそれから先の事は僕の勝手に描いた夢なんだよ。その女の兒にどんな名が附いてゐるか？——」

七〇

「なあんだ！ とでもいふやうな表情が瞬間二人の聴者の顔を掠めた。が、掠めた丈けですぐに消えた。」

「どうも話があまりよく出来過ぎてゐると思つたよ。」と、一寸微笑したが、「だが君の心持はよく判るよ、判るよ。」と云つて、小説家のYは、昔乍らのかあいゝ夢想家であるMを、いたはるやうな、而して憫れむやうな柔かな微笑で押包んだ。

「はゝゝゝ。」とYは笑つた。が、その笑ひには、決して嘲りの氣持などは含まれてゐなかつた。

(十一年十一月)

## 或日の客

圭三は、此頃訪問客で悩まされてゐた。毎日少くとも五六人宛は来る。雑誌記者をしてゐるので、原稿を持ち込む人も大分ある。小説を書いてゐるので、頼みに来る他の雑誌の記者もある。地方の青年で、彼の小説の愛讀者だといつて、訪ねて来る者もある。厚稿を持つて来て讀んで呉れといふ人もかなりある。

「お忙しいでせうけれど、どうぞ一度目を通して頂けませんでせうか？ 而して、一言でもいから批評して下さい。私は、たゞそれだけで満足なんですから。」さういつて原稿を押し付けて歸る人に彼は一番閉口した。氣にかけながら、彼は、その書齋の押入の中に、讀まない原稿の山をこしらへてゐる。



「僕なんかが讀んだつて仕方ありませんよ。僕自身、未だ本當の小説といふものが書けない人間なんですから——。」そんな風に云つても、相手はそれを一場の遁辭としか受取つて呉れない。

「どうぞそんな事を仰有らないで半分でもいゝから讀んで下さい。先生に一言批評して頂ければそれでいゝんです。讀んで下さつて、私にその方の天分が全くないと思ひでしたら、どうぞ遠慮なくさう仰有つて下さい。私は潔くあきらめますから。」と、その青年が涙含んだ眼でじつと彼の顔を打戍つた時は、彼は本當に狼狽して了つた。何故と云つて、それは、彼自身が、何人かに向つていつも心に繰返してゐる言葉であつたのだから。

——話が横に外れたが、そんな風に、圭三は、種々の來客で惱まされてゐる。で、仕事が忙しい時には、悪い事とは知り乍ら『居留守』をつかふ事にしてゐる。

「おい、今日は留守だよ。」と、細君に云ひつけて彼が二階に上つた時は、細君も仕方無しに、「先程から何處かへ出かけまして——。」などと採手をしながらうそを吐くのである。

「さうですか？　ぢやあ——。」とか何とか云ひ乍ら客は玄關先から歸つて行く。その、或は落

膽したやうな力無い足音を、或は腹立たしげな荒々しい足音を、二階の障子の机の前で耳にしながら、彼は、そつと身をすくめるやうにして息を殺してゐるのである。勿論、餘りいゝ心持のものではない。

十一月の末、彼が、期限の迫つた新年號の原稿を書いて居た日の午近い頃の事である。生憎と彼の書齋は、玄關のすぐ上になつてゐるので、訪問客の氣配は手に取るやうに判るのだが、朝から三人目か四人目かの客は、どうも女らしかつた。主人の在否を問ふらしいひそ〜とした小さな聲、不在を告げられて門口を出て行く物靜かな様子。慥に女である。

圭三も小説家には違ひ無かつたが、女にもてるやうな小説家では無かつた。だから、女の訪問客などは、滅多にない、殆んど無い、いや全く無いのである。だから、それが女客だとわかると、一寸好奇心を動かされずにはゐなかつた。はてな？　俺のところへも女の客が來たぞ。ひよつとしたら素晴らしい美人の女學生か何かかも知れないぞ。素晴らしい美人の女學生が俺の小説を愛讀してゐて、俺に逢ひに來たのかも知れない。——でなければ、原稿を見て貰ひに來たのかも知れない。素晴らしい美人の女學生の原稿なら讀んでやつてもいゝな。



圭三は、澁りがちのペンを投げ出して、敷島の烟を吹きながら、こんなとりとめもない空想を描きはじめたのである。

そこへ細君が上つて来た。

「今の客、何だい？」圭三は、細君が云ひ出さない前に斯う訊いた。

「女の人よ。をかした人——。」と云ひながら細君が出した小型の名刺を見ると、吉岡波子である。吉岡波子。圭三の胸に漣立つた。いかにも、素晴らしい美人の女學生らしい名前である！「是非お目にかゝり度いと云つてましたわ。明日の朝、またお尋ねしますつて。洋服なんぞ着て、へんな人よ。」細君の眼は笑つてゐる。

「どんな人だい？ 若い人かい？」

「いゝえ。もう五十位の人よ。」

「五十？」彼は、急に高いところからつき落されたやうな気がした。而してすつかり憎げて了ひながら、「何だ、ぢやあお婆さんぢやないか？」

「えゝ、もういゝ加減のお婆さんよ。」

「何アんだ、婆さんか？」

「お氣の毒だけど、お婆さんよ。」細君は、とう／＼聲を立てゝ笑ひ出して了つた。

だが、婆さんならば、一體、何の用でそんな人が自分を訪ねて来たのだらう？ と、圭三は、今度は別の好奇心を動かされながら、その名刺を打戍つた。吉岡、吉岡——どこかできいたやうな名前である。彼は、埃ツほい記憶の堆積を底から揺り起して見るやうに、一寸頭を振つて見たが、咄嗟には思ひ出せなかつた。

そのまゝ仕事に氣を取られて、その夜はかなり夜更かしして、翌日は、疲れ切つた頭を未だ朝寝の枕にのせてゐる頃に、女中が、吉岡波子の名刺を持つて来たのである。で、迷惑な臆劫な氣持ではあつたが、好奇心に鼓舞された圭三は、その女客を、朝の書齋に迎へる事にしたのである。

「客は、書齋にはいつて来た。——なるほど洋服は着てゐる。が、それは三輪田女學校の生徒が着てゐるやうな、活動寫眞館の賣子が着てゐるやうな、粗末な木綿物の事務服である。なるほどお婆さんである。色の黒い皺だらけの顔に、しかし薄く白粉を刷いてゐる——而して、



少し齒が出てゐる。右の脣角に大きな黒子がある。

その齒の出てるのと、右の脣角の大きな黒子とが、活潑な作用を彼の記憶に與へた。

彼はすぐに思ひ出したのである。それが、十幾年前、同じ學校につとめてゐた教師仲間の吉岡さんである事を、彼はすぐに思ひ出したのである。

「やあ、あなたでしたか。どうもお久しう——。」と、彼は微笑しながら、此の珍客を座に請じた。

「本當にお久し振でございました。」と吉岡さんも、少し齒の出てる口もとを手で抑へるやうにして笑ひながら、彼の顔を見上げた。

「あなたのお名前を、雑誌などで見ましてね、はじめは、同名異人ぢや無いか知ら？　と思つてゐましたのですよ。今度、此方へ出て來まして、學校の仲間にいる／＼伺つて見ると、矢張、あなただといふ事が判りましたね。いつか一度お尋ねしようと、夏頃から心掛けて居ましたのですが——。」吉岡さんは、洋服のポケットから煙草入を出して、煙管に刻みをつめながら、こんな事を云つた。十いく年か前、彼が郷里の學校で代用教員をしてゐた頃、同じ學校で裁縫の

教師をしてゐたのが吉岡さんである。その時分から吉岡さんは未亡人だつた。女の獨り身で、それから彼方此方轉々と任地を換へて、今年の春から此の東京の郊外の學校に出る事になつたのだと云ふ事を聞くと、彼は哀れに淋しい氣がして來た。あの時分、吉岡さんは極端に無口な沈み勝な人だつたが、今見る吉岡さんは、あの時分から見ると、少しは明るい感じを帯びて來て居る。しかし、言葉をとぎらして、じつと火鉢の縁をみつめたりしてゐるところを見ると、相變らず頼りなげである。頼り無い身の人戀ひしさに、自分の許へなども尋ねて來たのだらうと思ふと、圭三は、昨日、居留守を使つたりした事が、ひどく濟まない事に思はれたのである。「でも、あなたは本當に立派におなりなさいましたね。男の方はようございますね。私などはもう何時迄經つても同じ事ばかりで一向もう——。」

「いや、駄目ですよ。」

「本當に立派におなりなさいました。大それた御出世で——。」

彼は苦笑した。が、その苦笑にいくらか得意な微笑が潜んでゐたのは事實である。あの時分の話などがそれからそれへと語り出された。あの時分の仲間だつた人の噂を聞きな



がら、彼は、ふと、咽ッほい白墨チヨクの匂ひを思ひ出した。而して、十二三圓の月給取だつたみじめな青年時代を思ひ出した。而してその思ひ出の中に、何となく、自分の心持に媚びるものがあるのを、圭三は意識したのである。

吉岡さんは、やがて、それが今日の訪問の主要な目的でもあつたかのやうに、ポケットの中から、小さな紙をとり出した。而して、

「川田さん。かういふ懸賞がありますかね。」と云ひながら、その紙切を圭三に渡した。

「ははあ！」と無意味にうなづきながら、圭三はその紙切を見た。

「條蟲ノ害ヲ知ラシムベキモノ一千字以内、賞金一等百圓、二等五十圓、三等二十圓、期日大正××年三月末日、應募者小學教員ニ限ル。」

そんな事が書いてある。

「それなんですがね。あなたなら大丈夫だと思ひますよ。」と吉岡さんが云ふのである。

「ははあ！」と、彼は、一寸烟に捲かれたかたちで、無意味なうなづきを繰返した。

「小學教員に限るとありますが、川田さんは、小學教員の経験もおあんなさるし、そこはどう

にでも出来ると思ひますよ。一千字以内で百圓は随分宜う御座いませう。」と、吉岡さんは乗氣になつて云ひ續ける。「一寸、惜しいやうな氣がしましたからお知らせにあがつたのですよ。」

「ははあ！」と三度うなづいた時、彼は、吉岡さんの言葉の意味を了解した。吉岡さんは、つまり、自分に、この懸賞の應募を勧めて呉れるのである。而して、これは、多分文部省か内務省かで、小學教員の間にも募りつゝある懸賞文なのである。——吉岡さんと一緒に村の小學校に勤めてゐる頃、彼は文藝雑誌の投書家だつた。彼は盛んに投書した。それは單に文藝を愛する者の純粹の動機からばかりなされたものでは無かつた。貧乏な彼はそれによつて得る懸賞金をめあてにめちやくちやに投書したのである。吉岡さんはそれを覚えてゐたのである。

「私共の仲間も皆一生懸命になつてやつてゐますけど、文が拙いから駄目らしいのですよ。川田さんなら、大丈夫當ると思ひますかね。」

「さうですね。」圭三は、その紙切を疊に置きながら、思はず苦笑した。その苦笑は、前に、出世を祝はれた時彼の漏らした苦笑よりも、すつと深い、濃い苦笑であつた。——而して、腹立たしい、といふほどではないが、何となく傷つけられたやうな氣持が、その苦笑を裏付けてゐる



た事も事實である。彼は、文壇では、投書家上りなどと云はれて、一部の輕蔑を買つてゐる。そんな事を思ひ出すと、餘計不愉快な氣持がするのである。

「さうですね。」と、圭三は、その不愉快な氣持を隠さうとはしないで、こんな風に云つたのである。

「併し、僕は此頃少し忙しいんでね。どうです、吉岡さん、あなたがおやりになつたら？」

「いえ、私など、どうして、どうして。」吉岡さんは飛んでもないといふ顔をして云つた。

「書いてごらんさい。文章は私が直して上げてもらいますよ。」

「いゝえ。私などは迎も！——。」

吉岡さんは、彼が此の大懸賞に些とも乘氣にならないばかりか、妙に不機嫌な冷淡な態度を示すのを見ると、すつかりあてが外れたといふ様子であつたが、そんな押問答を續けてゐるうちに、流石に、此の勧誘が相手の現今の状態にふさはしくないものであつた事に氣がついたらしい、——吉岡さんは、稍きまり悪さうな顔附になつて、その懸賞規定を記した紙片を暫くの間膝の上で弄んでゐたが、やがて煙草入と一緒にポケットにしまひ込むと、急に別れの挨拶を

告げて、逃げるやうにこそくと歸つて了つたのである。

吉岡さんが、歸つてからも、圭三の唇邊の苦笑は、容易に消え無かつた。——が、彼は、あの時分、彼がたま／＼目的の懸賞金を獲た時に、「まあ、えらいわねえ。」と、心から讚嘆の聲を揚げた吉岡さんを思ひ出すと、折角の吉岡さんの勧誘に對して、そんな風に冷淡な態度を見せた自分が悔いられて來たのである。吉岡さんは、そのために態々自分を訪ねて來たのでは無いまでも、久濶の訪問の、絶好の土産として、この、懸賞文を齎したのに違ひ無い。その吉岡さんの好意を、鼻の先であしらつた自分の心無さが、圭三には悔いられて來たのである。

圭三は、丁度出來上つて机の上に置いてある不出來な原稿を手を取つて見ながら、更に苦い心持で、自分自身に云ひきかせたのである。——お前は、それでも一角ひつがせの小説家になつた氣である。だが文藝の最高の標準から見た時、矢張、一介の投書家でしかないのではないか？ 文藝の神の手もとに、甲斐なき努力を齎すところの、遂に當選の見込のない投書家かも知れないのだぞ！——そんな風に考へて、彼の心が、救はれ難くみじめなものになつた時、いや、と彼は更に考へ續けた。それは、しかし俺ばかりではないのだ。俺の事を投書家上りなどと輕蔑す



る奴等だつて、畢竟は同じ事なのだ。文藝の神の、嚴重な選擇の眼から見れば、矢張落選つゞきのみじめな投書家かも知れないのだ……。

いや——、と圭三は、更に考へ續けたのであつた。これは、ひとり文藝の事ばかりではない。その人生といふものが、個々人の生涯といふものが、矢張一の投書見たいなものだ。運命の神の前に提出した一つの懸賞文見たいなものだ。それが運命の神の眼にかなつて、うまく當選するか、それとも落選するか——

こんな風に考へ續けてゐるうちに、彼の心には、曇り日の日ざしのやうな、仄かな明るみがさしわたつて來た。而して、圭三の重い濃い苦笑の底から軽い淡い微笑が動きあがつて來たのであつた。

(十二年十二月)

烟霞抄



## 男鹿半島

一

船越といふ小さな停車場で降りたのは午前九時頃だつたらうか。八月末の日は烈しく照つて、車窓から見た八郎潟の湖面は、皺一つ無い懶い鈍藍色にびあわいろを展べ、水平線のあたりは、どんよりと靄立つてゐた。

八郎潟の一瞥は、私の心に、妙に倦怠の感じを興へた。今日まで七日ばかりの旅を續けて、私は身も心もかなり疲れてゐた。

停車場前の茶店で生ぬるなまいサイダアを飲み乍ら、茶店の主人に種々聞くと、親切な主人はその邊で遊んでゐた十歳ばかりの男の子を呼んで、私の爲めに案内に立たせて呉れた。眼の丸い色



の黒いその子供は、今汽車で来た線路の上を狗兒いぬごのやうに走り出した。十間ばかり走ると立止まつて私を待つてゐる。それが五六遍も繰返される時分に、線路を出はづれて田圃道にいた。そこを一二町行くと、こんもりとした森の中の、物古りた神社の境内で道が行きどまりになつた。湖の中に突出した小さな半島の尖端になつてゐるのである。

神社の扁額には、「八郎神社」と書いてあつた。

神社の裏に廻ると、そこはもう直ぐに湖岸うみぎしである。茶店の主人が云つた通り、なるほど此處からは、湖の大觀が一眸のもとに集まるのであるが、その眺めは唯だゞツびろいばかりで些とも面白くなかつた。

八郎潟にはすつかり失望した。

折角案内して来たのに、私があまり感心しないのを見ると、案内の少年は稍々不平だつたのかも知れない。この湖からは何が獲れるといふ私の質問をきつかけに、今までまるで口を利かなかつたのが、俄かに氣負きおつた調子になつて、雄辯に語り出した。××も獲れるべ、××もとれるべ——といふ風に、矢繼早に、そこで獲れる魚の名を數へあげて、さてもうすこし經つて

その季節が来ると、自分のやうな子供にでも、××がこんなに澤山とれるんだといふ意味の事を、しまひには手まねまでして自慢さうに話してきかせてくれたが、惜しいことに言葉がうまくきくとれない。××、××と繰返される魚の名などもよく判らない。

そこから、又、線路を横切つて、今度は町端れの方に出た。而して湖の水と海の水とが一緒になるところに架けられた八龍橋といふ橋を半分ばかり渡つて見た。鐵橋と並行に架けられた此の木橋は、實におそろしく長い。橋の上には、日に焼けてまつくろになつた子供達が一ぱい群れてゐて、どぶん／＼と水の中に飛び込んでゐる。橋の柱のあたりにも澤山群れてゐる。案内の少年は、それを見ると去いにともないといふ顔をしてゐる。で、少年はその橋に残して、茶店にとつて返して、そこで一時間ほど休んでゐると、次の汽車がやつて来た。

## 二

「カンブウザンといふのはあれですか？」

私は、車窓から仰がれるその山を指して、傍の人に斯う云つた。



「さうです、あれがサムカゼヤマですよ。」とその人——郡の小役人といふ格好のその人はかう云つてうなづいた。

なるほどサムカゼヤマだ。カンブウザンと訓んで、岬々たる嶮しさを想像してゐた私は、そのなだらかなスロオプをもつた女性的な山の姿に意外のおもひをなした。

「思ひの外やさしい山なんですね。」

「やさしい山は、う。」と、その人は笑つて、「何しろ頂上まで下駄でのぼれるんですからね。」やがて小さなトンネルを一つ過ぎて、船川につく。停車場はすぐ海際になつてゐた。

島めぐりの船はすぐ出るといふ。同行は生憎ひとりも無い。船賃が大へん高くつくのだが、それを目的にこゝまでやつて来たのである。躊躇せず、船を出して貰ふことにする。

案内の爺さんに、辨當だのサイダアだのを買はせて、港口の方に行く。防波堤が出来てゐて、一寸大きな港である。帆船が五六艘浮んでゐる。沖の方には室蘭通ひの汽船が、黒い煙をあげてゐる。何かの樽がごろ／＼と轉つてゐたり、石炭の山が積まれてあつたり、はしけが引上げられてあつたり、いかにも船着場らしい雑然とした光景を、もう午近い日がぎら／＼と照らし

てゐた。

舟の用意が出来るまで、棧橋際の材木に腰をかけて待つてゐると、若い女労働者が、何かきやつ／＼と叫びながら、背負ひ子を背負つて三々伍々とやつて来る。男達がシャプロで石炭をすくつて、かますに入れると、それを何處かへ運んで行くらしい。その女労働者にさへ、色の白い、瞳の黒い秋田女の美しさが見られた。

すこし先の方で五六人の男達が、何か高い聲でわめいてゐる。見ると、潜水服をつけた男が今海底からあがつて来て、半身を水面に現はしたところである。——怪物のやうな異様なその潜水夫の姿が、あたりの荒涼とした光景とよく調和をして、邊土の海といふ感じを鮮かに感じさせた。

船の支度が出来た。長さ二間ばかりの舟で船頭が三人、二人が櫓を操つて、一人は豫備に控へる。港口を防波堤近く出はなれた時、強い風がさつと吹いて来て、私の爲めに設けてくれた日覆の布を危く奪ひ去るところだつた。今日は波が高い、と船頭がいふ。

防波堤から出て了ふと、なるほどかなり波が高い。船は時々大揺れに揺れる。えッし、えッ



しと聲を合せて漕ぐ二人の船頭の赤銅色の顔からは汗の玉が滴り落ちる。

振返つて見ると、港はもう遠く背後になつて、丘陵の懷に抱かれたその全景を、一枚の繪のやうにして見せてゐる。海岸の、コンクリートの堤防が目を捕へてきら／＼と光つてゐる。

船が進むにつれて、右手に一つの岬角が現はれだす。港はやがてその蔭にかくれて了ふ。岬角が岬角に續いて現はれる。而して、岬角と岬角との間には、小さな漁村が隠されてゐる。屏風の如くその漁村をとり圍む斷崖は、ある處は白く地肌をあらはし、或るところは燃えるやうな緑に包まれてゐる。緑の中に赤く燃えてゐるのは岩躑躅でもあらうか？

「いゝなあ。一寸あゝいふところは。」と、私とその漁村の一つを指して云ふと、舳の方に坐つてゐた控への船頭が、

「なあんのいゝ事が——。」と、力強く否定して、今は兎も角、冬になると、北からの吹雪が直接に吹きつけて、それは／＼大へんだといふ意味の事を、食肉鳥の鳴く聲を思はせるやうな甲高な調子で早口にいふ。

その船頭は、なかく／＼おしやべりで、あれこれと、指しながら、種々話して呉れるのだが、

どうも言葉がわからない。それに、波が高いので、動もすれば言葉が波の音にとられて了ふ。

錯雜した岬角は、益々頻繁に、見<sup>あらは</sup>れては隠れ、隠れては見れる。もう漁村などは無い。もう一つ廻れば愈々島が見えはじめるといふあたりの、岬の鼻に船をとめて、岩の蔭に日を除けながら、船頭達と一緒に用意の辨當を喰べる。午後二時頃である。こゝまで凡そ二時間かゝつたわけだ。

## 三

さて、その大きな岬角を、この邊からは陸に引き添ふやうに船を進めて、ぐるりと一廻りまはると、やがて、前面に、一つの平つたい島が現れた。

あれは、お<sup>お</sup>ば<sup>け</sup>島といふのだと、代り合つて休んでゐる無口の船頭が教へる。遠くから見ると大きく、近づくに従つて小さくなるからさう云ふのだといふ。なるほど、近づくにつれて小さくなる。小さくなるのでは無い。幾つもの小さい島——島といふよりも岩礁に分裂するのである。



此の邊から、島——といつても皆岩礁なのだが——が、ちらほらと見え出し、斷崖の姿も、次第に面白くなる。

斷崖の裾から走り出した岩礁が、やがてとぎれとぎれに尖端だけを水上に浮べて、蒼い波の上に真直な黒い點線を引いてゐるのがある。船は、その點線を横切つてすすむ。この點線のやうな岩礁については、面白い傳説があるのだが、而して、船頭の口からもそれを聞いたのだが、今は忘れて了つた。

船が進むにつれて、景色は益々面白くなる。牛の横はるが如く、いぬ狗の走るが如く——といふやうな漢文でもなければ、とても形容しきれない所謂奇巖怪石の様々なやつが、崔嵬として、また突兀として、絶壁の裾にむらがり立つてゐるのである。犬吠ヶ崎でなければ江ノ島の稚兒ヶ淵あたりでもいゝ、あゝいふ景色を、五六倍の大きさにして、ものゝ十五六町も引延ばして考へれば、略々想像がつくかも知れない。××ヶ岩、××ヶ岩と、一々名がついてゐて、一々教へて貰つたのだが、今はみんな忘れて了つた。たゞ一つ龍ヶ岩といふのを覚えてゐる。ピラミット型の大きな奴で、かなくそいろう鑛滓色の肌には、小さな松などがところどころに生え、裾の方には貝殻が

一ぱいくつついてゐる、頂上には鳥の糞が積つてゐる。高さは、五六丈許りもあらうか。龍が頭を振りあげたやうな形をしてゐるそのてつべんのところ、枯草見たやうなものか、一とかたまりくつついてゐるのを見つけて、何か？ と聞くと、

「みさごの巢だ。」と船頭が答へた。

岩礁を嚙んで波は躍りあがる。その邊へ來ると、船の動搖は非常に激しくなる。幸にして私は船に強かつた。舷にしがみついて、貪るやうに眺める。こゝへ來て、はじめて眼が覺めたやうな氣がする。

眼が覺めるといへば、その海の色だ。海の色は濃い紫色をしてゐる。岩礁は概ね鑛滓色をしてゐるが、中には炎のやうに眞赤な色がある。而して、それ等林立した岩礁に背景をなす斷崖の或る部分は、燃え立つばかりの緑に掩はれてゐる。紫、赤、緑、而して岩裾を嚙む波頭の雪のやうな白さ。それ等の色彩が強烈な眞夏の日に輝いて、しかも、はげしく揺れる船の中からは、上に下にいりみだれながら不安な錯雜した印象となる。——宛として未來派の畫面であつた。



さあ、これから面白い、といふ意味の事を云ひ乍ら、船頭は、えッし、えッしと一際聲を張りあげる。而してもう一つの岬角を廻つて、すこし進むと、斷崖に添うて、今までのよりは一際大きな岩礁が、三つ四つ立つてゐて、岩礁と斷崖との間は、狭い水道をかたちづくつてゐた。船は、その間に漕ぎ入れられた。その水道は、漕のやうに靜かで、深藍の水には、綠草に掩はれた兩方の崖が深く倒影を沈めてゐる。その綠の影の中に、白くほのめくものがある。——眼をあげて見ると、崖の上の草むらの中に、白い花が二三輪咲いてゐた。多分百合の花だつたらう。

二三町ほどの水道を渡つてゆくと、今度は岩礁の中間が、辛うじて船を容るゝに足るだけの洞門にくりぬかれてゐるのにぶツつかつた。大棧橋といふのである。

その次が、蒿雀の窟である。岸の斷崖に、深くゑぐれ込んだ洞窟——江ノ島の辨天の窟に似て、あれよりもすつと廣い、疊なら十疊も敷けようといふ大きな洞窟である。船頭たちは、そこで一寸躊躇してゐたやうだが、やがて思ひ切つたやうに、舳をその窟に向けた。船ははげしく揺れる。半分ほど入れかけると又一つ大きく揺り上げて、その拍子に、舳を強く岩壁に打ちつ

けてしまつた。

「今日は、いけねえ」と、船頭は残念さうに云つた。私は、眞暗な洞窟の中をそつとのぞき込みながら、その奥の方にびた／＼と鳴つてゐる波の音に耳を澄ました。

大棧橋、蒿雀の窟——男鹿半島の勝は、先づこれまでである。そこからすこし行くと、もう岩礁の奇は盡きる。しかし、私はその絶壁がやがて綠の草に掩はれながら、見上げる眼もかすむばかりの高みまで、大佛の背のやうな圓みを以てつゞいてゐたそのなだらかな感じを忘れる事が出来ない。而して、一體、どこをどうして來たものであらうか、その中腹のあたりに、白い手拭を冠つた女が二三人しきりに草を刈つてゐたその豆人形のやうな姿と、その女たちの歌ふらしい幽かな唄の聲とを忘れる事が出来ない。

#### 四

そこから船を返した。歸りは、追風に帆を孕ませた。船は滑るやうに走つた。

材木で名高い本山、眞山の姿を、帆の蔭から眺めながら、蓆の上に仰臥してゐると、思ひの



外早く、船川の港についた。往きには三時間あまりをつひやしたところを、僅か一時間あまりで歸つたのである。

舟からあがると、もう黄昏近かつた。私は、船頭の一人に案内して貰つて、町はづれの海角に立つてゐる大観閣といふ家に宿る事にした。この家は元來料理屋なのだが、假に宿屋をも兼ねてゐるといふ事で、位置もよく、構へなども頗る堂々としてゐた。

夜になると、町の方から、どうん／＼太鼓の音が聞えて來た。丁度、舊曆の盆の十六日で、町では盆踊りがあるといふ事だつた。私はかなり疲労してゐたが、町の方へ出かけて見た。

町の中ほどと覺しい、四つ辻の廣場で、五六十人の男女が輪に成つて踊つてゐた。二三日前、會津の東山で見て來たそれと較べると踊りの振ぶりが非常に單純な上、東山のやうにみんなが歌ひながら踊るのでなく、一人の歌につれて、他は黙つてをどるのである。原始的で、ひどく寂しい。それが、いかにも此の土地にふさはしい感じである。

十分ほど、その踊りを見てから、灯の少ない町の灯をたよりにあてもなく歩いて見た。歩いて行くうちに、へんな一廓に出た。家々の門口にのれんが下つてゐて、のれんの間から、白粉

をつけた女が顔を出してゐる。ある家では、一人の女が、小さな鬘かみをのせた小さな角力取の袖を捕へて、しきりに何かさゝやいてゐた。

そんな情景も、今、何となく物哀れた感じで思ひ浮べられるのは、矢張、あの北海の濱ほとりのさびしい漁港といふ土地柄故であらうか？

宿にかへつて寢床に就いてからも、町の方からの太鼓の音はいつまでもきこえてゐた。便所におきたついでに戸をあけて見ると、美しい月が中天に冴えわたつてゐた。(十二年五月)



## 會津小記

九八

出發間際に來合せてゐたY君が、序だからと云つて上野停車場まで送つて呉れる。發車に十分前、同行のM君は瀟洒とした洋服姿で先刻から待つて居た。汽車はすいてゐた。カルモチンを飲んで横になつたが思ふやうに眠れない。本當の睡眠が眞黒なものならば、まあ灰色位、鼠色位の睡眠である。その灰鼠色の意識の面を、銀の絲か何かで浮織にするやうに、時々驛夫の呼聲がする。「大宮」「白河」「郡山」——「郡山」といふ聲ですつかり眼が覺める。空はほのぼのと明け放れてゐる。すこし曇つて、時々、小雨が窓ガラスに斜めの線を引く。

去年の夏、東山に遊んだ時、此の線路の兩側に、青草交りに眞赤な撫子なすしとが澤山咲いてゐるのを見たが、今年は見つからない。盤梯山は雨上りの空に、涼しい朝の顔を見せてゐたが、猪苗

代湖のあたりは靄が深く、湖面を見渡す事が出来なかつた。若松から三つ目が山都やまと——その目的地に着いたのは丁度八時頃、出札口の柵の邊にはI君O君その他七八人の人達が出迎へて呉れた。いづれも皆初対面である。

停車場を出ると左の方へ、緩い勾配の石ころ道が続く。兩側に小料理屋や、物を賣る店やが並んでいかにも「宿場」らしい寂びを帯びてゐる。降り盡して、道が二つに岐れるその角のところの山田屋といふ旅館に案内される。入口は一階だが、導かれた奥の間は、崖に臨んで二階の趣をなしてゐる。崖下の叢から縁の欄に近く幾筋もの繩が張られて、それに巻きついた朝顔が隠葉れに點々と花をつけてゐる。相當に廣い宿屋だが、客は殆ど無いらしい。女中も居ないらしく、家の息子らしい少年が茶などを運んで來る。呑氣である。

十分ばかり雑談を交へた後、人々は會場の方へ行く。私とM君は横になつて寝る。少しうとうとした處へ、福島新聞のE君が來る。晝飯をすまして休息する間もなく、會場の支度が出来たといふので、I君やO君が迎ひに來る。會場はそこから一二町の、小學校の講堂である。講演といふ事をするのは、これで三度目である。出番を待つまでの氣持がいやなので、先にやら



して貰ふ事にする。聴衆は凡そ二百人位、若い娘さん達や老人達もすこし居たが、大ていは青年達である。演壇の卓の上には、紅葵が活けられ、大きな氷塊も置かれてある、「文藝に現れたる都會性と地方性」といふ題で、怪しげなおしやべりを一時間ばかりする。

それからM君の約二時間の長講が済んで、記念撮影などして、五時頃そこを出る。宿へは歸らずにI君の家にゆく。I君の家は「清水館」といふ大きな料理屋で、まだ若いI君はお母さんと二人で自らそれを經營してゐるのである。「清水館」も前の宿屋と同じやうに崖に臨んで建てられ、私達の導かれた二階の廣間は、涼しい風と好い見晴らしをもつてゐた。

和尚山といふ面白い傳説のある緑の小丘を前にして、右手の方には赤ペンキぬりの鐵橋が眺められ、その鐵橋の下をゆく溪流の末が、左手の方の田の青、丘の青、林の青を縫うて微かに夕日に閃めいてゐる。視野が狭い代り、こじんまりと纏つた、しかも、かなり變化に富んだ溪谷の眺めである。

I君や、I君にそつくりな、一寸見ただけでは區別のつきかねるI君の弟さんが、種々親切にもてなして呉れる。一浴びしてさつぱりとした浴衣に着換へ、縁に出て茶を飲みながら、次

第に黝すみゆく緑の中に、ぼつり／＼と黄色い灯影をにじませて、蒼然としてくれてゆく山郷の夕を、淡い旅愁を以て眺めてゐると、やがて、青年團長のO君や、校長さんや、その他の人達があとから／＼と二十人ばかり集まつて来る。

やがて、宴會が開かれる。三味線を弾き、歌を唄ふ女達も五六人現れて、一座頗る賑かである。山肴不味<sup>まづ</sup>からず、地酒もなか／＼芳醇である。水車番をしながら、熱心に文藝物を耽讀するといふA君、その他の人達と、ぼつり／＼話しながら氣持よく酔ふ。山都には桐が多い。宿屋の庭にも、學校の庭にも、すく／＼と幹を連らねて居た桐の樹——その桐の樹のやうな、のんびりとした素朴な姿を山都の青年達は持つてゐる。

十一時近く宴が散じた。宴が散じてから、ヤナを見に行かうと校長さんが發議される。而して、團長のO君と校長さんと、もう一人とが東道の主となつて、カンテラと提灯とに危い足許を照らしながら、草叢の露を分けたり、石ころの坂を降りたりして、河畔の方へゆく。桐の林に入る。婆娑として揺れる梢の葉越しに、片割の月が白い光を碎いてゐる。溪流の瀬の音に伴奏して、しきりに蟲が鳴いてゐる。やがて河畔に出る。團長のO君が水の中に入つて、渚に繫



がれた舟を押し出す。それに乗つて對岸に渡り、カンテラの灯に浮びあがる月見草の花を分け、石ころ道をしばらく行くと、まだ木の香のするコッテイヂがある。ヤナ番の小屋である。O君はそこに洋服を脱ぎ捨てるとサルマタ一つになつて河原の方へ走つて行く。山國の夜はもうかなり寒い。私などは、浴衣の上に單衣と羽織とを着てゐる程なのに、精悍なO君は、「何、構ひません。」と云ひ乍ら、水の中に飛び込んだ。ヤナへ渡すべき舟を求めるために、對岸に渡るのである。O君が對岸へ着いた頃、その對岸の屏風のやうに切り立つた崖の中ほどのところに、提灯の火が一つ見えた。「おうい」と呼ぶ聲もする。その険しい崖道を降りて來るのはI君らしい。I君の家——清水館の、先刻までの我々の宴席であつた部屋は、その暗黒な崖の頂上に、芝居の書割のやうに、明るく小さく描き出されてゐるのである。

やがて、O君が棹さして來た船には、I君兄弟ともう一人が、酒だのサイダーだのを用意して乗つてゐた。私達はその船に乗つてヤナの方へ渡される。ヤナに近づくと波はかなり荒い。川の中央に、細い割木で編んだ簀を斜めに立て、流れと共に落ちて來る魚をその上にはね上げさせるのがヤナの装置である。落ちかかる瀬が急に沮まれて、躍り立つ波頭が簀の子の上に白

く翻ると、その波頭の中に、折々きらりと銀鱗がきらめく。而して、鮎だの鯉だのが打ちあげられる。面白い見物である。しかも空には微かな月影があつて、身をめぐる灘聲なだせは山國の夜の更けゆくまゝに訝えかへり、仄暗い夜を、二つ三つの提灯の光で、この躍る波と、きらめく鱗との、一つのシンだけに切り抜いてゐるのである。——私は或る神祕的な感じに打たれた。

一行はやがて前のヤナ番小屋にひきかへした。土間に焚火をして、今捕つて來たばかりの、而して未だびく／＼と動いて居る鮎や鯉や大きな鯰やを串焼にし、それを肴に酒を呑みサイダアを呑んだ。何といふ面白い饗宴！ 青年達は語尾に「のし」といふ音のつく土地訛で無邪氣に語り合ひ、色の黒い校長さんは、人の好い微笑と共にしきりに杯を含んでゐる。私は、永久にこの一夜の興を忘れ能はぬであらう。

そのヤナ小屋を引き上げたのが二時、清水館にかへつて床についたのは、曉の三時頃だつたらうか。疲れて、ぐつすり寝て、眼を覚ますともう十時になつてゐた。

今日は新潟へ廻つて、北國の美人の都を一瞥して歸らうかといふ氣持もあつたのだが、I君が尋ねて來て、熱鹽の温泉の笹屋といふ旅館の若主人が、是非來遊を待つ旨を語つて、しきり



に誘ふので、その方へ行く事にする。

I君達に送られて、十二時半頃の汽車で山都やまとに別れる。次の驛の喜多方まで二十分とかゝらない。驛前の自働車に乗つて、瀟洒として喜多方の町を走り抜けると、漆の林や、芒の原や、桑の畑や、黄ばみかけた稻田やに點綴されつゝ、清麗な感じのする部落が続く。次第に山深い感じがして来る。やがて山裾に縁どつて綺麗な溪流が流れてゐるところへ出る。その溪流の橋を渡ると、自働車はだら／＼上りに、一つの小さい峡谷の中にはひつて行く。若い畫家であるS君の經營してゐる笹屋旅館は、その小高いところに、景勝の位置を占めてゐる。

二階に導かれる。此の熱鹽の生れで、日本大學に學んでゐるといふK君などが來られる。K君が色々と話して呉れる。此の温泉町は袋になつてゐる此の峡谷のどんづまりの處に、もつと小規模に形づくられてゐたのだが、一昨年こぞの春全焼して了つたので、今すつかり新しく建て直されつゝあるのだといふ。笹屋の位置してゐる地域も、もとは畑であつたのを切り開いたのだといふ。どの旅館もまだ新築が落成しないので、聊か落着かぬ感じはするが、新しい丈けにさつぱりして、いかにも氣持がいい。笹屋の若主人のS君は號を宇響と云つて小室翠雲の門に學

んだ事のある人、而して、趣味の旅館を經營したいと云つてゐる人丈けに、家の構へなどもなか／＼藝術的である。

S君やK君に導かれて、もとの温泉町で、今も二三軒の旅館がごちやごちやと並んでゐる山裾の方へ散歩する。峡谷が窺すまはつた處に古い寺がある。示現寺と云つて玄翁和尚の開基と傳へられてゐる。玄翁和尚は、那須野の殺生石を濟度した坊さんだが、寺の寶物の中には、その殺生石を打摧いたといふあかざの杖だの、後小松帝の皇后から和尚が拜領したといふ蓮の絲で織つた法衣の片袖だの、和尚の背負つて歩いた笈だの、穿いて歩いた下駄だのがある。いづれもあやしげなるものばかりの中に、和尚と法力を争うて降參した天狗の爪だと稱するものがある。

夕方近く、福島新聞のE君——昨日、山都の山田屋で逢つた——が見える。S君、K君、I君にE君を加へて、小さな饗宴がはじまる。きれいに晴れた空には、月影が冴えてゐる。その月の下にくつきりと輪廓を見せた四つの峰を、右の方から、護法山、陣場山、湯館山、秀洞山とK君が教へて呉れる。護法山は、先刻見て來た示現寺をその裾に隠した山で、ピラミット形をしてゐる。秋は紅葉、春は櫻の眺めが美しいといふ。秀洞山には、こぶしの花が一面に咲くと



云へば、其頃の風情も思ひやられる。その四つの山を遠景として、すぐ前には植込の松の幾株が夜風に歌ひながら、街燈の灯を葉越にちらめかせ、その向うの一段落ちた谷底のやうなところからは、藝者屋の三味線が幽かにひびく。而して、こゝから川筋は見えないが、護法山の麓をめぐる溪流の音が、しめやかな夜を一層しめやかなものにして、遠くせうらいで行くのである。

E君は愉快な男である。酔ふと身體に似合はぬ細い聲で歌ひ出す。S君も長い間の畫學生時代の仕込とおぼしく一寸黒つほい喉をきかせる。夜は更けても興はなか／＼盡きず、一浴して枕に就いた時はもう十二時に近かつた。

翌日は雨だつた。斜めにしぶく雨を隔て、濡色の美しい護法山の緑の山肌が朝寢の眼に爽かである。I君やE君としばらく話し、十一時の自働車で立つ。藝術を愛するS君はその道にたづさはる人に並々ならぬ好意を有つてゐた。私は、心地よい一夜の泊りを、心でS君に謝しつつ、この靜かな美しい熱鹽の溫泉場を後にした。東山は有名な溫泉場であるが、俗悪居るに堪へず。熱鹽は東山よりもすつと清新で、すつと粗朴である。殊に若き藝術家なるその主人によ

つて醸された笹屋の空氣は、私達にとりて甚だ氣持のよいものであつた事を記しておく。

十二時四十分の上りで喜多方驛を立ち、午後十時半上野着。會津の行は、丁度三日ではつた。

(十一年九月)



## 旅のノオトから

一〇八

### みさごの夢

男鹿半島の島めぐりをすまして、船からあがると、もうたそがれ近い光りが、石炭の山が積まれたり、樽のやうなものがころ／＼ころがつたり、雑然ととりみだされてゐる船川の港の埠頭をあか／＼とてらしてゐた。一日の労働を了へた若い女労働者のむれが、何かわけのわからない土地なまりで語り合ひながら町の方に歸つてゆくあとについて、私も船頭の老爺に案内されて、今夜の宿にといそいだ。

船頭の老爺が、東京のお客様だつてびつくりするやうな立派な宿があるといつて、私をつれていつたのは、二三町も町を出はづれたところの小高い岡の上にある大観閣といふのであつた。

料理屋をかねて土地の藝者なども出入するらしい家で、何處かの座敷からは三味線の音がきこえて來た。半日、波の上でくらししたせゐか、私はしくしくと腹が痛み出した。そこへ出された、この地方の名産だといふ眞青な林檎が鉢にもられたのを見ると腹の痛みが餘計にひどくなつたやうな氣がした。私は夕飯も食べずに、床をしかせて寝た。何だか心細くなつた。

少しうと／＼して目をさますと、腹痛は少しうすらいだ。まだ宵の口らしい。町の方からはかすかに太鼓の音がする。戸をしめに來た女中に聞くと、盆をどりの太鼓だと云ふ。

なか／＼眠れさうもないので、私はぶらりと町の方に出て見た。町の中心部と思はれるあたりの四辻の廣場に、五六十人の男女が輪を描いてをどつてゐる。灯がとどかないのでうす暗い。うす暗い中に浴衣の袖をひるがへして踊つてゐる。東山で見た盆をどりは、をどりに唄が伴ふので大へんにぎやかだつたが、こゝでは、歌ふのは一人だけで、あとのものは、だまつてたゞ踊るのである。妙に寂しい感じである。

二十分ほど見てから、あてどもなくあるき出す。どこへいつても暗い。

ふと、へんな所へまぎれ込んでしまつた。兩側におなじやうな構造の家が並んで、入り口に



は暖簾を下げてゐる。暖簾の間から若い女が顔を出してゐる。或る家で、小さな角力取が、女に袖を捕へられてこまつてゐる。その女達が皆不思議に美しくなまめかしく見える。

歸りに、宿への坂道をのぼりながら、仰いで見ると、いつの間にか晴れ渡つた空にまんまるい月が出てゐた。耳をすますと波の音も聞えてくる。町の方からは相變らず太鼓の音がする。

また、少し腹が痛み出した。私はじつと目をとぢた。私の目には、月光のもとに荒れ狂うてゐる荒磯の光景がゑがかれた。その波のしぶきをあびて立つ岩礁の天邊てんべんにある鳥の巢がゑがかれた。その巢の中にねむつてゐるあの灰色の翼をした鳥——それはみさごだと船頭が教へてくれた——の姿がゑがかれた。しかし、何となく物悲しい氣持になつた。遠く來た旅の心であらう。

(十二年七月)

## 鳴子温泉

鳴子の停車場で降りたのはもう夕暮だつた。僅か二三町のところを俥に乗せられて、鳴子ホ

テルといふのに案内されたが、客がたてこんでゐるので合宿で宜しければ——といふのである。合宿は閉口だ。番頭の手からバスケットを取返してそこを出て、隣の宿に這入つて見たが、そこでも同じやうな返事である。もう一軒訊いて見たが、矢張り同じ返事だ。それにどの家も皆旅館といふよりもはたごといふに相應ふさわはしいつくりで、木賃の湯治客がぎつしり詰つてゐる様子なので、未だしも最初の鳴子ホテルが一番宜ささうだつた。が、今更そこへ取つて返すのも癪だ。止めて了へ！ といふ氣になつて、石ころ道のだらだら坂を停車場の方へ歩き出すと、又、大粒の雨が、颯と嵐氣を煽る風に乗つてやつて來た。もう四邊は蒼然と暮れてちらちらと灯影がちらめき出してゐる。丁度盃蘭盆なので門毎に焚かれる火の、白々と立ちのぼる煙が、横靡きに夕闇を刷き乍ら眞珠色の暮靄に融け合つて、この騒然たる温泉街の一廓に夢幻的な雰圍氣を漂はしてゐる。私は町角の茶店に雨を避けて、しばらくぼんやりとしてゐたが、急に去り難い愛着が感じられて來た。私は、雨の中を小走りに、町のつきあたりが一番大きな宿——「よこや」といふ看板の出た宿まで走りついて、そこに泊ることにした。勿論、合宿を承知の上で。



二階の一間に通される。相客は山林係の小役人だといふ小さい圓い五十ばかりの老人で公務の途中で一寸一浴といふところらしい。老人は直ぐ打解けて、北海道の定山溪の話などを樸訥な調子で話して呉れる。そこへもう一人、四十ばかりの紺の鯉口を着た男が、仲間に入れて下さいと云ひ乍らはひつて来た。名刺を呉れたのを見ると石の巻の酒屋さんである。

夕飯の時、酒屋さんは連りに麥酒を抜いて山林係にすすめ、私にもすすめる。女中を捕へて傍若無人に冗談を云ひかける。一寸、弊に堪へ無いといふ氣もしたが、話してゐるうちに、その十七八の女中も矢張り石の巻生れだといふ事が判り、ちや、お前は×町の六兵衛を知つてゐるかなどと、酒屋さんが膝を乗り出すと、女中も覺えず、知つてますと歡びの聲を擧げたりする。亦、一種の情趣である。

浴槽は小さく暗く汚ないが、浴室はいくつもある。鰻湯といふ、ぬるぬるとする湯があつて此處の名物だといふ事だが、氣味が悪さうなので入らなかつた。男女混浴であつた。

湯から上つて縁に出ると雨がまた一連り降つて来た。縁は中庭に面してゐる。中庭を隔てて寄宿舎のやうに、幾十とない小さな部屋が、それぞれ灯影を輝かして並んでゐる。旅館のやう

になつてゐるのは、私達の泊つてゐる室と其他二つ三つだけで、あとは皆木賃制度だといふ事だが、なる程それらの室々は一室一所帯の觀をなしてゐて、半裸全裸の老幼男女は勝手放題に喚き合ひながら、いかにもアットホームな氣分を楽しんでゐるらしい。道中記か何かの繪に見るやうな、いかにも古風な原始的な温泉場の感じは、なかなか悪くない。

石の巻の酒屋さんは、其晩何處かへ出て行つて歸らなかつた。聞けば、賣笑婦の多い土地だといふ事だつた。

(十二年七月)

## 清 澄 山

鯛ノ浦の鯛は豫想した程では無かつた。船頭が舷を叩いて鯛を投げ入れると、濃藍の波の底から豊かに鱗を振つて、紅い鱗を幻のやうに波間に浮べる——一寸神祕的な感じはするが、何もたいしたもんぢや無い。尤も、その日は既に幾度も呼び出されて、餌に飽いた懶さから鯛どももズルをきめ込んでゐたらしい。惠比須三郎の竿の先に半圓形にはねてゐるのを見ても、鯛



は活潑な魚だと思つてゐたが、鯛ノ浦の鯛は恐ろしく不活潑だ。人に飼はれて見せ物になつて、長い間遊食の生活を續けて來た此の一族は、既に鯛の本性を失つて了つたものと見える。

舟からあがると午後三時頃だつた。鴨川行きの自働車に乗る。私達の仲間即ちMさん、N君、私の三人と、東京の商店の主人だとあとで聞いた四十がらみの瘦せた男と丸鬚に結つたその細君、細君の親戚らしい十七八の女學生風の娘さんと、事務員體の若い男、以上の七人に乗せた自働車は他のボロ自働車とは似てもつかない車體を綠色に塗つた小ぎれいなやつで、運轉手の駒ちゃんといふ二十ばかりの男も、此の海岸傳ひの自働車會社の運轉手達の中では群を抜いたハイカラらしい。房州一番の自働車だと駒ちゃんがしきりに自慢したのも無理はない。

清澄山に登らうとMさんが云ひ出すと、駒ちゃんが先づ同意する。餘り氣が向かなかつたらしい細君もとうとう決心して、同勢揃つて山登りをする事になつた。自働車を山裾の茶店の前で駐め、駒ちゃんを案内に立てて登りかけたが、坂が次第に急になると共に緑が益々深くなり、某博士記念の植林のあたりになると、細君は五六十歩の後に落伍した。

「此間、文士の加藤一夫さんが上つた。文士なんでものは意氣地が無いもんで、はあはあと隨分苦しさうでしたよ。」と駒ちゃんは、ふとこんな事を云ひ出した。

「うん、まつたくやくざなもんだよ。」と、N君が苦笑しながら合槌を打つた。私も、N君も少息切れがして來た。

山頂に着いたのは午後六時頃だつた。宿屋があり、茶店があり、その他人家十數戸、山頂の一寰域は、蒼然たる嵐氣の中に靜かに夕を迎へてゐる。夕日は清澄寺の山門に僅かに餘照を残して、杉樹立を背景とした本堂の棟のあたりには既に暮靄が漂ひはじめてゐる。寺の庭には紫陽花が真盛りである。しきりに茅蜩が鳴いてゐる。金鈴を振るといふ形容は、正に此の時此の境にふさはしい。

庫裡に入つて水を乞うた。その水のうまさ！ それから、海岸までも見渡せる大景に眼を遊ばせた後、寺の寶物を見て下山の途に就く。旭の森へは、暮れかゝる日脚に急せかれて行つて見なかつた。

下りる途はらくだつたが、細君はひどく弱つたらしかつた。若い娘と會社員風の男とは、何か話し合ひながら軽い歩調で楽しげに先へ下りて行く。駒ちゃんは淋しさうに口笛を吹き乍ら、



そのあとを歩いて行く。——途の半ばですつかり暮れて了つた。暗い緑の中にほつりほつりとほのめいてゐるのは多分百合であらう。

その夜は鴨川の宿の、腥い室で明かした。駒ちゃんも一緒に泊まつた。而して翌日は仁右衛門島を見て北條へ出た。駒ちゃんの青自働車は、私達の房州めぐりを大へん快適なものにして呉れた。これは樂屋話だが、私は後、駒ちゃんをモデルにして書いた「青自働車」といふ小説を或る雑誌に発表した。駒ちゃんは手紙をよこして、それを見せて呉れと言つて來たが、私は未だ見せない。この機會に、あの青自働車の駒ちゃんの健在を祈つておく。(十二年七月)

## 文壇の一隅にて



文學の發展

### 地方文學と都會文學

これはかつて或るところで述べた事だが、私は、明治大正の文學の變遷を、都會人文學（乃至都會人的文學）と、田舎者文學（乃至田舎者的文學）との相消長したかたちとして見度い。生粹の東京人たる尾崎紅葉を中心とした硯友社の文學は、都會人文學であつた。硯友社の文學に代つて興つた自然主義の文學は、その主唱者たる田山花袋が田舎者であるやうに、全く田舎者の文學であつた。しかして自然主義の文學に代つて新技巧派の文學は、再び擡頭した都會人文學に外ならない。ところで、新技巧派の文學も今や正しく衰運に向つてゐるが、これに代る可きものが、いはゆるプロレタリアの文學であるかどうかの問題は姑く措いて、それが、三度起る田舎者文學である事は争はれない――。



私はこの説を背景として、もう少し、思ふ所を述べて見度いと思ふ。

最近五六年の間、我が文壇に主流を成してゐたものは、何といつても、いはゆる新技巧派の文學である。自然主義の田舎者文學が猖獗を極めてゐた時、都會人文學の孤壘によつてこれと對峙してゐた夏目漱石——その夏目漱石を宗とする新技巧派が、大體に於て都會人乃至半都會人の文學であることは、何人にも直ぐにうなづけるであらう。ところで、この都會人文學の屬性を檢討して見る時、まづ氣がつくのは、名にし負ふ技巧派の、技巧的といふ事である。自然が田舎のものならば、技巧は都會のものである。しかして、技巧は、直に才といふものを聯想させる。都會人文學は、やがて才人文學だ。才といふものは、自分自身の爲のものであるよりはより多く他の爲めのものである、才人の才は美人の美と同じく、見る人の前に容かたちづくられる。少くとも、さういふ傾向をもつ。即ち對他的、對世間的、換言すれば社交的なもので、そこに都會的性質が見られるといつても宜しからう。技巧の文學は才の文學であり、才の文學は社交の文學であり、社交の文學は都會の文學であると見來つて、私の論旨は一貫するのである。この間の消息について遠い昔の例をとるならば、萬葉集と、古今集乃至新古今集とがあげられや

う。とほまをのひなざり 遠里小野の鄙振などを多くあつめた萬葉集に於て多分に見出さるゝ田舎者文學の要素が、主として宮廷の生活から生れた古今集乃至新古今集に至つて、いかに、都會人文學の要素によりて代られてゐるかを見よ。あの萬葉集の自然な素朴な姿なり氣持なりと、あの古今集乃至新古今集のあくまでも技巧的な才人的な姿なり氣持なりとを較べて見よ。

この例は、少しく突飛な感じを與へるかも知れない。が、私は、今のいはゆる新技巧派の人の中にも、秀句かけ言葉の妙に機才を誇つたあの王朝の風流才子達のおもかげを見ずにはゐられない。櫻かざして今日もくらしつといふやうなあそび本意の生活氣分を見ずにはゐられない。人間生活の第一義に觸れない、二義三義のわざくれといつたやうな調子を見ずにはゐられない。

我が平安朝の宮廷文學、乃至、佛蘭西十七世紀のサロンの文學をこゝに持つて來るのは聊か倫を失する傾きがあるかも知れない。が、いはゆる新技巧派文學の姿なり心持なり、其の背景をなす生活氣分なりに、前にいつたやうな、あそびが多い事は争はれない。洗煉された趣味の文學、磨かれた才の文學、人生の第一義に觸るゝ事の少い、即ち人間生活の根本的な惱わづらひみに關



る事の少い文學——さういふ氣味合ひのものである事は争はれない。

三月の『解放』に、片上伸氏が書いてゐる『表皮的差別相の文壇』といふ評論は、この點に於て頗る剴切である。思想を缺き、全的に物を見る心を缺き、末梢的に、表皮的の自我心から物を見ることに忙しくして、それを個性の主張だとか特色の表現だとか思ひあやまりがちであるといふ片上氏の非難はつまり趣味に囚はれ、才に阿り、あそびに耽るといふやうな傾向に對する非難と見て差支へ無からう。本當の自分の要求を遺れ、只管に他の喝采を博す可く、徒らに目先を變へやうとする社交的文學の一面の弊に對する非難と見てさしつかへ無からう。

而して、あそび、趣味、才——それら、都會人文學の屬性としてあげたものが、物質的に恵まれた、餘裕ある、生活の産物である場合が多いといふ事實から、いはゆる都會人文學は即ちいはゆるブルジョア文學だと斷ずるのは、少しく性急に過ぎるかも知れない。しかし、一面の眞理は、こゝに存すると私は思ふ。

文學を、プロレタリアの文學とか、ブルジョアの文學とか、そこに本質的な差別でもあるかのやうに區分する事には私は反對である。(其の事については、曾てある處で少しく述べた事が

ある。更に後の機會で、大に説いて見たいと思つてゐる。)が、最近五六年間、我が文壇に主流をなしてゐた文學が、ブルジョア的な姿と氣分とを多分に、あまりに多分に持つてゐる事は争はれない。其の反動として、今プロレタリアの文學が盛に唱へられるのは、必然過ぎるほど必然だと思ふ。曾て硯友社の文學の偏技巧に對して、排技巧を唱へたのは、自然主義の文學だつた。今いはゆるプロレタリア文學論者の口から、新技巧派の偏技巧に對する猛烈な排技巧論を聞くに及んで、私はここに歴史の繰返しを見るのである。私のいふ田舎者文學と、プロレタリア文學とは、全然別の範疇に置かる可きものかも知れないが、本當の自分の要求を遺れ、人生の第一義を離れ、才と趣味とあそびとに墮した新技巧派に對してあき足らずとする心持に於ては兩者に共通するものが多いと思ふ。

以上は、ほんの覺えがきである。意を盡さないが、この位にして置く。(十一年三月)



## 隨筆と小説

近松秋江さんの隨筆集を讀んで見た。洵に天下一品である。

あゝいふ面白さは、才や技巧からは生れない。人柄、風格、そんなものから來てゐる。才や技巧なら真似られる。人柄や風格は真似られない。秋江さんの隨筆は、だから真似られない。下手にまねると飛んでも無いものになる。

一體が隨筆といふものは、人柄とか風格とかの直接的な表現であつて、才や技巧がそこに介在する事を許さない。隨筆の面白味は、その人柄そのものゝ面白味であり、隨筆のねうちはその風格そのものゝ價值である。だから、面白い隨筆乃至いゝ隨筆は、未熟な人間には書けない。一通り出來あがつた、何等かの意味で一家を成した人にして初めて讀むに足るの隨筆が書ける。人柄、

風格——もう一つ別の言葉を使へば持ち味。それが隨筆の味である。隨筆は持ち味の藝である。

ところで曾て『新潮』の創作合評會で、小説と隨筆との關係といふやうな話が出た。日本の小説はどうも隨筆的だ、といふことから、私は日本の小説は隨筆の延長ぢや無いか知ら？ といふ考へを述べて見たが、必ずしもさうでは無いといふ人が多かつた。隨筆の延長といふ事は成程稍妄斷らしい。しかしどうも隨筆くさいと私は思ふ。隨筆的な持ち味本位の藝が重んじられてゐる。ひよつとしたら重んじられ過ぎてゐるといふ事も事實だと私は思ふ。(久米正雄君などは、心境小説とか、徳田水・佐藤水とかいふ言葉で、此の持ち味本位の小説を呼んでゐたと記憶する。)

隨筆的、持ち味本位の小説が、我が文壇に發生した原因としては自然主義の影響といふ事を擧げることが出来る。自然主義文學の排技巧、即自然の信條が、這般の作風を馴致した事は否定出来ない。所謂「人生の一斷片」として、一つの意義なり事象なりを、構圖拔きの不定形で無造作に抛り出すといふやうな自然主義の行き方が、かうした隨筆めかしい作品の發達を助長した事は争はれない。しかし自然主義の作品と云つても、西洋のそれには、矢張排技巧の中に技巧



があり、即自然の中に人工があり、構圖抜きと見えるところに立派な構圖があるといふ事は、ゾラ、モオパスサン等の作を見てもはつきり判るであらう。それ等の作は、日本の自然主義作物のやうに甚だしく隨筆的ではない。日本の自然主義作物は、その餘りに甚だしく隨筆的なる點に於て矢張日本獨特のものである。だから、隨筆的、持ち味本位の小説の盛行を自然主義の影響とのみ見るのは、決して當を得たものでは無い。もう少し深い、遠い、而して根本的な原因がそこにあると見なければならぬ。

もう少し深い、遠い、而して根本的な原因——それはつまり國民性といふやうなものに歸せられる可きではなからうか。廣く云へば東洋の、狭く限つて日本の、その民族性に個有な特質を討ねて、このやうな作風の淵源をそこに見出す可きではなからうか。

タゴールが云つてゐる。東洋の文明は森林から生れた。西洋の文明はモーターと漆喰との中から生れたと。東洋の文明は自然の中に、西洋の文明は人工の中に——といふ程の事は、多くの思索を要せずして明かであらう。之を要するに、西洋人はより多く人工的技巧的であり、東

洋人はより多く自然的無技巧的であると云つても大過無いと信ずる。この自然的、即ちどこまでも自然に即するといふ點は、東洋人の特質である。而して、特に日本人の特質である。

こゝに建築といふ事について考へて見る。支那には、それでも立派な建築がある。日本には個有の建築として見る可きものはない。建築と對稱的な音樂について見ても、日本には、オーケストラといふものが無い。この事實は、日本人が、組織と構圖とに短なる國民である事を語つてゐる。組織と構圖とは、自然の補足であり、同時に自然に對する叛逆である。組織と構圖とに短なる日本人は、即ち自然に忠順なる日本人である。音樂には、一節切ひとまきりのしらべのみを、建築には草ひき結ぶ庵のみを有つてゐるに過ぎぬ日本人は、文學にも三十一文字十七文字の詩と、「日ぐらし硯に向ひおもふことそこはかと書きつける」隨筆とを以て満足してゐたのでは無からうか。「源氏物語」は五十四帖の大作ではあるが、要するに平叙臚列の記録で、そこにすぐれたる構圖ありとも覺えず、「南總里見八犬傳」は、構圖の妙をつくしてゐるが、つまり支那文學の換骨奪胎に外ならない。西鶴の短篇を、直に隨筆の延長とするのは聊か無理かも知れないが、之を要するに自然に隨順する心持から産まれた藝術で、自然に對し、別に小宇宙を描き出



すの抱負を「好色一代男」の作者に見る事は出来ない。兎に角、日本人の藝術には、自然に對してもう一つの別の自然を打ちたてるといふやうな規模がない、意匠がない。全く自然に隨順して、若くは半ば自然によりかゝつて、そこに僅かに人工の餘地を偷むといふやうなものが多い。(日本人がいかなる場合にも自然を忘れぬ國民である事については永井荷風氏が或る小説の中で、食膳の上へのほせられる海鼠腸の桶、床柱に用ゐらるゝ皮のついたまゝの天然木などを例に引き、日本人の生活には、いかなる技巧と洗煉との中にも、「毫も人爲的技巧を加味せざる天然野生」の姿が所謂「雅致」の名に於て必ずどこかに残されてゐる事を語つてゐる。野口米次郎氏の『日本詩歌論』などにも此點に觸れた論說が多いと傳へ聞いてゐる。)

以上説いたところで、私の云はんとしたところは自ら明かであると信ずる。日本の小説の隨筆的であり、持ち味本位であるのは、つまり日本人の性質に於ける即自然的の傾向から由來されたものであるといふことを、私は云つて見たかつたのである。

斯くの如き、即自然的の傾向が一面に反社會的の傾向を示して來るのは、當然の事と云はねばならぬ。日本の文學者に於ける文人墨客趣味、超世俗趣味、遁避的趣味(趣味といふ言葉を主義と言ふ言葉に換へてもいゝかも知れない。)は、すなはちこゝから來る。この境に於ては、文章は經國の大業」といふやうな氣持は失はれ、文學は寧ろ一つの遁避所となり隱栖窟となり、一般的な人間生活社會生活のいとなみからは遠くはなれたものとなる。日本の過去乃至現在の文學に於ても、このおもむきはたしかに看取せられるでは無いか？

さて、私はなほ多くを云はねばならないのだが、かういふ談理的な口吻は、或は識者の嗤笑を買ふかも知れない。論文めいたものを書く時に、いつも私の感じる事だが、何だか判りきつた事を、云ふにも足らぬ事を書いてゐるやうな氣がしてひどく氣がさす。だから、結語として一言云つて、此の小感想の筆を擱く事としよう。

さて、私は思ふのである。隨筆文學、持ち味文學も勿論結構な事だが、これからはそれだけでは困ると。文學が單に遁避所であり、隱栖窟であつてはいけないと。もつと一般的な人間生活社會生活に積極的に呼びかけるやうな、ダイナミックに働きかけるやうな、洵に經國の大業たるに足るやうな文學を興さねばならないと。



隨筆は、「つれづれなるあまり」のすさびであつて、讀者を豫想しない。西鶴の言葉を藉りれば、「樂寢のまくらのてんごふ書き」であつて、唯、自分自身が樂みさへすれば、他が讀んで呉れようが呉れまいが、さういふ事は大して問題にしない。そのもの欲しげなところのない氣分はいふ。けれども、それではあまりに消極的だ。我々の文學をして、もつと、積極的なものならしめよ。社會生活、人間生活に動力的に働きかけるものならしめよ。芭蕉、良寛をその極致とするものならずして、ゾラ、ユウゴオ、トルストイの先蹤を追ふものならしめよ。

而して積極的な、動力的に働きかけるやうな文學には、必然的に、意匠が働き、構圖がはたらく。随つて隨筆的な安易な氣分からは踏み出さなければならなくなる。この氣分の根本的な動きから、我々は、本當の小説を、建築的雄觀をそなへたところのロオマンスを有ち得るに至るであらう。私の要求と祈願とはこゝにある――。

(十二年六月)

## 文藝の社會的浸潤

文藝の社會的浸潤といふ事は、換言すれば社會の文藝化といふ事である。從來、一般社會から甚だしく疎外せられ、閑却せられて、極端に輕蔑され無視されてゐた文藝が、今や漸くその價値を認められ來つた事は、洵に喜ぶ可き事實である。

而してこの社會の文藝化といふ事のうちに最も著しい一つは、教育の文藝化である。片上伸氏等によつて連りに提唱せられつゝある藝術教育の主張が、教育の上に、藝術の精神を攝り入れようとするにある事は言ふまでもない。從來動もすれば全く反對の方向をとつて進まうとさへしつゝあつた教育と藝術とは、今や、漸く接近して親しく握手し合はうとしてゐる。



教育と政治とは常に同じ道を行く。教育の文藝化といふ事は、云ふまでもなく一般教化に於ける藝術的精神の浸潤を豫想せしめ、一般教化に於ける藝術的精神の浸潤は、政治そのもの、文藝化の前提をなす。昔、支那は禮樂を政治の要具とし、又、文章を経國の大業となしたが、これはとりも直さず、政治の藝術化を語るものでなければならぬ。

だが、それは昔の事である。支那といふ外國の事である。今の日本で政治の要具とするものは劍であつて、禮樂ではない。文章は動もすれば亂臣賊子の業わざとせられてゐる。教育と藝術との握手はやがて行はれるであらうとしても、政治と藝術との握手は豫想す可くあまり遠い。「英太郎東助といふ大臣は藝術を知らずあはれなるかな。」と與謝野夫人が歌つたのはもう十年の昔であるが、十年後の今日も、藝術を知る大臣などは出て來ない、そして、これからだつてなかなか出て來さうもない。

佛蘭西の駐日大使クロオデル氏は彼の國第一人の大詩人であるといふ、また佛蘭西の國運民

命を一身に負うてゐる大政治家のクレマンソーは、小説を書いてその作頗る見る可きものがあるといふ。それからまた、佛蘭西では一流の大新聞の論説欄に、當代の作家月旦が堂々と載るのだといふ。斯ういふ話を聞くと、羨ましくなる。——藝術の社會的浸潤など云つても、今の日本のこんな状態ではまだ——お話にならないと云はなければならぬ。

しかし、かういふ状態に對して、我等は徒らに憤慨してはならない。勿論、これの一半の責めは、文藝に對してしかく鈍感なる社會そのもの乃至さういふ社會を作つた歴史そのものが負ふ可きであるが、一半の責めは、藝術家自身が負はねばならない。少くとも、明治大正五十年の文藝史に於て、我々は藝術家が餘りに退嬰的で、獨善的で、社會的感情に乏しかつた事實を——所謂「象牙の塔」にかくれて社會の活事實問題に觸れようとしなかつた事實を指摘し得る。社會の文藝化といふ事は文藝の社會化と相俟つ。藝術家がその所謂「象牙の塔」を捨て、巷に出づる時、その藝術の中に社會的感情が脈打つ時、即ちその藝術が社會性を帯ぶる時、文藝の社會化に伴うて社會の文藝化が始まる。兩者の間には、物理學でいふ交流作用が行はれるのである。



——而して今や正に其の時である。勿論、それが佛蘭西などと較べれば云ふにも足らぬ程度であるにせよ、兎に角社會と文藝の間に、或る種の交流作用が行はれはじめた事は争はれない。而して、これは喜ぶ可き現象でなければならぬ。

喜ぶ可き現象ではあるが、唯喜ぶ可き現象として樂觀してばかりは居れないやうなところがそこにありはしないか？ 私が、文藝の社會的浸潤といふ題目をこゝに取上げたのは、この喜ぶ可き現象の中に、戒心す可き或るものの潜んで居る事を思ふからである。

なるほど、これを五六年又乃至二三年前に較べれば、文藝が社會的に認められた事は驚くほどである。例を端的の事實にとるが、先づ文藝に關する雑誌や書籍の賣行がいに盛になつたか。文藝講演などの催しのいかに頻々として行はるゝに至つたか。藝術家の社會的地位がいかに高められ來つたか？——これ等の事實はたしかに、文藝の興味が一般化された事を語るものである。だが、考ふべき問題はこゝにある。

斯くの如く、文藝の一般化即ち社會的浸潤乃至普及は、争ふべからざる事實である。だが、浸潤と云ひ普及と云ふも、それが果してどれほど深く人々の心情に喰ひ込んで、生きた生命となつて人々の生活の上に働きかけてゐるか？ 文藝が其の本來の使命たる人間性への奉仕を、どの程度まで果し得てゐるか？——かう考へて來ると、一寸茫然自失の感がないでもない。

文藝の一般化を證據立てる最も端的の事實として、文藝書類の賣行の盛になつた事を擧げる事が出来る。尤もこれには、普通教育の普及によつて國民の讀書力が増加した事、又女子教育が發達して、女子が有力なる讀書階級を形づくりに至つた事などを、一つの原因として數へ得るが、要するに、一般社會の興味が文學に向つて動いて來た事を語るものでなければならぬ。だが、これ等文藝に於ける新興讀書階級は、果していかなる性質のものであるか？ 我々は、一應そこに思ひを致して見る必要があると思ふ。

これ等文藝に於ける新興讀書階級の性質如何？ 換言すればこれ等新興讀書階級の文藝に對



する興味の程度はどの位のものであるか？ それを知るには、どんな風の作品が最も彼等の迎ふところとなつてゐるか？ を吟味して見なければならぬ。而して之を吟味して見た上で、我々の了解し得るところは、彼等の興味が案外輕薄であり、浮淺であるといふ事である。我々は彼等の求むるところが單に讀物としての面白味である事を知つて失望する。それを生命の糧としてとり入れるといふやうな眞劍さがなく、唯、消閑の料として弄ぶ位の皮層的な興味しか持合せない事を知つて失望する。新興讀書階級、果して恃むに足る乎——これは慥かに一つの疑問たるを失はない。

大正八年の末、私は或るところで次のやうな意味の事を書いた。「讀物としての面白味が作品の上に重んぜられるといふ傾向は、本年に至つて益々甚だしくなつたやうだ。之は一般社會の讀書慾が盛になつたといふ事實を反映する。講談物の雑誌などが目ざましい賣行をなしてゐるさうだが、兎に角今まで書物などを手にした事のない階級乃至職業の人々までが、何か讀んで見ようといふ心持になり、又讀み得る丈けの能力と機會とを獲來つたといふのは喜ぶ可き事實

と思ふ。これから労働者の状態などが改善されるにつれて讀物の需要は益々多くなるであらうが、最初に需めらるゝものは、矢張講談のやうな、乃至は講談の延長のやうな、娛樂的のもの、讀んで面白い性質のものであらう。小説壇で「面白い小説」が迎へられるのは此の必然から來てゐる。」

この言葉は、これを二年後の目下の状態にあてはめても差支へ無からうと思ふ。今の文壇で、最も迎へられるのは「面白い小説」である。小説は面白くなければならぬ、といふのは可い。小説は面白くさへあればいゝと云ひたげなるに至つては、正に時弊の戒む可きものでなければならぬ。

自然主義の文學は、その現實的傾向に於て、實生活に觸れてはゐたが、似而非個人主義に囚はれて、單なる自家の問題にのみ没頭してゐたところから、作者自身の爲めのものではあり得ても、それと共に廣く人生の爲め社會の爲め即ち讀者の爲めのものである可き藝術本來の意義



を失つた。だから、自然主義の小説は、讀者にとつて甚だ面白くないものであつた。さういふ「面白くない小説」にくらべて、「面白い小説」が、その面白い點ですぐれてゐる事は勿論である。

けれども、小説は、唯、面白くさへあればいゝのであらうか。唯讀者の嗜好に追隨して、その淺薄な興味に阿ればいゝのであらうか？ 私は、「小説面白主義」に對して一半の賛意を表するものであるが、そこに大なる危険の伴ふ事を忘れる事が出来ない。

文藝の一般化によつて、文藝の作品は、從來に幾倍するの顧客を得た。が、この顧客は必ずしも好い性質の顧客ではない。自分の生命の爲めに之を購はうとはせず、淺薄な興味のため、單なる娛樂の爲めに之を購はうとするやうな顧客でさへある。我々の戒心事はここにある。

之を要するに、文藝の社會的浸潤乃至普及は、明かなる眼前の事實であるが、その浸潤なり普及なりは、案外、淺い程度のものである。社會と文藝との交流作用がはじめられた事は、争

ふべからざる目下の現象であるにせよ、その交流作用は、案外、皮層的である。さう私は云ひ度いのである。

而して、この程度に止まつてゐては、まだ〜甚だ心細い。たとへば、佛蘭西に於けるが如き徹底的な社會の文藝化、文藝の社會化を將來す可く、前途尙ほ遙かなりと云はねばならぬ。

藝術の事に携はるものは、この點に戒心しなければならぬ。私は、この小論の結論として、前に引用した私の二年前の文章から、更に一節を抜く事にする。「然し藝術家は商人であつてはならない。需要があるから供給するといふ以上に、何か信する處があつて書いて欲しい。勿論自ら通俗作家を標榜する或る人々を除けば、賣行を下して筆を執るといふやうな不眞面目な作家が一人なりとも我文壇にあらうとは思はぬ。が、しかし、不知不識の裡に群衆の喝采にひきづり込まれて行くといふおそれは何人にもある弱點だと思ふ。殊に、作品の需要が盛になつた爲



め、作品が著しく商品としての性質を帯び来れる今日、作家は十分此の點に戒心しなければならぬと思ふ。」

(十年四月)

## 階級藝術について

むづかしい理窟になると私には判らない。が、兎に角、私の考へをいふと、第三階級とか、第四階級とかいふ區別は、社會生活に於ける物質的基礎の上に立つところの、物質的條件から生じたところの區別である。この物質的基礎乃至物質的條件が、人間の精神生活に直接間接に大きな力で働きかけるといふ事は争はれない。が、人間の精神生活が、唯、そのみによつて動かされるものだとは、私にはどうしても思へない。所謂唯物史觀には素より半面の眞理はあらうが、それを以ては蓋ひきれないほ半面の眞理のある事を私は信じてゐるのである。人間の精神生活は、物質的生活によつてのみ規定せらるゝものではない。寧ろその物質的なものを克服し、制御してゆくところに、人間の精神の力があり、權威があるのだと私は思ふ。而して



藝術は、この人間の精神の力と權威とに對する信賴の上に立つものだと私は思ふ。ブルジョアと云ひ、プロレタリアートといふそれ等の階級的區別を絶した、根本の人間性にこそ、藝術の立脚點はあるのだと私は思ふ。

ブルジョアの生き方が正しいかプロレタリアートの生き方が正しいか？ この間に對して、私はプロレタリアートを正しとするに躊躇するもので無い。プロレタリアートを正しいとする所以のものは其の生き方にこそ人間性の本當の發展の道が見られるからである。而して、藝術は常に正しいものの味方である以上、藝術家は當然、プロレタリアートの味方であればならない。しかし藝術家がプロレタリアートの味方でなければならぬといふ事は藝術家がその全藝術を擧げて、プロレタリアートに奉仕しなければならないといふ事ではない。プロレタリアートの生き方、その生き方を支配するプロレタリアートの精神のなかに、藝術家が求めようとする本當のものが、即ち人間性の本當の發展の道が、より多く含まれてゐるが故に、藝術家はプロレタリアートに味方するのである。云ひ換ればプロレタリアートの生き方乃至精神のうちに含まれた「本當のもの」に味方するのであつて階級としてのプロレタリアートに奉仕するので

は無い。藝術は常に階級を絶した根本の人間性に奉仕する。人間の爲めにのみすべてを捧げる。が、相對的な一階級に奉仕し、その爲めにのみすべてを捧げる事はしない。

第三階級に對して第四階級の稱がある以上、第四階級はつまり相對的のものであり、従つて過渡的一時のものである。藝術家の眼はその相對的のものを透して、一つの絶對的のものを見なければならぬ。その過渡的のものを通じて究極的のものを見なければならぬ。この一時的のものを透して永遠的のものを見なければならぬ。第三階級もなく、第四階級もなく、すべての人間が人間として一つの正しい生活に於て結び合つた境地、さういふ境地こそ、藝術家が最初から眼ざしてゐるところのものでなければならぬ。藝術家の眼は、常に永遠を見、究極を見、絶對を見なければならぬ。勿論、さうかと云つて、過渡の現象、一時の現象、相對的の現象に關心してはならぬといふわけはない。が、それのみ捉はれてはならない。たしか芭蕉の言葉だつたと記憶するが、不易と流行といふ事に就いて、不易の句を作らうと志す人も時に流行の句を作るが、常に流行の句を作らうとする人は、竟に不易の句をつくり得ないと言つてゐる。變な例をひつばつて來たが、此の理は、こゝにもあてはまると思ふ。藝術家が階級問題と



いふやうな過渡の、一時の、相對の現象に關心するのは差支へない。差支へないどころか、寧ろ關心せずにはゐられないのが當然であるが、この場合にも、彼の眼は、究極を、永遠を、絶對を見てゐなければならぬ。流行の句をつくること素より善いが、たゞそれのみ捉へられてゐては不易の句はつくり得ない。この芭蕉の言葉(?)には、我等に對しても大なる暗示がある。

以上の意味に於て、私は、藝術を階級闘争の道具としようとする事に反對する。階級闘争をやるならば、須く筆を捨て、戎軒に従ふ可きである。藝術を階級闘争の道具にしようと思つた時、藝術は失はれる。即ち藝術が藝術としての効果を失くする。と共に、闘争そのものにも大して役に立たないものとなる。藝術家の情熱が、自らにして一つの傾向となつて、實際の社會問題に働きかける場合——前の例で言ふならば、不易の句をと志しつゝ自から流行の句を作らずにはゐられない場合、さういふ場合にこそ、藝術は藝術としての永遠性を持つと同時に、傾向文學としての一時的實際的の効果を有つ。我等の求めるのはさういふ藝術でなければならぬ。

今こそ藝術家の情熱が、一つの傾向となつて實際の社會問題に働きかけねばならぬ時である。

——さういふ見方には私も十分に同感する。が、「第四階級の文學」を標榜して、意識的に、藝術を階級闘争の道具にしようとする人々の意見には、私は飽く迄も反對である。而して藝術には、第三階級もなく、第四階級も無い、と主張するに憚らない。

(十一年二月)



## 斷片語

一四六

### 才

近頃、才人藝術の跋扈を説く人がある。今の文壇に時めくものは輕佻なる才人の藝術であつて、小手先の器用な作家が小さな技巧で捏ねちあげた作品のみが歡迎される傾きがある、これは誠に慨く可き現象であるといふのである。成程そんな傾きが見えないでもない、而して、これは慥に慨く可き現象といつていゝかも知れない。

才とは一體どんなものか、此の「才」といふ言葉の本來の意義は何うかといふ問題になると一寸事が面倒になる。廣い意味での才といふものは、何事につけても必要なもので、多くか少くか、兎に角、いくらかの才といふものが無い以上どんな事だつて出來はしない。この意味で、

才の可否などは問題にならない。可否をいふ場合、その才とは、すつと局限された意味に於てのものである事勿論である。

所謂才人藝術に於ける才、所謂「才」とはどんなものか？

所謂「才」に就て、先づ考へ得らるゝ事は、それが主として對他的のものであるといふ事である。自分のものであるよりはより多く相手に見せる爲めのものであるといふ事である。更に云へば、所謂「才」といふものは、より多く他人との交渉に於て觸發せられ、より多く他人を對象とする事により鼓舞せらるゝものであるといふ事である。少し亂暴な論斷かも知れないが、私は敢て斯う考へる。——先づ他人に示さうとする、誇らうとする、相手を感心させようとする、喜ばさうとする、拍手喝采をさせようとする、而してその拍手喝采を得る爲めならば、少し位自分を傷けても、いや、全く自分を滅ぼしてもいとはない——所謂「才」の心理の中には、かういふところがあると私は思ふ。所謂「才」は、常に、その觀手、聽手を豫想する。而して、觀手聽手によつて觸發され、鼓舞される。進んでは觀手本位、聽手本位になつて了ふ。すべてを觀手、聽手に捧げて了つて悔い無い。さういふ性質を所謂「才」はもつてゐると私は思ふ。粹が身



を食ふ、といふが、才も亦身を食ふ。才人は才に身を誤るといふのがつまり是だ。所謂「才」の懼る可き所以である。

對他的——嚴密に云へば對他人的であるところの所謂「才」は、同時に、社交的であり、從つて都會的であると云へる。才人は多く都會人だ。都會人の生活は自然を離れた生活である。他なる自然を離れ、同時に内なる自然を離れた生活である。内なる自然を離れる時、即ち技巧的になる。所謂「才」は、技巧的なものである。そこには、理智と神経との織細尖鋭は見られるが人間本來の活々とした精神が失はれてゐる。そこから新しきものを生み出す力、而してそれによつて育む力が失はれてゐる。所謂才人藝術に對する非難は、この點に加へらる可きであらう。たとへば、『萬葉集』と、『古今集』乃至『新古今集』をとつて較べて見ると、此間の消息はよくわかる。『萬葉集』の歌は多く無技巧的で、所謂「才」に蝕られた痕がない。『古今集』から降つて『新古今集』になると、所謂秀句かけことばの技巧に充ちて、當意即妙といつたやうな理智の遊戯が無残にも生きた人間の精神を殺してゐる。

私は、今の所謂才人藝術を以て、『古今集』や『新古今集』に擬するものでは無い。況んや、此の混亂と動搖とを極めた、世界空前の大なるスツルウム・ウインド・ドラングの時代に於ける作家達の間には櫻かざして今日も暮らしつといふ、彼の王朝の貴公子達のやうな生活氣分が漲つてゐるなど、は夢にも思はない。が、私は、——これも矢張アナクロニズムなのだ——あの樸茂にして眞率なる『萬葉集』の詩人の落ちついた風格を懐かしく思はずにはゐられない。彼等は、何よりも自分の爲めに、自分自身の要求を第一として、自分の内の自然の聲を歌ひ出した。彼等は、あまり觀手や聽手を考へなかつた。彼等は「才」に累されなかつた。而して、「才」に累されなかつた彼等の藝術の裡にこそ、本當の叡智があつた。何だかいふ事がとりとめもなくなつた。が、大體の考へは、私は、これで云ひ得たつもりなのだ。

## 農 民

ゴリキイの『トルストイ追想記』を読んだ。なか／＼面白い。トルストイの面目が、實によ



く示されてゐる。

その中に、かういふ一節がある。トルストイが、ゴリキイの作品を批評して、その中に描かれた農夫について云ふ事には、君の書いた農夫は、あまりよくしやべり過ぎる。農夫といふものは、一般にそんな風に滔々たる雄辯で語るものではない。彼等は、常に口不調法で、いかにも魯鈍らしく物を云ふ。が、彼等の魯鈍は、本當に魯鈍なのではなく、一種の保護色である。彼等は、その保護色で自分を護りながら、狡猾に相手の心の中に潜び込んで、その急所を掴まうとするのだ——。匆卒に讀んだので、今はつきりと記憶してゐないが、トルストイは、大體こんな風に云つてゐるのである。私は、これを讀んで、流石にトルストイの觀察だと感心したと同時に、この農民の一般的性質が、露西亞も日本も些とも變つてゐないのを知つたのである。魯鈍の表情の中に包まれた悪がしこさ、樸訥の假面の下に隠された圖々しさ。遠い昔からの彼等の艱難な生活は、彼等を一種へんてこな人種に拵へあげて了つてゐるのである。

しかも、どうしてその爲めに彼等を憎む事が出来るか？ 奴隸とされた彼等が、奴隸として生きて行く爲めには、奴隸の智慧が必要なのだ。而してこれ等は、皆必要から彼等に餘儀なくさ

れた一種の奴隸の智慧では無いか。

が、彼等もいつまでも奴隸ではゐないであらう。いつまでも奴隸の智慧を必要としてはゐないであらう。ゴリキイの描いた農民のやうに雄辯に語り出す時が、やがて来るであらう。いや、彼等は、恐らくそれと言葉では語るまい……。

## 作家の意識

ヨハン・ポオエルの『世界の顔』といふ小説を邦譯で讀んだ。此の小説の主人公ハロルド・マルクといふ青年は、常に、廣汎な、餘りに廣汎な世界的意識の爲めに苦しめられる。彼はカフェの片隅に坐つて、世界の新聞を讀み耽る。彼は、新聞の上に世界の顔を見る。ヴァルバイゾでの同盟罷工、バルセロナでの謀叛一揆、モスコオでの捕縛、メソポタミヤでの基督教信者の虐殺、米國でのトラストの横暴——斯ういふ事件が、次から次へと彼の眼の前に展開せられ彼の意識を奪ふ。全世界の心臓が彼の心臓に鼓動し全世界の悩みが彼の悩みとなる。彼の醫學の研



究も、彼の若い細君に對する愛情も、皆、この世界的意識に食ひ盡されて、徒らに大なる理想は、徒らに彼の心を苦しめる。——さういふ主人公が、この小説には描かれてゐるが、かくの如きは、慥に現代の一タイプであるに違ひ無い。古い言葉で云へば、天下の憂ひを憂ひとするといふやうな、一種の志士の風格をもつた青年達が、日本にも近頃は澤山出て來てゐる。たとへば原首相を暗殺した中岡良一君の如きも、未熟でこそあれ、畸形的でこそあれ、矢張その種のタイプに屬する青年の一人に違ひ無い。

それにつけても、考へられるのは、わが文壇の作家達の意識の狹隘さである。この點で、今の日本の文壇の作家達は、遠く、若い時代から置き捨てられてゐるといふ感じがする。彼等の意識の狹隘さは作品に示される彼等の視野の小さくによつても證據立てられる。彼等の描くところは彼等自身の身の上話でなければ、彼等自身の日常生活であり、若くはそれ等の延長でしかない。樂屋落小説に對する非難は、既に一二年前に發せられたが、今もなほ樂屋落とまでゆかなくとも、それに近い内幕小説が、文壇小説が、彼等達の仲間小説が、かなり流行してゐる。仲間を離れ、文壇を離れ、内幕を離れたものも勿論澤山あるが、それ等と雖も、この現代生活の

ほんの小部分をしかとり入れてゐない。従つて、高所大所からの文明批評などといふものは、藥にしたくも見られない。彼等は皆、壺中の天地に閉籠つて、その中で、呑氣な技巧論、描寫論などを繰返してゐるのである。

この視野の小ささは、即ち、意識の狹さを示すものである。意識の狹さは、生活そのものゝ貧弱さに起因するであらうが、第一の原因は自然主義の教へた個人主義が未だ彼等の心から脱けきらない爲である。而して、また、同じく自然主義の教へた經驗主義が、作家の體驗を経験的事實の上に局限して、その發想の縦横を妨げた事も、一つの原因として指摘し得るだらうと思ふ。とにかく、我々は、もつと視野を大きくし、意識を廣くしなければならぬ。でなければ力ある藝術を生む事は出來ない。

### イバネスとポオエル

佛蘭西人の特質の一つとして實行的といふ事が擧げられる——といふ事を、此間吉江孤雁氏



から聞いた。ナポレオンの如き、實行的の天才だといふ意味で、いかにも佛蘭西式だと考へられる。佛蘭西が實行的なのに對し、露西亞が思想的であるといふ事は、たとへば、トルストイなどをもつて來て考へればよくわかる。實行的な點で、ナポレオンが佛蘭西式の天才であるに對し、思想的な點で、トルストイは、いかにも露西亞的天才である。

丁抹の王子ハムレットと、西班牙の貴族ドン・キホオテとの對照——そこには、更に露西亞と限らず佛蘭西と限らず、北方と南方との、彼は思想的にして、此は實行的なる一般的傾向が看取されるやうに思はれる。最近讀んだ（勿論、例によつて不完全な邦譯で匆卒の間に一讀過したに過ぎないのであるが）イバネスとポオエルとの二作家の作も、その兩者を比較して見ると、南方的——實行的、北方的——思想的といふこの事實が、そこに看取されるやうである。イバネスがいかにもドン・キホオテ式なるに對し、ポオエルには、ハムレット的なところが多い。かう考へて來て、さて、日本などはどちらか？ と顧みると、どちらでもあるが、どちらでもないといふ、甚だたよりない、心細い結論になりさうである。ハムレットにもなれなければドン・キホオテにもなれず、トルストイにもなれなければ、ナポレオンにもなれない。甚だ面白くな

い國民だといふ事になりさうである。こんな事は、今更云ふまでもない事ながら、偶々イバネスとポオエルと讀んで感じたまゝ、一寸、こゝに書きつけておく。

### チ エ ホ フ

此頃讀んだ本で、面白かつたのはチエホフの書簡集である。チエホフばかりではない、外國の文豪の書簡集といふものを讀んでいつも感じる事は、彼等がいかにもよく手紙を書くといふ事だ。立派な、長い手紙を、しかも數多く書いてゐるといふ事だ。チエホフなど忙しい、忙しいと云ひながら、原稿紙にしたら五六枚もあらうと思はれる手紙を無數に書いてゐるのを見ると、何と云つてもその生活には餘裕があつたやうに思はれる。いや、生活の餘裕ではない、心の餘裕だ。かういふ心の餘裕が日本の今の文壇の人々などにはひどく不足してゐるやうに思はれる。

さて、チエホフの手紙を讀むと啓發されるところが澤山ある。平常からチエホフの小説を愛



讀してゐる者は、この書簡集から、彼の小説の樂屋を覗き込んで「成程！」とうなづく事が出来るだらう。チエホフはその小説に於てと同様、この手紙に於ても實に正直だ。チエホフは、本當に正直な人である。而して、チエホフの此の正直さは、彼が平凡に安住したところから來てゐる。彼は、些かともえらがない。偉大がらない。而して、そのえらがないところ偉大がらないところに、チエホフのえらさと、偉大さがある。——それが、彼の手紙を讀むとはつきりと看て取られる。

「この世の偉人の哲學なんか惡魔に食はれる！」と、チエホフはその手紙に書いてゐる。而して、トルストイの或る述作に對する彼の反感を明白に表明してゐる。トルストイが偉大を目標として進んだ偉人であるのに對し、チエホフは平凡の中に安住した偉人であつた。私は勿論トルストイの英雄的精神を讚美する。がチエホフの飽迄も庶民的な民衆的な、謂はゞ凡人主義ともいふ可きものに對してより、深い愛敬の念を有つ。而して、よく世界を救ふものは、その前者でなくして後者である事を、即ち、トルストイの英雄的精神でなくして、チエホフの凡人主義である事を、私は信ずるものである。

「トルストイの道徳は私を動かさなくなりました。心の底では之に反對の態度を執ります。私は農民の血を私の血管内に藏して居ります。ですから農民の徳を以て私を驚かすことは出来ません。」とチエホフは書いてゐる。又、「あゝ！私は遂にトルストイ宗にはなれない。私は女には何よりも美を愛します。また、人類の歴史には絨氈、彈條はねつきの馬車、鋭い機智に現はされた教養を愛します。あゝ！急いで老人になり、大きな卓子に向つてゐたい！」とも書いてゐる。絨氈や、彈條つきの馬車は、いかにも小市民的だが、此の率直な表白には人を微笑させるものがある。此のチエホフの書簡集(云ひ忘れたが、私は内山賢次君の翻譯で讀んだのである)の可成りの部分は、彼の壯年期に於けるサガレン行の旅信によつて占められてゐるが、千里の惡路に馬車を驅つて、サガレン島に流刑人の状態を視察したあの心持の中には、いかに強い人間愛が動いてゐる事か？ 虐げらるゝ者、苦しみ悩める者、告ぐる所無き者に對するいかに多くの涙が藏されてゐることか。トルストイは神の如くに憐れむ。チエホフはあくまでも人間として共に哀しむ。トルストイの「農民の徳」は畢竟借りものに過ぎないが、チエホフの「農民の徳」は、彼の生來のものである。「農民の徳」といふのを、私はこゝで「庶民の徳」といふ一般的



稱呼に改めよう。庶民の中に生れ、庶民と共に生きて、庶民の徳を血管の内に藏したところに、ここに、チエホフの強みがあり、チエホフの私達の心に訴へる力がある。

チエホフは、自ら「夙に信仰を喪失し、信仰を有する知識階級に接する毎に當惑する私」と云つてゐる。チエホフの懐疑的、乃至虚無的傾向に就いては、ここで今さら云ふ必要はない。が、しかし、チエホフは常にその心に神を、彼自らは意識せざる神を抱いてゐた。トルストイの場合にもさうであつたやうに、彼の藝術そのものは、彼の思想を超えてゐた。而してまた、彼の生活そのものもまた彼の思想を超えてゐたと云ひ得るかも知れない。チエホフの手紙を通じて、彼の生涯を見ると、所謂「言に訥にして行に敏なる」一個の君子人が描き出されるのである。

曾て、廣津和郎氏が、トルストイをチエホフと並べ論じて、トルストイが猥りに範疇を設けて、人間の本性の自然な流露を阻まうとしたのを難じた事がある。トルストイの如き生活力の漲溢に苦しむ人に於ては、あゝいふ風な範疇主義も亦止むを得なかつたらうと思ふ。洪水の虞のある大河の爲めには、堤防の必要があるのだから——が、そこへ行くとチエホフは、さら／＼

と優しい音をたて、流れる野川の水のやうだ。彼は、草を縫ひ、灌木に隠れて、どこまでも自由に流れて行く。實際、トルストイに較べると、チエホフはいかにも自由だ。自由で、而して、その中に自然の調和を有つてゐる。トルストイは常に怒つてゐる。チエホフは常に微笑してゐる。

「……私は朝五時に起きます。老人になつたら、私は屹度四時に起きます。早朝に起きる者はひどく騒々しいやうですね。だから私も騒々しいせかせかした老人になることでせう。」とチエホフは書いてゐる。「あゝ！ 急いで老人になり、大きな卓子に向つてゐたい！」とも書いてゐる。小説でもチエホフは好んで老年を取扱つてゐる。チエホフは、老年といふものについて、かなり強い憧憬を寄せてゐたやうに思はれる。あの調和と平穩との老年の境地は思ひ邪無よこしまき少年の世界と共に常にチエホフの夢に入るところであつたと思ふ。それにしても彼が四十幾つかで死んでしまつたのは残念である。トルストイのやうに八十までも生き延びたなら、どんなにいゝおぢいさんになつた事だらう。



## 夢 想

一六〇

「常に海中を泳いでゐる者は陸を愛します。常に散文に浸り切つてゐる者は熱烈に詩を愛します。」と、チェホフは云つてゐる。また別のところで、「陰鬱で寂しい人は常に快活に書く、然るに生を享樂する人はその憂鬱をその作品の中に現はすといふことが云はれてゐます。」と云つてゐる。これ等の言葉は、作者の人と藝術との相關に就いて、半面の眞理を語るものとして興味深い。

ある人の作を讀んでその人並にその人の生活を想像する。ところが實際に就いて見ると、すつかりその想像を裏切られるといふやうな事が屢々ある。かういふ事實から藝術はその人を示すもので無いと斷するのは一應尤もである。哲學の方でも、たとへばニイチエのその如きは、全く反性格の哲學と云はれる。藝術に於て哲學に於て、人が全くその性格なり生活なりと反對なものを示すといふ事は屢々見られる事實である。誰であつたか、藝術は一種の補足作用で、

實生活に足りないものが藝術に描き出されるのだと云つたが、寔に藝術は補足であり、同時に又叛逆である。

が、しかし、此の事實は、恐らく次のやうに解釋するのが、本當であらう——藝術に於て示された、その人乃至その人の生活こそ、本當のその人であり、その人の生活であつて、さうでないものは、本當のその人、乃至その人の生活ではないのだと。換言すれば、人は、その藝術に於てのみ本當に生きることが出来るのである。自由と創造との無いところに、存在はあつても、生活はない。而して、人が眞に自由であり創造的であり得るのは藝術の世界だけである。従つて人が本當に生き得る世界は、藝術の世界を措いて無い。(斷つておくがこゝでは藝術を自由と創造との象徴と見ていふのである。「自由と創造」的、即ち「藝術」的、といふほどの見方に於て云ふのである。偏に、藝術そのものに囚はれての立言ではない。)

人はその藝術に、その人の魂からの要求を描き出す。憧憬と、夢想とを描き出す。而して、その要求、憧憬、夢想の中にこそ本當にその人のいのちが生きてゐる。その中にこそ本當にその人の生活がある。その人がある。私はさう考へる。



藝術が、單なる現實生活の記録であつてはならない。私は藝術の基礎としてのリアリズムを尊重するが、そのリアリズムは、さういふ現實生活の記録に終始するものではない。藝術は、樹木の如く天に伸びる。而して、その頂點に於ては憧憬であり夢想である。而して、その憧憬と夢想の中に眞の作者のいのちが生き、而して、そのいのちは未だ知られぬ世界を孕む。そこに藝術の豫言的使命があるのである。

### 偏倚性の尊重

現下の文壇、少なくとも小説界を見渡した時、最も著しく目につくのは、變り種を尊重する傾向である。思ひ切つて變つた作風をもつた作者が歓迎せられる。藝術としての優劣などは兎に角として、先づ一風變つたもの、特色の際立つたものが良いとされる。否、變つてゐるほど、藝術としても亦すぐれたものと認められる。——これは争はれない事實である。

自然主義時代の作品のやうに、どれもこれも似たり寄つたりで、作者の名前をどうとりかへ

ても一向差支へが無いといふやうなのは勿論困る。さういふ、無味、無臭、無色の作品に食傷したところから、反動的に、今度は何でも變つたものが要求されて來たのは、必然の結果である。だが、「變つたもの」即ち「作者の特色のよく出てゐるもの」と考へるのは間違ひである。また、「作者の特色のよく出てゐるもの」即ち、「傑れたる藝術品」と考へるのも、「作者の特色」そのものを検討する事を忘れた場合にはかなり危険な考へ方でなければならぬ。

變り種の尊重は、云ひ換へれば、偏倚性の尊重である。——少なくとも、現文壇のそれに就いてはかう云ひ得る。偏倚的なところにも、勿論面白味がある。片輪の面白味といふものはなかなか深刻な面白味である。だが、藝術に於て、只管に、この片輪の面白味に耽る時、藝術は墮落する。

私の考へるところでは、(私の考へるばかりではない、先人の多くが繰返して云つてゐる事であるが)藝術は、矢張、その底に健全性をもつてゐなければならぬ。健全性を缺く藝術は、どんなにすぐれたところをもつてゐても、畢竟、二流三流以下のものである。健全性は、同時に平常性である。健全なる平常、先づそこに大根を張つて、さて、それからの特色の發揮が、



眞に藝術を價值づける。眞に「特色的」と云ひ得るものはこゝに發する。而して、この意味に於いて、はじめて特色的なれば特色的なるほど傑れてゐる、といふ斷定が下されるのではなからうか。

如上の見地に立つて、現下文壇を見渡すと、そこに變り種はある。偏倚的の面白さをもつたものはある。けれども、本當に特色的だといひ得るものは、案外少ないやうに思ふ。これは、私だけの僻目であらうか？ もし僻目だとすれば、私は、自家辯護の爲めに、此の説をなしたと嗤はれても仕方が無いが――。

### 小説家的幻想

ドオデエの『巴里の三十年』といふ本はなか／＼面白い本である。その中に、こんな文句がある。――人生を解釋することを仕事にして居るその俳優なるものは、奇體にも却つて往々にして萬事を誤解し、實世界のやうに生き／＼した明暗のない因襲的な舞臺的幻想に囚はれてしま

ふのである。

別だん、奇抜な言葉でも何でも無いが、俳優が舞臺的幻想に囚はれるやうに、小説家も原稿紙的幻想に囚はれる事が多い事を此の言葉から考へさせられた。實際、あまりに小説家らしく活き、小説家らしく観、小説家らしく考へ、而して小説家らしく表現するところに小説家の何よりの危険がある。古來の偉大な作家の中にも、随分、かういふ小説家幻想に囚はれてゐた人が多いやうである。

先づ何よりも人として生きなければならぬ。幾度も繰返された言葉だが、矢張、これが大切なのである。



## 藝術と普遍性その他

何か感想を書かないか？ とKI君に云はれて、その時もKI君に話した事があるが、どうも感想を書くなどといふ事は、えらい人のする事で、私などのやうな未熟な人間のする事では無いやうな氣がする。人としても十分に出来上り、理解も深く見識も高い人であれば、所謂咳唾玉を成すで、心の赴くまゝにそこはかとなく書きすさんだものにも、一般的讀物としての價値があるのだらうが、私共のやうな、咳唾石にもならぬやうな境地にゐる輩が、筆に任せて書いたところで、何うにもなるものではない。「おれは斯う思つた。」と書いたところで、「成程それで、一體、それがどうしたといふのだ？」といはれる丈けのもので、毒にも藥にもなるものではない。一體、感想とか隨筆とかの興味乃至意義は、その背景をなすところの筆者の人格乃至生活によつ

て限定される。勿論、感想隨筆のそれと限らず、小説にしろ評論にしろ、すべてが、皆さうなのであるが、殊に感想隨筆に於てさうなのである。といふのは、感想や隨筆は、より直接的な表現であり、より直説法的な表現であるからである。だから、トルストイとか、兼好法師とか、近松秋江とかが書いたものならば、興味もあり意義もあるが、くだらない人間ども——つまり未熟な人格、平凡な生活からの、感想や隨筆は、犬の食ひ物にもならないのである。それ等に興味があり、意義があるとすれば、それはその書いた人間にとつて丈け、興味があり意義があるに過ぎない。畢竟、謂ふところの一家言に過ぎない。

一家言は一家言である。自分の爲めのものである。

が、自分一家の興味乃至意義から書かれたこれ等一家言が、一般普通の讀者に向つても、また十分に興味あり意義あるものとなり得る場合がある。その筆者が、人として十分に出来上つてゐる場合がそれであつて、さういふ場合には、たとへば『徒然草』に於けるが如く、つれづれの餘りに日ぐらし硯に向つて書き散らしたその感想隨筆が、十分に一般的興味と普遍的意



義とを帯びて來るのである。「徒然草」は、はじめから、それを讀む人の事などは考へず、唯、自分一家の爲めに書いたものであるが、筆者のすぐれたる人格と生活とは、その一家言をして一般的普遍的の性質を帯びしめてゐるのである。

私の信ずる處によれば、この一般的普遍的の性質を帯び來る時、その述作は、どんな形式のものにせよ、それは既に藝術の域に入つてゐる。その意味に於て、「徒然草」は、立派に藝術品となつてゐる。

その反對に、たとへ、小説とか、詩とか、その形式に於ては、藝術品となつてゐても、その實質が、唯、作者その人丈けの興味乃至意義に留まつて、十分の一般化普遍化を有つてゐないものがある。さういふものは、どんなに形式に於て藝術らしく出來あがつてゐても、それは藝術ではない。

通俗といふ言葉をこゝに持ち出すのは、誤解されさうで一才危険だが、私は以上に語つた意味の一般性、普遍性——その限りに於ての通俗性が、藝術を藝術たらしむる最も大切な性質だと考へる。この點に於て、私はトルストイの藝術論の、かなり忠實な信奉者である。

そこで一寸考へて見たいのは、實感といふ事である。

自然主義の勃興時代に、性慾描寫といふ事が盛に唱へられて、田山花袋の『土手の家』だの、國木田獨歩の『正直者』だの、さては佐藤紅緑の『鴨』だの、随分際どいところまでの描寫が現はれた事があるが、其時性慾描寫の上に下された甲是乙非の議論の中で、よくこんな風の事が云はれてゐた。「甲——の性慾描寫は、實感的だからいけない。乙の性慾描寫は、實感的でない。よく藝術化されてゐる。だから挑發的でない。乙——のやうな性慾描寫なら風俗壞亂の虞などは些ともなく。」

ところが、近頃の作品評などを見ると、よく、こんな風の議論に出ツくはす。「A——の作にはいかにも生々しい實感が強く出て居ていゝ。」「B——の作は、どうも實感がよく出て居ないので、感銘が稀薄だ。」

彼と此と思ひ合せると、どうも腑に落ちない。其他のこの描寫には、實感的なのがよくて、性慾の描寫だけには實感的ではないけないといふのか？ 性慾もまた人生の一事實一現象である以上、たゞそれ丈けについて特別扱ひを要求するとは、内務省の圖書檢閲係ではあるまいし、へ



んな事である。

實感は勿論大切である。實感が無ければ藝術は生れないと云へる。だが、唯、實感を實感として書いただけでは、それは藝術にはならない。實感が唯實感として存在する時、それはたゞその一人の人にのみ屬する。

實感を實感として表現したのは、畢竟一家言に過ぎない。否、實感を實感としての表現は、嚴重な意味に於てこれを表現とは云へない。一家言を一家言たらしめない爲めには、そこに一般性普遍性を帯びしめねばならぬ。實感を唯實感としてのみ終らしめない爲めには、即ち單にその人丈けのものとして終らしめない爲めには、矢張、そこに一般性普遍性を帯びしめねばならぬ。而して、その一般性普遍性を帯びしむるものが藝術である。逆に云へば、實感は藝術化を俟つてはじめて一般性普遍性を帯びて來るのである。

感想隨筆等の一家言に一般的普遍的性質を帯びしめるものは、その人のすぐれたる人格乃至生活である。實感に一般的普遍的性質を帯びしめるものは、即ち實感を藝術たらしめるものは——矢張その人のすぐれたる人格乃至生活でなければならぬ。すぐれたる藝術は、すぐれたる人格からのみ生まれる。ここに、藝術家としての人格と、人としての人格との相結ぶものがあるのである。

實感々々と叫び求めるのはいゝ。が、その藝術化を疎んずる時、その作品は、單なる一家言小説、感想小説に墮して了ふ。永久に、所謂イツヒ・ロオマンの境地を脱する事が出来なくなつて了ふ。現下文壇には、實感主義者が多い。しかし、此の種の、イツヒ・ロオマンといふにすら價せぬ一家言小説、感想小説がかなり澤山あると思ふ。

藝術は個人主義の最も完全なる表現である——といふ意味の事を、たしかオスカア・ワイルドだかが云つてゐる。(言葉も言つた人も、はつきりと覚えてゐない。違つてゐるかも知れない。)この言葉は、一應は是認出来る。藝術は、何よりも先づ己れ自身のものでなければならぬ。「思ふ事云はぬは腹ふくるるわざ」——その隨筆の延長でなければならぬ。延長と云つて



悪ければ、擴大でなければならぬ。自己の衷心からの純眞の要求から出發したもので、その出發點を忘れて、他に仕へたり、讀者に媚びたりする時、その藝術は墮落する。一般性普遍性——通俗性が必要だといつても、それが現下の所謂通俗小説のやうに、また通俗小説でなく所謂藝術小説と稱するものの中の、通俗小説よりもつとひどいものやうに、作者が、意識的に讀者に接近して、外面的な妥協を遂げたものでは駄目だ。さういふものゝもつた一般性、普遍性——通俗性は、衆愚の愚につけてこんで信徒の數を殖やさうとする淫祠邪教のもつところと同じ性質の一般性普遍性——通俗性である。

上求菩提即下化衆生。あくまでも自家衷心の要求に従つて、上に菩提を求むる時、自ら普ねく下に衆生を化するの道を得るのである。一人の心は萬人の心、その根本の生命に徹した時、個と全とは一體となる。そこに、宗教の極致があるやうに、又、藝術の至境がある。而して、一家言の隨筆感想が、一般的興味と普遍的意義とを帯び來る所以はそこにあり、實感に知る事益々深くして、しかも藝術味隨つて益々豊かなる境地も亦そこにあるのでは無からうか。

通俗藝術とか民衆藝術とかの問題も亦こゝにある。何も、作者の方から調子をさげて、作者の藝術的神通を、民衆的常識の埒内に沮むに及ばない。そんな事するのは明かに藝術の墮落である。眞の通俗藝術民衆藝術はさういふ墮落藝術であつてはならない。たとへばドストイェフスキイの作品を見よ。あれほど特殊の實感に深入りした作品はない。が同時に、あれほど廣く萬人の胸に沁みわたる作品はない。本當に藝術的、しかも本當に通俗的、否本當に藝術的なが故に、本當に通俗的であり得たのである。作者の個と、民衆の全とが、根本的な深い處で相結んでゐるのである。

島村抱月は「在るがまゝの現實に即して全的存在の意義を髣髴す。觀照の世界也。味に徹したる人生也。此の心境を藝術といふ。」と云つてゐる。

實感が實感としてとどまる時、それは單なる箇に過ぎない。その箇が、背後に全存在の意義を髣髴させた時、即ちその箇が全を負うてゐる時、それは單なる實感の域を出で、藝術となるのである。

この意義に於て、片上伸氏などの云つてゐるやうに、あらゆる藝術は象徴である。



藝術も象徴であり、宗教も象徴であり、また、心の欲する處に従うて規を越えぬといふ境に至れば、道德も亦象徴である。之を要するに、最もよく生きられつゝある人生は、人生それ自身象徴であると云へる。

こんな事を言ふつもりでは無かつたが、つい、調子にのつて、下手の長談議をしてつた。何だか、解りきつた事を繰返したやうにも思はれれば、覺束ない理路を辿つて來たやうにも思はれる。云ひ方が粗雑で、言葉の足りないところはあるかも知れないが、とにかく感じてゐる事だけは云ひ得たつもりである。

(十一年九月)

## 藝術と實行

「云つたり爲たりは出來ない」といふ。それはさうかも知れない。「口も八丁、手も八丁」ともいふが、多くの場合、口と手とは反比例に伸縮する。

だから、藝術の徒は畢竟口舌の雄である。言に敏にして行に訥なるの輩である。若しくは言に勇にして、行に怯なるの輩である。平つたく云へば、云ふだけで爲ることの出來ない、口だけ八丁で手はゼロといふ手合なのである。

勿論、藝術といふものはそんな狭いものではない。藝術的精神は、あらゆる活動のうちに見せらる可きものであるが、こゝでは假に、藝術を實行と對照させて、述べあらはすところの、謂はゞ「紙上の業」と見て立言してゐるのである。斯く、藝術對實行の問題として見る時、藝



術と實行とは、彼の一步を加ふる毎に、此に一步を減するやうな關係になる。手と口とが、反比例に伸縮する如く、實行と藝術とは、反比例に伸縮するのである。藝術も實行も、それが表現である事にかはりない。見方次第で、藝術も一つの實行であり實行も一つの藝術である。人は、ある一定量の表現をしか有ち能はぬとすれば、藝術と實行とが常に相殺するの理は、自ら明かである。「云つたり爲たりは出來ない」といふ言葉は、この意味で眞理である。

——いや、こんなわかり切つた事を今更云つたつて仕方が無い。が、二三日來の新聞を賑はしてゐる共產主義者の祕密結社事件に、唯一人の、所謂プロレタリア文學者の連座者を見なかつたのが、妙に心淋しい氣がしたので、ついこんな事を云つて見る氣になつたのである。

心淋しい氣がしたとは云つても、何も強ひて不足を云ひ度いのではない。それはそれでいゝのであらう。高山彦九郎は、「遙かに皇居を伏し拜んで」涙を流しただけでも、たしかに明治維新の先驅者には違ひ無かつたんだから。

明治大正の文學を大觀して、私は、三人の時代區劃者を擧げようと思ふ。北村透谷と、正宗白鳥と、武者小路實篤とである。透谷は新しい感情の、白鳥は新しい理智乃至神經の、實篤は新しい意志の、それらの創造者であり、指導者であつたと思ふ。私は必ずしも三者の藝術に隨喜するものではないが、この三つの道標としての三者の位置は認めずにはゐられない。

藝術を意志にまでもつて行つて、藝術から實行にはひつた最初の人としての、武者小路實篤の業績は、これを「新しき村」に見ることが出来る。「新しき村」に到つて、實篤は藝術家から實行家となつた。少なくとも、實行に一步を近づいて、藝術から一步を遠ざかつたのである。ここに云ふ藝術とは、前に云つた「紙上の業」としての藝術を指すので、藝術を廣義に解すれば、今まで筆で書いてゐた藝術を、行爲で書きはじめたのである。たとへば、ダンヌンツィオのフューメ占領なども、行爲で書いた藝術である。ナポレオンの全歐征服も、この意味に於て行爲で書いた藝術かも知れない。「筆を捨て、我軒に従ふ」といふが、藝術は筆ばかり書くものではない。我軒に従ふことも、亦一つの藝術でないことはない。藝術から實行にゆくことは一面、藝術から遠ざかることであると同時に、一面より深く藝術に徹する道であるかも知れない。よ



り深く、より深くと徹して行つた時、藝術は生活そのものに吸収されて、生活即ち藝術の境地に達する。生活即ち藝術の境地には、特に藝術といふものは存在しなくなる。私は、「紙上の業」なる藝術の外に生活と一如の大藝術あることを知つてゐる。

新代の文藝には意志的要素が多い。感情の文藝、理智乃至神経の文藝は、今や意志の文藝によつて代られんとしつゝあるかに見える。しかし、「意志の文藝」といふ言葉は、藝術を實行と相對したものと考へるならば、それ自身のうちに矛盾したものを含んでゐる言葉である。傾向文學の極致が、非文學である所以はこゝに存する。傾向文學は、畢竟實行を豫想する文學である。實行に一步を近づけば、文學に一步を遠ざかる。傾向文學は、文學それ自身を失ふの道に進んで居る文學である。要するに自殺文學である。自殺した後、はじめて大に生きる文學である。

プロレタリア文學——當今多くのプロレタリア文學者が主として唱へつゝある意味に於ての

——は、畢竟傾向文學であり、傾向文學は、文學を失ふところに意義を完成する。プロレタリア文學は、實行にまでもつて行かれてはじめておちつく。

私は、もとより三條橋上の高山彦九郎を尊敬するものである。——しかし、今度の事件に、唯一人の、プロレタリア文學者の連座者を見なかつたといふやうな事實に對しては、矢張ある心淋しさを感じざるを得ないものである。

(十二年七月)



## 彼等は笑ふ

——農民に對する一つの考案——

—

東京を西北に十七八里、××線と××鐵道との交叉點に近い一寒村が私の生れ育つた郷土である。私がそこへ歸るのは年に二三度しか無い、併し私はこの東京での私の日々の生活が常に緊密なつながりをあの郷土に有つてゐるのを思ふ。私の最も想ふものは、あの郷土の農民達の生活と運命とである。あの貧しき人々、苦しき人々、「灰色の族」<sup>グレイ族</sup>とでも呼び度いやうな人々の中には私の最愛なる父母と兄弟とがある。父母と同様に私を愛撫して呉れた「をぢさん達」がゐる、兄弟と同様に、その少年の日を共に過した若者達がゐる。私はあの人達をわすれる事が出

來ないのである。あの人達の生活と運命とのあまりに悲惨なのを思ふ時、私の胸は常に痛みを感ずる。私は、今、義人のやうに「彼等の爲に！」と叫ぼうとしては、あまりに自分の心に濁り多く、自分の信念の力弱きを顧みてひそかに赤面しなければならぬ状態にゐるものであるが、兎に角（などいふ不徹底な言葉を姑く許して貰ふとして）私は、あの人達のことを考へてゐる。さうして、どうかしなければ、と始終思つてゐる。あの人達の問題が直に、自分自身の問題であり、自分自身の問題が、直にあの人達の問題であるやうな氣がしてゐるのである。あの人達の爲めに——爲め、といふ事は、今の私としては、到底僭越であり、或は一の滑稽事さへあるであらう。併し、私は常に心の底に、彼等と共に苦み、彼等と共に生きて行かなければならぬ要求を感じる。「わが心は山林にあり。」と或る詩人は歌うた。私は敢て、「我が心田園にあり。」と云ふであらう。

汽車は武藏野を横斷してH町に着く。H町から××線に乗りかへた第一の一小驛で降りると桑畑の間をうねる一里半の縣道が、そこから私の村に續いてゐる。人力車の便はあるが、私は、村の人達の眼から見れば、恐ろしく贅澤なあの乗物に乗つて閭門に入る事を恥づる。私は大抵、



その間を歩いてゆく。——ある時、改札口から出た私を遮つて、『旦那、いかゞです、お廉く。』とすゝめる若い車夫を見ると、それは、あの丘の上の小學校で八年間一緒に學んだ級友の一人であつた。私は、彼が私を見忘れてゐるのだと思つた。併し、彼はなつかしさうに繰返した。『久振りでお擦りですね。お廉くお供ませう。旦那。』私は其刹那激しい羞恥を感じて、黙つてその前を摺りぬけた。彼も貧民の子である、私も亦貧民の子である。「旦那」とは何といふ皮肉な言葉であらう。勿論、彼は皮肉のつもりでも何でもなく單に職業の習慣上さう云つたに相違ないが、それ丈けに、私にはそれが一層皮肉なものに響いたのであつた。

私はいつも、いろ／＼の事を考へながら、その一里半の道をとぼ／＼と歩くのである。去年の秋の末、その夕は雨あがりで、野中の道はひどく泥濘ぬかつてゐた。私は、その泥濘の道を辿りながらの感想を、その當時の日記の端にかきつけて置いた。

〔(人生の泥濘)——自分の心には、ふとこんな言葉が浮んだ。おれの内生活を最も適切に象徴するものは此の泥濘の道だ。さうだ。おれは今人生の泥濘を辿つてゐる——。嶮山怒濤といふやうなセンセショナルな、景氣のいゝ文字で形容される人生を想ひ描いて、立志とか成功と

かいつ言葉を標語としたあの頃の踴躍するやうな心に較べれば、何といふ惱ましい、煩らほしい今のこの心であらう?——私は一步々と踏みなづみ乍らこんな事を考へた。ほんたうにひどい道であつた。馬力車の轍の跡が深い溝を作つて、捏ねかへされた泥と、ごろ／＼とところがる石ころと、處々に湛みづたまりへられた行潦みづたまりと——。一足は磁石で吸はれるやうに泥に吸ひつけられる、一足は思ひがけない深みにびしやりとはひる。爪皮の半ば迄濡れひたつて、氣味悪いはねが踵をこそぐる。私は一足々々をもち扱ひ乍ら、ゆつくり／＼と、足首の抜けさうな重い歩みを運んだ。而して此の迪々しい歩みが、今、生れた村に歸らうとする自分の心持と丁度調和してゐるのを感じた。此の道が、こんな歩みづらい道で無かつたとしても、私はこれより早くその歩みを運ぶ事は出来ないに違ひ無い。私の心は始終、故郷の土にひきよせられてゐる。(あのがたがたと揺れる、煤だらけの汚い汽車の幾十哩と、而してこの泥濘の一里半と、それがいかに斷ち難き連鎖となつて私と、あの郷里の村とをつないでゐる事であらう!) それにも係らず、私の足はこの道に來ると妙に澁しぶつて來る。ひきかへし度くなりさへする。何處へ行かうとするのだ? 彼處に待つてゐる者は唯お前の眼と心とを傷ましめるいろ／＼のうるさい下らない事ば



かりだ。お前は、何しにあの不愉快なところへ歸つてゆくのだ？ 私の一つの心は斯う云つて私を引戻さうとする。併し私は矢張この泥濘の中を、寒い風に吹かれ乍ら歸つて行くのであつた。

## 二

今年になつてからは忙しいので、私は未だ一度も彼處に歸らない。あの泥濘の道の感想を私の心に齎らした昨年秋の末の訪問が、最近の訪問である。あの時私は、私の最も親しい「をぢさん達」の一人の老いを見舞ふことを、私の歸郷の目的の一つとしてゐた。

一しきり騒いだ野分がぱつたりと止んで、し、い、んと静まりかへつた夕暮である。黄色い殘照の影が、水のやうにすべてを浸して、つい近くの屋根や樹立をも、遠い陰影に描き出してゐる。歸りおくれた鶏の白い羽が、浮き出すやうに鮮かに見える畑の中の小徑を辿つて、私はそのをぢさんの家を尋ねた。空洞のやうな家内の薄闇の中に、爐の火がちろちろと燃えてゐた。野に出た人達は未だ歸らなかつた。をぢさんは、その爐傍に、ぼ、つ、ね、ん、としてうづくまつてゐた。

「おうく、よく來て呉れた。」

さう云つて、喜びの聲をあげるであらうことを豫期した私は、懶げに首を廻らして、闇の中を掻き探るやうにする。そのおびえたやうな眼付の力無さに先づ驚かねばならなかつた。「あ、誰かと思つたら——」。漸くさう云つた聲も、重く沈んでゐた。近頃はすつかり弱つた、野へも出ず、起きたり寝たりしてゐると折々の書信に聞いてはゐたが、これほどひどく弱つてゐようとは思はなかつたのである。灯もつけない、暗い爐側で、私は言葉少なくてをぢさんと相對してゐた。

このをぢさんの家と私の家とは別に血縁の親戚といふのでも何でもないが、近所同志でも殊に親しく交際する間柄で、をぢさんの息子と私とは、子供の頃は無二の仲好しであつたし、このをぢさんは、近所の多くの「をぢさん達」の中でも、最も深く私を愛して呉れた人である。篠竹の鐵砲を拵へて呉れたり、蜂の巢や木莓の實をとつて來て呉れたり、又、雨の日の納屋に繩を綯ひながら、面白い昔話しを話して聞かせたりして、私の少年の日の樂みにいろく、の色彩を添へたのはこのをぢさんである。をぢさんは話上手であつた。而して、をぢさんの話には、その言葉や表現のしかたに獨特な面白味があつた。その話は、皆おどけた、突飛な、腹を抱へて笑はず



にゐられないやうなものばかりであつた。一體にをぢさんは、快活な諧謔家で、大きな聲でよく笑ふ人であつた。私はをぢさんほど面白い人は世の中にないと思つてゐた。私にばかりでなく、をぢさんは「面白い人」として村中に通つてゐた。をぢさんの姿の見えるところには、屹度、破れ逆るやうな粗野な高笑ひの聲が鳴り響いてゐた。そのをぢさんの高い笑ひ聲の底に潜んだ、いろ／＼の悲痛を解くには、その頃の私はあまりに幼稚であつたのである。をぢさんの諧謔は人々を笑はした。が、その諧謔がいかにも悪辣なものであつたか、いかに先づ自らを嘲り更に他を刺す兩刃もっはの刃の鋭さをもつてゐたか——私がやうやく生活に眼ざめた時、私は次第にそれを感じることが出来るやうになつた。

をぢさんの次の娘は奉公先で男をこしらへて、一緒になれなければ死ぬと云つて騒いだ。をぢさんは狂氣のやうに怒つて、襟首を引摺んで土間を引摺り乍ら娘を足蹴にした。けれども、娘は、をぢさんの眼を掠めて、とう／＼男の許に走つた。三四日、をぢさんは飯も食はずに、じつと下唇を嚙んで爐傍に坐りつづけた。四日目か五日目の晩、ふらりと私の家にやつて來た時、

「うちの牝めんどりめ鶏奴。どんなにおつぷせても、羽根があるから駄目だ。(籠ン目／＼、籠ン中の鶏は——)」とをぢさんはあの子供の唄をおどけた調子で歌つて、「羽根があるから駄目だよ／＼。」と大きな口を開いて大きな聲で笑つた。

これは一例である。をぢさんの笑ひは、要するにこんな風の笑ひ方で笑はれるのである。財産差押へに逢つて、家財道具に悉く封印をつけられた時も、小作料が滞つて蒔きつけたばかりの畑をとりあげられた時も、唯一人の息子が兵隊にとられた時も、をぢさんは何かうまい警句を吐いて、而して大きな聲で笑つてのけた。顎の細い、長い顔は、笑ふ時、前歯の疎らな空洞のやうな口を開けて、唇邊の筋肉の激しい痙攣と共に、その中から、大きなしかし響の弱い聲をとめどもなく揺り出す。

をぢさんは不幸な人である。「笑ふ門には福來るつて云ふのもあてにならねえな、俺なさあ、かうして毎日笑つてゐるが——」と或る時をぢさんが述懐した事があるが、實際をぢさんは、不幸な人の世に、最も不幸な人と生れた一人であらう。私が郷里を離れてからも、をぢさんの一家には不幸なことばかりが續いた。連年の養蠶は不作で、貧窮は年毎に加はつた。男の許に逃